東日本大震災
支援活動報告書

絆

国士舘大学体育学部
国士舘大学ウエルネス・リサーチセンター
国士舘大学防災・救急救助総合研究所

目　次

Ⅰ．はじめに

災害に強い国士舘大学を目指して　学校法人国士舘 理事長　大澤英雄　3

東日本大震災支援活動報告書発刊にあたって　国士舘大学 学長　朝倉正昭　4

東日本大震災支援活動報告書発刊にあたって　国士舘大学体育学部 学部長　渡邉　剛　5

東日本大震災を振り返って　国士舘大学防災・救急救助総合研究所 所長　島崎修次　6

東日本大震災被災地ボランティア活動と国士舘大学ウエルネス・リサーチセンター
国士舘大学ウエルネス・リサーチセンター センター長　村岡幸彦　8

Ⅱ．東日本大震災への被災地支援活動

1．東日本大震災における緊急災害医療支援チームとの派遣と活動
国士舘大学大学院救急システム研究科 教授　田中秀治　13

2．被災地への医療ロジスティクスの重要性
国士舘大学体育学部 教授　杉本勝彦　22

3．学生有志による被災地ボランティア支援活動
国士舘大学体育学部 教授　川田儀博　24

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

1．国士舘大学緊急医療支援隊の派遣と活動
国士舘大学体育学部 准教授　張替喜世一　31

2．［活動記録写真集］
東日本大震災発災の翌日から活動を開始した国士舘大学緊急医療支援チーム　35

3．東日本大震災における国士舘大学での物的・人的支援
－救急医療総合研究所での医療支援プロジェクトを中心に－
国士舘大学大学院救急システム研究科 助手　喜熨斗智也　40

4．［活動記録写真集］
緊急支援隊第二陣　石巻市・南三陸町での支援活動　45

5．石巻赤十字病院での支援ボランティアについて
国士舘大学体育学部 非常勤講師　高橋宏幸　47

6．「宮城県災害対策本部災害保健医療支援室」へのロジスティクス支援
国士舘大学大学院救急システム研究科 修士課程２年　後藤　奏　52

7．「国士舘大学チーム」のこと
石巻赤十字病院 宮城県災害医療コーディネーター 石巻圏合同救護チーム統括　石井　正　58

8．南三陸町における医療支援活動
国士舘大学大学院救急システム研究科 修士課程２年　高山祐輔　60

9．東日本大震災に伴う味の素スタジアムでの避難者受入れに対する医療支援
国士舘大学大学院救急システム研究科 修士課程２年　稲村嘉昭　65

10．東日本大震災における国士舘大学での医療支援
国士舘大学大学院救急システム研究科 修士課程２年　曽根悦子　69

11．［活動記録写真集］
福島県被災者避難施設 味の素スタジアム・東京武道館・東京ビッグサイトでの医務活動　74

Ⅳ．東日本大震災でのボランティアの役割と活動

1．被災地での学生ボランティアの役割と防災教育の在り方
国士舘大学体育学部 講師　中山友紀　79

2．学生ボランティア派遣システムとベースキャンプの設置
国士舘大学体育学部 講師　永吉英記　85

3．21日間にわたる被災地での人的支援活動
国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科修士課程１年　浅倉大地　90

4．スムーズな活動を行うための過程
国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科修士課程１年　山崎源太　95

5．学生ボランティアを経験して
国士舘大学大学体育学部スポーツ医科学科４年　下田和輝　100

6．学生災害ボランティア活動報告
国士舘大学大学体育学部スポーツ医科学科３年　太田浩史　103

7．［活動記録写真集］
東日本大震災発災後の国士舘大学学生のボランティア活動　108

Ⅴ．ボランティア参加学生レポート

第１陣　４月４日～４月８日　参加学生　18名　113
第２陣　４月９日～４月12日　参加学生　18名　119
第３陣　４月12日～４月15日　参加学生　32名　125
第４陣　４月15日～４月18日　参加学生　34名　134
第５陣　４月18日～４月21日　参加学生　43名　145
第６陣　４月21日～４月24日　参加学生　42名　156

編集後記　167

Ⅰ．はじめに

１．学校法人国士舘
　　理　事　長　大澤　英雄

２．国士舘大学
　　学　　長　朝倉　正昭

３．国士舘大学体育学部
　　学　部　長　渡邉　剛

４．国士館大学防災・救急救助総合研究所
　　所　　長　島崎　修次

５．国士舘大学ウエルネス・リサーチセンター
　　センター長　村岡　幸彦

災害に強い国士舘大学を目指して

学校法人国士舘

理事長　大澤　英雄

2011年3月11日に我が国を襲いました東日本大震災では、想像を絶する多くの方が被災され、2万人近い死者、行方不明者を出しました。そして、今もなおその傷跡が癒えておりません。ここに亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を捧げると共に、必死に復興に立ち向かわれている方々や、被災の支援に当たっておられる人々に心からお見舞いを申し上げる次第でございます。

さて今回、国士舘大学は東日本大震災発災の翌日より、学内の持てうる医療資源と資機材をもって震災の支援を行わせていただきました。

具体的には、医療資格をもつ体育学部教員と職員を石巻赤十字病院や南三陸町立病院などに救急車ごと派遣して、現地のニーズに合わせた医療支援活動を行いました。また、ウエルネス・リサーチセンターでは防災・救急救助総合研究所と共同で3月12日から、教職員と学生で延べ約250名を医療サポートや復興支援の目的で宮城県石巻市、南三陸町等に派遣しました。この結果、初期の3カ月間に微力ではありますが、被災された方々への支援を行うことができたと考えております。

学生や職員の中には、その後も自主的にボランティアを行い、地域に大きく貢献した者もいると報告を受けております。また、こどもスポーツ教育学科では、文部科学省委託研究の一環として「震災時における学校対応の在り方に関する調査」を行い、大学機関として微力ながらも極めて重要な役割を果たしてまいりました。

これらの学内の防災意識の高まりに併せて、今後4年以内に70%の確立で発生が予想されている「首都直下型地震」を考えますと、これから私たち国士舘大学は、他の大学にないオンリーワンの防災拠点大学として「災害に強い国士舘」を目指して行きたいと思っております。

現在、学内で防災・救急救助総合研究所をシンクタンクとして、横断的な協議のもとに「国士舘防災計画」を策定し、教職員に災害への備えを奨励しております。また、近い将来、入学する全ての学生に「実践的な防災力：防災教育」を施すことにより、学生の防災力向上を目指す検討をしております。

国士舘は開学以来、誠意・勤労・見識・気魄を徳目に掲げ、国家の支柱となる人材を育成してまいりました。東日本大震災を契機に若者の意識が変わり、「世の為、人の為になす」事に何らかの形で関わりたいと望む者が増加していると聞いております。今、若者が求め、理想とする人物像は、まさに国士舘の育成すべき人間像と一致しております。

国士舘大学は21世紀における国士、「災害に強い人材の育成」を目指して、大学を挙げて防災教育に力を入れていく所存であります。

本誌発刊にあたり、衷心より関係各位のご協力をお願い申し上げ、挨拶とさせていただきます。

東日本大震災支援活動報告書　発刊にあたって

国士舘大学

学長　朝倉　正昭

2011 年 3 月 11 日に発生しました東日本大震災では、死者・行方不明 19130 名（3 月 2 日現在）がお亡くなりに成りました。謹んで哀悼の意を捧げると共に、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

さて、東日本大震災におきましては、発災翌日から本学の医療チームが被災地への医療支援を行うとともに、本学の 3 キャンパスでは、当日に大学首脳からなる「総合安全会議」を立ち上げ、校舎等建物の被災状況の確認や、帰宅困難学生に対する避難所の準備、さらに学生や家族の安否の確認をおこなってきました。

幸いなことに、3 月 11 日はほとんどの学部ですでに春休みに入っており、一部のクラブを除き、在校学生が少なかったことから、負傷者はおらず、発災直後の混乱は最小限度にとどまりました。また学生の安否確認においては、どの大学よりも先んじてわずか 2 週間で、すべての学生の所在と安否の確認が終了できたことは、国士舘大学の教職員の学生に対する平素からの丁寧な対応を心掛けている賜物と考えております。関係者にこの場を借りて御礼申し上げます。

私感ではありますが、震災を契機に若者の意識が変化してきているように思います。とくに「人の為になりたい」「困っている人を助けたい」「人に奉仕をしたい」を考える学生が最近、増えてきていると感じています。実際に今回の震災でも、ボランティアを行った 250 名を超える学生が、被災した家屋の片づけ、ヘドロの除去などの大変な作業を平然と行ったことからもわかるように、いまどきの学生諸君も国士舘大学生として良い資質を持っている学生が多くいることが分かりました。国士舘は開学以来 95 年、誠意・勤労・見識・気魄の四徳目の涵養を掲げ国家の柱石となる人材を育成してきた大学です。まさに今若者が求める「人を助ける強さ・やさしさ」は国士舘の育成すべき人材像と一致しております。

この冊子の発刊を前に本年 3 月 4 日には地元世田谷地域と大学・消防機関と連携した防災訓練を実施し、防災拠点大学として名前に恥じる事のない人材の育成ができていることを実感しました。今後、国士舘大学では、この取り組みを全学生・教員・職員に拡大し、大学の持てうる人材・医療機材など資源を最大限に活用し、災害や災害支援に強い防災拠点大学として諸準備や整備を進めていく所存です。関係者の皆様におかれましては今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、現在も必死に復興に立ち向かわれている方々や、今もなお被災者に寄り添い支援に当たっておられる方々に心よりエールを送り、支援活動報告書発刊に当たっての言葉とさせていただきたいと存じます。

東日本大震災支援活動報告書　発刊にあたって

国士舘大学体育学部

学部長　渡邉　剛

昨年３月１１日に発生いたしました東日本大震災で、お亡くなりに成られました方々に謹んで哀悼の意を捧げると共に、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

さて、防災・救急救助総合研究所は、国士舘大学体育学部附属研究所として、平成 23 年４月１日付で設置されました。この設置理由は、東京における大規模災害に、大学としての備えを整えること、また地域との防災計画を共有し、大学の人材や機材を有効に活用する大学拠点構想を平成 21 年頃から、体育学部スポーツ医科学科を中心に検討を行っていました。平成 23 年４月１日設置に向けて、研究所の準備を行っている中で東日本大震災が発生いたしました。そのため急遽、防災・救急救助総合研究所に所属する予定の研究員と既に大学附置のウエルネス・リサーチセンターと共同で３月 12 日から、教職員学生を延べ約 250 名を医療サポート支援、復興サポート支援に、宮城県石巻市、南三陸町等に派遣しました。また、東京に避難された方々の避難所での約 50 日に渡る医療支援を行ってまいりました。

この支援活動を通して考えなければならないことは、学生を救助活動に当たらせる場合でも、日常の防災教育と訓練を通して、地域住民と関わりをもち、お互いの信頼関係（絆）を構築しておく必要があり、この仕組み作りを大学として考えなければ、きめ細やかな支援体制が出来ないものと考えております。今後、防災・救急救助総合研究所を中心に多くの人達の協力を戴いて、より良い実践活動の出来る研究所となることを期待しております。

本学の東日本大震災支援活動を報告書として、まとめることが出来ました。この報告書が今後の防災・救急救助総合システム構築に大いに役立つものと期待しております。

最後になりましたが支援活動にボランティアとして参加された方々おひとりおひとりに、御礼を申し上げておりませんでしたので、この場を借りて御礼を申し上げます。

東日本大震災を振り返って

国士舘大学防災・救急救助総合研究所

所長　島崎　修次

２０１１年３月１１日に発生したマグニチュード（M）9.0　の東日本大震災は１９００年以降に起きた地震としては、１９６０年の「チリ地震」（M　9.5）、２００４年の「スマトラ沖地震」（M 9.1）に次ぐ３番目の巨地震で、我々の想像をはるかに超えた津波が広範囲の地域を襲い、同時に「原発震災」を誘発し、まさに未曾有の大災害となった。特に福島第一原発事故は世界中を震撼させ、各専門機関による必死の減災活動が今なお続けられている。

このような状況下、国士舘大学体育学部の付属機関としての防災・救急救助総合研究所は、行政や各種団体からの要請を受け、ウエルネス・リサーチセンターと協力し、発災直後より医療支援を行うと共に、体育学部の学生ボランティアを引き連れて被災地の災害緊急支援活動に積極的に取り組んだ。活動内容は要約すると、宮城県をはじめとする複数県にわたる災害保健医療施設支援室におけるロジスティクス支援及び現地医療施設支援である。つまり被災地内の傷病者トリアージ、病院搬送、医療機関、避難所の受付、被災者への医療を含む支援物資の情報、配布状況把握等がこれにあたる。特に発災後マスコミ情報等に惑わされて一部の地域に偏在した支援物資のマッチングと適正配布、医療機関内トリアージ、さらには３月末より石巻市を中心とした学生ボランティアによる瓦礫の徹底的な除去と掃除等、その活動は被災者のみならず多くの関係者の目をみはらせた。災害・防災に強い国士舘大学としての新しい一面を世間に認識させたこれ等の活動は、防災・救急救助総合研究所、ウエルネス・リサーチセンターのスタッフもさることながら学生の活動に負う所が大きかった。

今回の大震災発生以降の救援体制を振り返ってみると、いくつかの問題点が浮かび上がってくる。一つは阪神・淡路大震災との際立った違いである。阪神・淡路は発災後、周辺に潤沢な医療供給体制がある局所災害であるのに対し、東日本大震災は甚大な被害を受けた地域が多県にまたがる広域災害で、医療資源も少なく今までの災害教訓も活かしきれず対応の遅れをとった事である。第二は救助救援体制に関して発災後、自衛隊、警察、消防、自治体職員等が救援、救助に当たったが、それに加えて各種ボランティア団体が多数参加し、その下支えを行った。問題は、行政とタイアップし、密な連携のもとに今回我々が行ったような機能的、系統的に活動したボランティア団体はまだまだ少ない点であり、今後のボランティア活動の在り方を再考する必要がある。第三に災害医療体制の問題である。発災後緊急医療は一部赤十字が携わったものの DMAT（Disaster Medical

Assistant Team）がその初期活動のかなりの部分を担った。DMAT は厚生労働省が本部機能を受け持ち、主に発生４８～７２時間以内の災害急性期に医療救援活動ができる機動性を持ったボランティアの医療チームを云う。構成は医師一名（＋α）、看護師２名、業務調整員１名を基本単位とし災害規模に応じ増員される。今回発災直後から３４０チームにものぼる多数の参加があったが、問題は災害対策本部と被災地現場のマッチングがうまく機能せず、そのまま帰還する DMAT 隊が跡をたたなかったことである。さらに DMAT の活動期間である４８～７２時間を過ぎても現場は亜急性、慢性期にかけての医療需要が大きく、地域医療システムも崩壊しているなか POST-DMAT の担い手も少ないため、大きな医療空白ができてしまったことが問題としてあげられる。長期化した被災地、避難所における慢性疾患の急性増悪、重症化への対応、感染症対応等は結局、救急・急性期医療システムの範疇にはいってしまう。今後、被災地内での救急・急性期医療システムが崩壊しても自動的に地域を越えて「相互に連携して機能する」事を担保する法的制度が是非とも必要である。日常救急、災害を問わず人の命を救うことを最優先の課題とし医療を確保する（当然プレホスピタルの体制も含まれる）為の明確な法的根拠を担保する法律、すなわち「救急・災害医療基本法」のような法律の立法化が急がれる。

さて、災害活動の基本は　① Command and Control：指揮統制と組織命令系統　② Safety：安全確保　③ Communication：連絡、情報収集と連携　④ Asessment：評価　⑤ Triage：トリアージ　⑥ Treatment：応急処置　⑦ Transportation：救急搬送 の七つに要約され、災害活動の CSCATTT と呼ばれ重要視されている。今回、国士舘大学はほぼこのすべてに関わった。したがってこの報告書は、国士としての国士舘大学が東日本大震災という未曾有の国難に立ち向かい、いかに関わったかの記録でもある。救援活動に従事した防災・救急救助総合研究所、ウエルネス・リサーチセンターのスタッフ並びにボランティアの学生諸君を私は大変誇りに思うとともに、誌面を借りて、ここに改めて謝意と敬意を表したい。今後、防災・救急救助総合研究所が全学レベルの展開をはかり、災害時の自助、共助、公助をバックアップするシステムを構築する意義はきわめて大きい。

東日本大震災被災地ボランティア活動と国士舘大学ウエルネス・リサーチセンター

国士舘大学ウエルネス・リサーチセンター

センター長　村岡　幸彦

昨年3月11日、日本に甚大な人的、物的被害を与えた東日本大震災からはや一年がたとうとしています。平成24年2月10現在亡くなった方15,848人、行方不明3305人、故郷を離れ避難生活を余儀なくされている方 33 万人余りという状況であります。ウエルネス・リサーチセンター（以下WRC）の被災地での具体的な活動に関しては後述されると思いますのでここではWRCが既存組織を活用してどのように被災地支援関わったかを述べたいと思います。

当センターは国士舘大学の有する体育・スポーツ・医療のノウハウとマンパワーを活用して広く社会貢献すべく体育・スポーツ活動実施及び研究、スポーツ情報分析と研究メディカルフィットネス活動の実施及び研究、病院前救急医療の普及と救急医科学的研究を事業の柱として運営してきました。

病院前救急医療の普及と救急医科学的研究に関しては救急医療関連セミナーや心肺蘇生法講習会、マラソン等のスポーツイベント救護活動など救急医療に関する事業を多数の国士舘学生ボランティアの協力を仰ぎながら実施し実績を積み上げてきていました。また、ボランティアとしてスポーツ活動、救急医療普及など多彩なセンター活動の原動力である学生が希望する活動に安全に参加できるよう登録制度を整備してきました。今回の大震災に際して国士舘大学体育学部では救急救命士を目指す多くの学生を擁するスポーツ医科学科もあり、救急医療に興味を持ち WRC に登録した学生も多数存在する事から、直後よりボランティアとして被災地支援に貢献したいという機運が盛り上がりました。前述のごとく WRC はボランティア活動希望学生の登録システムが完備し被災地支援を希望する学生が多く登録していた事から、被災地支援ボランティアを送り出す受け皿としての役割を大いに期待されました。

今回の大震災では地震、津波といった自然災害と、原子力発電所事故による放射能汚染と平時においては我が国が経験したことのない事態でありました。このような状況の中で本学学生が個人個人でボランティアとして被災地に赴き不測の事態に直面する事は学生を預かる教員としては最も避けなければならない事です。余震の続く中、放射能を含め二次災害からから安全を確保し、学生が被災地支援という熱い意欲を発揮できる場を与えるべく WRC 登録システムを活用しセンター研究員・客員研究員も監督指導に現地に赴きました。国士舘大学体育学部、救急システム研究科、スポーツ・システム研究科、IVUSA とも連携し被災地に長期に渡って学生ボランティアを派遣し被災地復

旧に貢献することが出来ました。参加学生は被災地に赴かなくてはわからない大震災の現実を五感で感じ貴重な経験をし、今後の大学生活あるいは生き方にまでも大きな影響を受けたと確信しています。

一方、被災地以外でも味の素スタジアム、東京武道館等の都内施設に避難された被災者の健康管理に連日医師である WRC 研究員（体育学部スポーツ医科学科教員）、ボランティア学生があたり被災者支援貢献しました。

このように、WRC は大震災直後よりこれまでの活動の中で培われてきたシステムを活用し今回の被災地支援の一翼を担えたのではないかと考えています、今回参加学生個々人が貴重な経験を得られたように、センター自体も今回の経験を検証し更に機動的な組織として成長していく事が今回犠牲となられた方々への鎮魂になると考えております。

Ⅱ．東日本大震災への被災地支援活動

１．国士舘大学大学院救急システム研究科
教　授　　田中　秀治

２．国士舘大学体育学部
教　授　　杉本　勝彦

３．国士舘大学体育学部
教　授　　川田　儀博

Ⅱ．東日本大震災への被災地支援活動

１．東日本大震災における緊急災害医療支援チームとの派遣と活動

国士舘大学大学院救急システム研究科　教授

田中　秀治

1. 東日本大震災の発生と被害の概況

2011年3月11日14時46分、震度7、マグニチュード9.0の日本国内観測史上最大の巨大地震が発生した。震源域は岩手県沖から茨城県沖まで太平洋三陸沖南北約500km、東西約200kmの広範囲におよび、断層の破壊は、宮城県沖から始まり、岩手県沖の方向、福島県・茨城県沖の方向に伝播した。

最大震度は宮城県栗原市で震度7、マグニチュード9.0と世界第4位の巨大地震であって「東日本大震災」と命名された。

建築物被害	岩手県	宮城県	福島県
全　壊：88,873 棟	17,113棟	61,678棟	7,362棟
半　壊：35,495 棟	2,636棟	14,317棟	5,702棟
一部破損：256,242 棟	1,567棟	17,121棟	43,354棟

表1　東日本大震災の被害の概要

南三陸町の津波被害の様子

当震災により建造物の倒壊、地すべり、液状化現象、地盤沈下などの直接的な被害のほか、津波、火災、福島第一原子力発電所事故、大規模停電などが発生し、死者・行方不明者合わせて2万人以上と甚大な被害をもたらした。

プレート移動型の東日本大震災と都心直下型の阪神・淡路地震では、地震の範囲や災害の規模が根本的に異なるが、死亡者が全被害者の80%を超えるなどまさに津波による被害範囲の広さがこの地震での被害を最も雄弁に物語っている。とくにその特徴として、津波に起因する人的被害・物的被害が甚大 かつ被災地域が広大であった。(人的被害・物的被害は東北地方を中心に東日本の広範囲に及ぶ。)

人的被害	岩手県	宮城県	福島県
死　者：15,012 名	4,414名	8,975 名	1,559 名
行方不明者：9,506 名	3,032名	5,889 名	581 名
負傷者：5,282 名	165名	3,411 名	227 名

表2　被災3県における人的被害の比較

人的被害の比較

	東日本大震災	阪神淡路大震災
マグニチュード	M9.0	M7.3
死亡者	15,373	6,434
行方不明者	7731	3
負傷者総数	5517	43792
（重症）%	10%＊	24.3%(10683)
（軽症）%	90%＊	75.6%(33109)
総数	28,621	50,229
死亡者/総数(%)	**80.7%**	**12.8%**

表3　東日本大震災の人的被害の概要

総避難者数は、最大約45万人超（3月14日現在）を数え、現在も多数（98,303人）におよび、避難所から仮設住宅に移動し居住するひとが5万戸にもおよんでいる。また、福島第一原子力発電所の事故（津波が主因）による行政全体の避難が今でも続き大きな問題となっている。

2．国による緊急援助隊派遣の状況

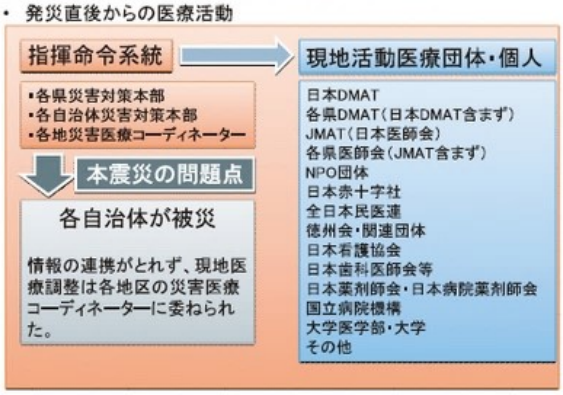
3月11日発災直後より、地震等の大規模・特殊災害発生時における人命救助活動等を効

果的かつ迅速に実施するために、被害の大きかった岩手県、宮城県及び福島県の３県に向けて被災 県以外の 44 都道府県の緊急消防援助隊の出動が指示された。とくに消防・警察・自衛隊の援助体制は、国としてこれまでの災害で最大級の支援体制を行った。

消防機関では、のべ約２万 8,100 人の全国 700 を超える消防本部より職員が派遣された。これは全消防職員（158,809 人）の６人に１人に相当する。また全国の警察も 46 万人による支援を行い、さらに自衛隊は延べ 1058 万人を派遣し 19286 名を救助、給水給食支援や入浴支援などを行った。

本震災における医療活動の実際

・ 発災直後からの医療活動



また厚生労働省からは被災地内における救急医療体制を補完すべく DMAT 隊（Disaster Medical Assistance Team）の出動が要請された。DMAT 隊は、災害の急性期に活動できるよう、トレーニングを受けた医療チームのことである。DMAT 隊は阪神・淡路大震災大震災を契機に、震災直後の「防ぎ得た死」を減らそうと発足した。東日本大震災では３月 11～22 日までに 47 都道府県から約 340 チーム、約 1500 人が岩手県、宮城県、福島県、茨城県の３県に派遣された。東日本大震災初期には DMAT による重症患者の広域医療搬送、多数の入院患者の初療、トリアージなどにあたった。入院患者の避難では、津波で機能不全に陥った石巻市立病院から 100 人以上の入院患者を避難させたほか、福島第一原発から 20～30km 圏内の避難勧告が出された地域の入院患者など計 300 人以上を新千歳空港、羽田空港、航空自衛隊入間基地、福岡空港などに設けられた、一時的収容施設である広域搬送拠点臨時医療施設（SCU）を経て、近隣県の医療機関などへ受け入れてもらうことができた。しかし今回、津波で多くの人々が溺死した東日本大震災では、48 時間以内といわれる急性期に DMAT はかならずしも充分な活動ができなかった。すなわち被害をうけた地域が広範囲にわたり、発災直後にはその全容が把握できなかったこと、また、初期の災害医療が長くつづいたことである。東日本大震災での外来患者の避難のピークは 3～7 日目となり、その傾向は１週間を超えてもまだなお多くの患者が病院へ受診している。今後は震災の種類によっては活動を２日と限定するものではなく、もう少し丁寧かつ長時間に医療支援活動が行われるべきであることが明らかになった。実際、東日本大震災における初期救急医療ニーズは、想定されていたものとは異なり２週間以上長期にわたるものだった。

これ以外にも日本赤十字社や日本医師会などを中心とした医療支援チーム、県などの救護単位となっての緊急医療支援がなされた 2 週間から６カ月にわたっては様々な救護チームが流出した地域医療機関に代わって医療体制の確保を行うことになった。

一刻も早く被災地から医療機関へ

３．国士舘大学としての緊急医療支援

国士舘大学は発災翌日 12 日午前 10 時　厚生労働省医政局に島崎修次教授経由で国士舘大学緊急災害支援チーム派遣を打診し許可が

おりた。

同日午前 12 時には渡辺剛体育学部長より大澤英雄理事長に報告。田中秀治を団長とする以下の８名を国士舘大学緊急災害支援チームとして編成し被災地へ派遣することになった。参加者氏名を示す。

第１次　国士舘大学　緊急災害支援チーム
　団長　田中秀治　　：救急専門医師、
　　張替喜世一　：救急救命士、
　　中山友紀　　：救急救命士、
　　元日本 DMAT 隊員
　　永吉英記　　：野外活動専門家
　　高橋宏幸　　：救急救命士
　　喜熨斗智也　：救急救命士
　　白川　透　　：救急救命士
　　大形敏之　　：ロジスティック
　　IVUSA（国際ボランティア）OB

１）　第一次緊急派遣隊の経過と目的
急性期における災害時医療支援

この第一次緊急派遣隊の目的は被災地にダメージを受けた病院において医療従事者の支援と地域医療の補助を行う事であった。

時間経過：

3 月 12 日（土）14 時 10 分
国士舘大学体育学部多摩校舎を出発
19 時 50 分福島県立医大 DMAT 統括本部に到着
すでに福島ではライフラインは復帰しており、傷病者数も少ないことから災害対策本部より仙台への移動の指示をうける。
23 時 20 分宮城県災害対策本部を訪問
宮城県災害対策本部を訪れたところ、石巻地域の被害が甚大で手薄であるため、石巻地域の救援の指示をうけ、再度移動する。
3 月 13 日（日）2 時 26 分
最終目的地である石巻赤十字病院に到着、ここで初めて石巻市市街地の半分近くが水没、多くの住民が被災していることとライフラインが全て遮断されていることが判明した。
病院には深夜にも関わらず救急患者がひっきりなしに搬送されており、一人でも多くの手が必要な状態であった。近くの女川、雄勝、男鹿地区がすべて甚大な被害を受けており、石巻医療圏の 10 万人以上が家を流されたか取り残されており 4 万人近くの避難民とともに病院の内外にあふれかえっている患者の対応や地域医療支援してほしいとの石巻赤十字病院長よりの要請をうけ、本緊急支援隊は石巻周辺の災害援助にあたることとなった。

病院内の被災者の状況1

2）緊急災害支援チームの業務内容及び活動
石巻で医療支援を開始

石巻の被災地域で周辺の多くの病院・医療従事者が機能停止または流失し、取り残された住民の救護ならびに重症傷病者の搬送にあたった。救急救命士や災害スペシャリストを含む国士舘緊急援助隊がその能力を発揮したのが、石巻赤十字病院前からのトリアージポストでの傷病者の重症度選別及び赤（重症）・黄（中等症）・緑（軽症）のトリアージ作業である。

3 月 13 日朝方から石巻赤十字病院が地域で唯一機能している災害基幹病院であることが分かると、ぞくぞくと病院前のヘリポートへ救急患者の搬送が始まり、また自衛隊の車両、一般車両であふれるばかりの患者が来院した。

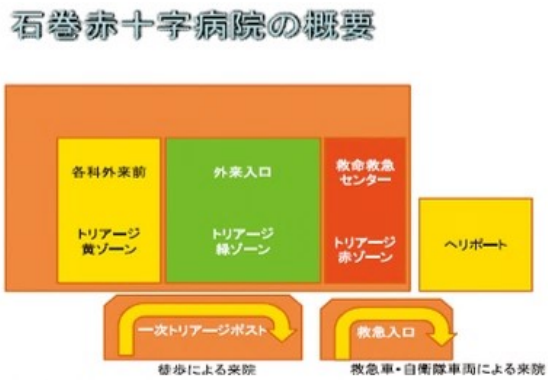
国士舘大学緊急災害支援チームは傷病者のトリアージ（重症度選別）と病院内への搬送業務を実施したが、3 月 13 日の 1 日のみで石巻赤十字病院には陸上・海上・航空自衛隊、消防、警察、海上保安庁のヘリコプター計 57 台が離発着し多くの救助者が病院へ搬送された。並行して救急車、自衛隊のトラックなどで海水に長時間浸かっていた状況から引き揚

げられた人が低体温、不整脈、慢性疾患の憎悪などを訴える被災者が多数搬送された。搬送患者数は 12 日・13 日・２日で 2400 名を超える（軽症 1680 名、中等症 460 名、重症 180 名、死亡 30 名程度）被災者が押し寄せた。これを国士舘大チームが的確にトリアージし病院のトリアージポストまで搬送することにより円滑な患者収容が可能となった。

自衛隊による傷病者の搬送

ヘリポートよりの搬送及びトリアージ

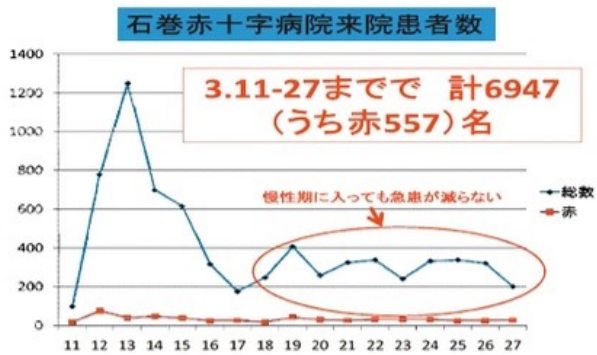
３）病院内トリアージ



運び込まれる患者も病院の前で２次トリアージが実施され、テキパキと振り分けられ、処置が行われていった。赤ゾーン（重症）には意識のない人や、海水で低体温になっている人、津波に巻かれて海水を飲んで溺水している人や多発外傷を受けている人などが運ばれ人工呼吸や救命処置が行われていった。

黄色ゾーン（中等症には）骨折をしながら歩いて病院に来る人、脱臼をしても歩いてくるひと、戸板に乗せられてくるもの、ガソリンタンクと一緒に津波に飲まれ背部に化学損傷をきたすものなど通常ではあり得ない患者に対し、迅速かつ適確に骨折の処置や固定、処置が迅速に行われていく。どの患者も津波に巻かれた時には一様に「洗濯機の中でぐるぐる回された感じだ」と言っており、そのためか皮膚や筋肉などの軟部組織損傷が多くその後、軟部組織の局所感染による敗血症へとつながった。

入院できる病床が限られているため、処置したあとは、多くは避難所に移送されるか病院内で経過を観察することとなった。



石巻赤十字病院の患者の推移

トリアージゾーンでの国士舘大学の活躍

4) 被災地域の避難所への訪問

3 月 13 日 15 時頃石巻地域防災コーディネーターより、津波により病院のスタッフ全てが患者とともに流されてしまった雄勝地区に取り残された住民の救護、ならびに傷病者の搬送の指示を受け、この地域に医療者として震災後初めて足を踏み入れた。

通常の道路は遮断されている為、林道を救急車で走破した。雪が残り、道路が陥没した山道を越え、町に到着すると津波が直撃した雄勝地区の惨状が目に飛び込んできた。建物、車、全てが破壊されつくされていた。すべての建物が流失しており、惨状を目のあたりにすることになった。

これまで詳しい情報が一切入らなかった雄勝地区には町役場の人によると、6 か所の避難所には 700 名ほどの方が避難していた。

雄勝地区は交通手段がなく3日間全くだれも救援に入れなかった地区この日初めて医療者が救援に入り、200名近い被災者を診察した

国士舘救急車による被災地への救援活動

避難していた方々の多くが健康に不安のある高齢者、障害者の方ばかりで、持病を持っている方も少なくなかった。各家庭の米など、わずかな備蓄食料をかき集め、コミュニティセンターを避難場所として集まっていた。早急にこれらの取り残された集落の方々に支援の必要性を強く感じた。

宮城県雄勝町に初めて医療者が足を踏み入れた瞬間　（国士舘大学チーム）

3 日間にわたる活動修了後に、その後病院長飯沼一宇氏を含む、病院関係者に挨拶をしたところ、ボランティアとマンパワーを再度大学として支援をいただきたいとの言葉をもらい被災地を離れた。第一陣の活動を通じて、被災地域のうち、援助の手が足りなかった石巻地域の災害医療の第一フェーズの急性期の援助を実施できたと考える。また救助の最中に本大学体育学部 2 年生の両親を救護し、国士舘大学在校生に対する支援ができたことは極めて重要であった。

また、その後の学生ボランティアや大学院生などの避難所補助などの展開、ならびに救護所のボランティアなどの対応ができたのも、この第一次派遣においての経験と培った経験があったからと考えている。

5) 第二次派遣とその経過（災害亜急性期における災害支援）

ロジスティックを行える人材の派遣

第一次派遣ののち、宮城県中部の被災地のうち被害が甚大であった石巻、南三陸では医療物資、衛生材料が不足し十分な医療が行えていないことや、インフルエンザなどの感染症の流行が懸念された。

日本救急医学会、日本臨床救急医会では、

これらの状況を改善するために支援物資をあつめた。この支援物資を集めるために一般社団法人救急医療研究所島崎修次理事長の依頼で人材、資機材のマッチングと搬送を行った。

3月21日午前10時　渡辺剛体育学部長に報告。田中秀治教授を団長とする5名田中秀治、櫻井　勝、高橋宏幸、喜熨斗智也、永吉英記で災害支援チームを編成し現地支援のために活躍した。

第2陣における時間経過

3月21日
午前10時
渡辺剛体育学部長に報告。田中秀治教授を団長とする国士舘大学緊急医療支援隊の派遣を決定。(災害亜急性期における災害支援)

17時30分　宮城県医療調整本部で東北大学上原教授と面会し救援物資の状況と救護の状況を把握
18時20分 宮城県保健部薬務課に確認し水が断水し衛生状態の悪化が危惧される
石巻市ならびに南三陸市への支援物資の搬送を決定
20時9分　石巻市健康部健康推進課庄司課長に2ｔ分の物資を無償提供

3月22日（火）
6時26分南三陸志津川町に到着、災害対策本部長に医療支援物資を供給
9時12分　志津川町歌津の老健施設で避難民170名を巡回診療

南三陸志津川町への物資の提供

収容者104名　外部か
診察午前29名
回診午前　2名中等症

6）第三次国士舘大学緊急医療支援隊の経過
（慢性期・回復期の災害医療調査：地域の交通網・通信網の回復とともに現状の把握が重要になってきた）
3月24日　宮城県保健福祉部長より避難所における避難者等の調査・支援を行うため、大学職員・大学院生に対しロジスティックボラ

ンティアの派遣が依頼された。慢性期には様々な感染症、慢性疾患の悪化、心のケア、回復自立支援など多くの問題が生じてくる。ここではこの慢性期の変化を避難民を対象に調査を実施し宮城県の支援を行う事を目的とした。全回と同様に体育学部長・研究科委員長の許可のもと田中秀治、高橋宏幸、喜熨斗智也、白川　透、稲村嘉昭、後藤奏の５名を派遣、途中からは大学院高山祐輔、水澤俊樹、曽根悦子、千田いずみの大学院生が交代で仙台における調査を実施した。

その後、この活動は５月中旬まで続けられ宮城県庁災害支援室において２か月にわたり援助を行った。

支援内容は以下のとおり

- 災害地域の地域別の災害情報の聴取
- 宮城県災害対策本部の分室
- 災害地域の地域別の災害情報の聴取
- 地域別の被災情報アップデートと共有
- 被災地域の医療・保健・健康支援
- 医療救護チームの情報共有など医療後方支援
- ケアマネージャー・介護士情報の共有
- 避難場所のライフライン情報共有
- 避難所・保健所サーベイランスを実施

民主党議員による視察と討論

東京における被災者の支援

7）東京に避難してきた（味の素スタジアム、東京武道館、東京ビッグサイト）福島県避難民に対する医療支援も東京都福祉保健局の依頼によって行った

福島の原発事故に伴い避難を強いられている方々を東京都では約500名近く都の施設に収容している。この方々の健康管理ならびに医療支援を国士舘大学にしてほしいと東京都福祉保健局から渡辺学部長に依頼があり、医師１名、救急救命士１−２名、学生サポートスタッフを１−２名派遣し、施設内の巡回診療や健康支援をおこなった

担当する医師はスポーツ医科学科臨床系医師（山口嘉和学科主任、村岡幸彦教授、窪山泉教授、伊藤挙教授、田中秀治教授、牧　亮教授、櫻井勝教授、島崎栄二教授）が交代で避難所の医療を担当した。

被災者は避難生活による不眠、精神の失調、長期の臥床での深部静脈血栓、持病の服薬の欠如などがあり、運動療法や子どもへのケアが必要となる。医療とともに健康維持のためのサポートができた。また勉強スペースの確保 、運動スペース 、サッカー教室 、こどもプレイルーム 、温泉送迎サービス 、法律相談、都住宅の抽選と斡旋 、太極拳、獅子舞のステージ、Ｊリーグ練習試合の公開 、マッサージサービスなどが行われた。

当時被災者に懸念されたのが胃潰瘍、心血管疾患、高血圧や肺炎などの災害関連疾患である。これは長期間に渡る避難所や仮設住宅での生活により慢性的な疲労、ストレス、精神的な失調、不眠が原因で起こると言われている。その他には仮設トイレの不足、下水処理機能の喪失による衛生状態の悪化もあり、それによりノロウィルスに感染し、それが集団生活により蔓延するといったことにも注意

が必要であった。この災害関連疾患を防ぐためにも保健、栄養、衛生を念頭に置きながら、現地でのケアをできるようなボランティアが必要な時期であった。

味の素スタジアムの避難者

東京ビッグサイトの避難者

4）おわりに

現在、災害は急性期の大変な時期が終わり回復・復興期に入りつつある。

しかし今も仮設住宅における災害関連疾患とくに増悪が心配される孤独死の増加や、胃潰瘍、心血管疾患、高血圧や肺炎などの災害関連疾患が危惧される。これは長期間に渡る避難所や仮設住宅での生活により慢性的な疲労、ストレス、精神的な失調、不眠が原因で起こると言われている。その他には仮設トイレによる衛生状態の悪化もあり、それによりノロウィルスに感染し、それが集団生活により蔓延するといったことにも注意が必要である。

この災害関連疾患を防ぐためにも保健、栄養、衛生を念頭に置きながら、現地で被災者の心に寄り添ってケアをできるようなボランティアが必要な時期になってきている。

災害で重要なことの一つに「自助・共助・公助」という言葉がある。自助とは自分の身を自分自身が守るということ、共助とは地域の方々など、周りの方と協力して助け合うこと、そして公助とは市役所や消防・警察などによる公的支援のことを言う。災害時にはこの全てが必要となるわけだが、今回の震災は非常に規模が大きく被災地への支援が十分に行き届いていなかったのも現実である。そのため、健康状態はできるだけ自分自身で管理し、体調を崩さないようにする必要がある。被災地の一刻も早い復興を祈念して稿を閉じたい。

Ⅱ．東日本大震災への被災地支援活動

２．被災地への医療ロジスティックスの重要性

国士舘大学体育学部　教授

杉本　勝彦

東日本大震災では、多くの人命が失われ、また家屋や構造物などにも甚大の被害を受けた。人が快適に生きて行くのに最低限必要なinfrastructureも同様に破壊されてしまい、これが今回の震災救援活動をいっそう困難なものにしていった。情報網の遮断は必要な情報の入手が行えず、交通路の破壊／遮断とガソリンの不足は現地へのアクセスを阻み、救援活動は長い間スムーズには行えていなかった。救援活動で必要なHealth Care provider、医療資機材、医療水や食料などを搬送する手段が限られてしまったのである。そんな混乱している現地の救援活動では外国医療チームの救援活動の直接支援を行い、このような壊滅的な災害に対する救援活動での Logistics の重要性を改めて認識させられた。

数多くの国外の医療支援が，日本政府の判断により受け入れられないなかで、正式には唯一医療支援活動を行ったのがイスラエル医療団であった。壊滅的な被害を受けた，宮城県南三陸町に隣接する被害の少ない，宮城県栗原市市長の働きかけにより、イスラエル医療団が医療援助として南三陸町に入る事が公式に決定しその医療活動を円滑に行うために、現地対策本部との調整・リエゾン役としてイスラエル大使館・日本外務省より委託され現地でイスラエル医療団と共に活動した。イスラエル団は３月２７日に日本に成田空港から入国、そのまま南三陸町にある志津川ベイサイドアリーナに向かい、プレハブの仮設診療施設を現地に設置し診療活動を４月１１日まで行った。(診療施設は、60m² のプレハブの建物を 7 つ建て、次のような部門に分けた一受付・トリアージと帰宅・内科・産婦人科・小児科・外科・検査部門と画像診断・薬局さらには医療資機材倉庫、指揮所・ロジスティック部門である。更にこれらの部門は無線LANで患者情報などを伝えるシステムが構築された)。イスラエル医療団はシャローム団長始め全員が軍属の医療職で、総勢 55 名の陣容であった（医療団（55 名の隊員）の構成は 14 名の医師、7 名の看護師、2 名の放射線科医、1 名の放射線技師、2 名の検査技師、2 名の医療情報管理士と 27 名の Logistic 担当要員であった)。医療機器も未だ電気の来ていない地域に自家発電装置を設置し、単純レントゲン装置、超音波装置、各種血液検査機器、分娩用セットなどを用意していたので、各被災地で既に医療を展開している日本の医療チーム(大半が 2-3 名の軽装備)の要請に応じで対応する高位のコンサルタントの立場で診療を引き受ける体制とした。当初は十分にイスラエル医療団の存在が周知されていなかったが、徐々に診療依頼が増加し、また婦人科チームは周辺の避難所の妊婦健診を巡回診療として行った。イスラエル医療団は、撤収に当たっては、プレハブの建物を含む全ての医療機器を現地に寄付されたため、この施設は４月１８日以降、公立志津川病院仮設診療所として活用されている。

今回のイスラエル医療団の診療の補助を行うことで、災害現場で医療活動を展開する際のLogisticsの重要性を再認識させられた。完全な自己完結独立型の医療団で、飲料水から食物迄全て事前に用意していることも勿論であるが三月で未だ寒い季節である東北地方の活動でプレハブによる寒冷な環境を遮断する方法は極めて有効な方法であったが、他の医療活動では日本を含めこのような発想をもった医療チームは皆無である。このような体制をとるには、十分なLogistic の用意が必要なのは自明であるが、今回のイスラエル医療団は 27/55 名が Logistic の専門要員であったことからも十分な体制を整えていることが分かる。今回の経験を教訓とするなら，今後の巨大な災害に備えて十分な医療支援を行いうるよう Logistics の準備が必要である。

Ⅱ．東日本大震災への被災地支援活動

３．学生有志による被災地ボランティア支援活動

国士舘大学体育学部　教授

川田　儀博

ボランティア活動のきっかけ

3月11日、午後2時46分に東日本を中心にマグニチュード9の大震災が発生、多摩校舎も大きな揺れを感じ研究室から飛び出した。戻ってびっくり、部屋の中がメチャクチャ、60数年の人生の中でおそらく初めて体験した地震であった。

大学の対応も早く、卒業式・入学式は中止、計画停電が実施され授業も5月の連休明けからの開始となった。

田中先生を中心とした教員・職員からなる医療ボランティアチームがいち早くスタートし、現場から戻ったスポーツ医科学科の先生を中心に学生ボランティア派遣計画が、検討され始めた。

「人を助けたい気持ち」はみんなが持っているが、何らかの形で抑えられていたというのは日本人特有の”照れの文化”があったから「ボランティアにうとい日本人」と思われていた。

だが最近は、阪神淡路大震災・タンカー転覆事故・伊達真人なるタイガーマスク等が現れ、天災・事故、社会不安等が起きた場合、人間は何かをしなければという思いにかられ、ためらいを捨て行動に移す人が多くなった。

学生もしかりである。最初は一部の人の行動それが”きっかけ”となって全国的な活動へと広がる。今回もなんらかの”きっかけ”があり、明日にでも行動できる状態にあった。

スポーツ医科学科の学生を中心に、反応も早かった。ボランティア期間は？派遣人数は？保険は？交通機関は？（この期間はガソリン不足）問題は山積みだった。

先生方の対応も早く、1クールが3泊4日・南観光のバスを使用・食料（飲料水含む）は個人持参で、4月5日から6期実施する事となった。

私は、引率責任者として3期と6期に参加した。

ボランティア村

東北自動車道の仙台南ICから、三陸自動車道に乗り換え仙台港北ICを過ぎたあたりから、田植えを迎えようとしているのどかな田園風景が一変した。だだっ広い田んぼにひっくり返った車、どこから流れてきたのか太い流木、ゴミ置き場と錯覚するほどのゴミの山、鳥肌が立ち足の震えが止まらなかった。テレビでは見慣れた光景ではあったが、実施に目にすると言葉もなく、自然威力の怖さを見せつけられた。

2時過ぎに、ボランティア宿泊所になっている専修大学石巻校舎に到着、前団の学生とバトンタッチをし2期の学生は帰京の準備、我々はこれからの寝床となるテント設営に取り組んだ。

ボランティア・センター

専修大学石巻校舎の中に、ボランティアセンターが設置されていて、個人で参加のボランティアはセンター前の掲示板に張り出された計画書で確認、用意された車で現地に移動し作業を行うことが基本になっている。

ただし国士舘大学はまとまった人数の団体であること、移動の車を用意していること・作業道具を持参している等の理由で、前日に行われるミーティングに参加し、活動場所が決定する。

ボランティアを統括している、石巻社会協議会・日本財団からも国士舘大学は信頼され、重要箇所の活動が

多かった。
私が参加した３期は「石巻市内の飲食街」、６期は「水産加工場」近くの住宅街で、水産加工場から流された冷凍イカの駆除作業を行った。

テント生活

本部テントでは、食事・ミーティングが行われ、憩いの場になっていた。

食事は個人で用意することになっているが、大学からも、無洗米・食パン・うどんなどを用意しバスに積み込んで持ち込んでいた。
ボランティア村近くの総合運動公園に自衛隊の本部基地が設置され、被災用の救援物資にもゆとりが出始め、ボランティア団体にも配布されるようになってきた。

国士舘大学も特別扱いまではいかないまでも、優遇され、飲料水・缶詰・インスタント食品・フリーズ食品が回って来るようになり、学生の食事にも余裕が出てきた。

調理器具も持ち込んだが、調理後に器具を洗う水がない。
一例をあげると、１回目）寸胴でご飯を炊く、２回目）水をたしてお粥を作る、３回目）さらに水を足してお湯を沸かし（お湯といっても米粒残っている）インスタント食品に使う、最後に新聞紙で寸胴をふき取る、その繰り返しであった。

学生たちも、水道が使えない、洗い場が無いことを承知してか不満を口にする事は無かった。
期間中、余震による避難指示が出たり、第５期は雪が降り、雪の重さでつぶれるテントが出たり、第６期では大雨が降りボランティア村の芝生に水がたまり、いたる所のテントが水没し、湖に浮かぶテントかと思えるほどであった。

復興の虹と桜

国士舘大学の学生によるボランティア活動最終日、雨上がりのボランティア村に石巻の復興を示すかのような満開の桜と大空に２重の虹がかかった。
まだまだ復旧に時間が必要な被災地を引き上げなければならないジレンマの中、なんかホッとする心温まる光景を見た。

短い期間ではあったが、私の授業（野外教育・スキー実習）をサポートして頂いている亀岡先生の教え子が北海道は遠軽から”炊き出し”でワゴン車に食材を積み込んで駆けつけ活動されていた。また給水では陸上自衛隊第５支団（北海道帯広市）が石巻市を担当し市民の生活を支えていた。ボランティア村で隊員の方と故郷帯広の話に短い時間ではあったが盛り上がったことに、被災地のために全国から集まった人たちの”絆”の強さに感動した。
第３期に参加したときは「蕾の桜」も、第６期には

「満開の桜」が咲いていた。自然には時間のストップはない。被災地石巻にも桜のように復旧・復興は時間と共に進んでいる。

忘れてはいけないこと

一部の人々の行動が大きな社会現象となり全国に広まる。阪神淡路大震災　日本海タンカー重油流失事故に見るボランティア活動等である。

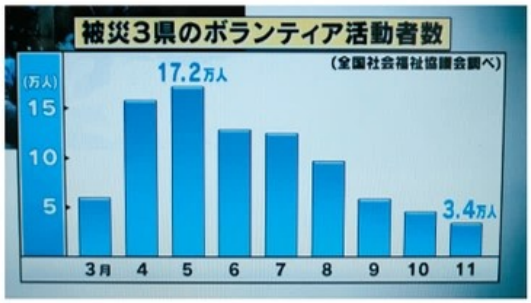
阪神淡路大震災が「ボランティア元年」と言われているが、今回のボランティア活動は冒頭で触れた”きっかけ”があって、「何かしなければ」「何が出来るか」学生の純粋な気持ちの働きかけがあったからではないだろうか。

震災から１年が過ぎ、我々の日常生活も元に戻り平穏な日々を過ごしている。

しかし、被災地は決して復興・復旧が順調に進んでいるわけではない。中心地は優先的に予算が付き進められているが、地方になれば未だにがれき対策も進まず復旧の遅れが叫ばれている。

政府対応の遅さに加え、義援金の額、ボランティア活動数も日ごとに減少し、支援の先細りが心配される。

最近のマスコミ報道も進みつつある復興の報道が目立ち、明るい報道が目立つ。たしかにそれも必要だが、日常生活に戻っていくにしたがい、震災の記憶が薄れていく。被災地の人々には「忘れられ始めているのかな」という不安な気持ちになっているのではないだろうか。



我々が忘れてはいけないものに、「震災の記憶の風化」があるのではないだろうか。

「風化」は復興を進めるための非常に大きな障害になる、復興を進めるためには世論の後押しが不可欠であって、無関心な人が広がってくると”もういいんじゃない”と言う風潮にならないよう取り組まけれがならない。

「忘れる」ことは被災者にとって非常につらい事を覚えておく事も大事である。言い換えれば「忘れない」ことは広い意味で”大きな援助”になるのではないだろうか。

風化を防ぐ有効な手立てとしてモニュメントを作り、同時に記憶を忘れないようにする手段が揚げられるが、被災者にしてみれば賛否両論難しさがある。

時の流れと共に「風化」は仕方ないと思うが最小限にし、劣化させない努力が必要だろう。

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

１．国士舘大学体育学部
　　准　教　授　　張替　喜世一

２．[記録写真集]東日本大震災発災の翌日から
　　活動を開始した国士舘大学緊急医療支援チーム

３．国士舘大学大学院救急システム研究科
　　研 究 科 助 手　　喜熨斗　智也

４．[記録写真集]緊急支援隊第二陣
　　石巻市・南三陸町での支援活動

５．国士舘大学体育学部
　　非 常 勤 講 師　　高橋　宏幸

６．国士舘大学大学院救急システム研究科
　　修士課程２年　　後藤　奏

７．石巻赤十字病院　宮城県災害医療コーディネーター
　　石巻圏合同救護チーム統括　　石井　正

８．国士舘大学大学院救急システム研究科
　　修士課程２年　　高山　祐輔

９．国士舘大学大学院救急システム研究科
　　修士課程２年　　稲村　嘉昭

１０．国士舘大学大学院救急システム研究科
　　修士課程２年　　曽根　悦子

１１．[記録写真集]福島県被災者避難施設
　　味の素スタジアム・東京武道館・
　　東京ビッグサイトでの医務活動

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

１．国士舘大学緊急医療支援隊の派遣と活動

国士舘大学体育学部　准教授

張替　喜世一

平成 23 年 3 月 12 日から 14 日に、国士舘大学の緊急医療支援隊第 1 陣として、宮城県石巻市において実施した支援活動について報告する。

表 1　地震発生から派遣までの経過

緊急医療支援隊派遣までの経過

- 2011年3月11日午後2時46分ごろ、三陸沖を震源に国内観測史上最大のM9.0の地震が発生（東日本大震災）
- 3月12日午前10時　島崎修次教授が厚生労働省医政局より国士舘大学緊急災害支援隊派遣依頼をうける
- 同日午前12時　渡辺剛体育学部長より大澤英雄理事長に報告。学内決定のもと、田中秀治教授を団長とする8名を国士舘大学緊急災害医療支援隊として編成した。

地震が発生した翌日に、厚生労働省（以下、厚労省）より本学の島崎修次教授に派遣許可が降り、その 2 時間後には派遣について学内決定した。

急性期の災害医療のニーズは、発災後 72 時間以内と想定されており、組織として迅速な判断がされたと思慮される

支援隊のメンバーは医師である田中教授を団長として総勢 8 名で編成された。

表 2　派遣メンバー

田中秀治（体育学部教授）	：救急専門医師
張替喜世一（体育学部准教授）	：救急救命士
中山友紀（体育学部講師）	：救急救命士、日本 DMAT 隊員
永吉英記（体育学部講師）	：野外活動専門
高橋宏幸（体育学部非常勤講師）	：救急救命士
喜熨斗智也（大学院助手）	：救急救命士
白川　透（大学院助手）	：救急救命士
大形敏之（体育学部職員）	：IVUSA（国際ボランティア）OB

表 2 に派遣メンバーとその資格や得意分野を示す。

厚労省が災害時に医療チームとして派遣する DMAT（ディザスター・メディカルアシスタントチーム）の構成は、医師・看護師・業務調整員となっている。今回のチーム編成は、看護師こそ入っていないが、DMAT に準じて編成され、特にロジスティック担当の永吉先生と大形氏は、それぞれ豊富な経験を活かして、災害現場でのアドバイスやフォローなど教示され、その後の学生ボランティア派遣も含めて、大変頼りになり、適切な人材であったと考えられた。

表 3 活動現場までの時系敵経過

3 月 12 日（土）
　14 時 35 分　体育学部を出発
　19 時 50 分　福島県立医大 DMAT 統括本部に到着
　　宮城県の被害甚大ということで仙台に移動
　23 時 20 分　宮城県災害対策本部に到着
　　石巻赤十字病院への支援要請を受け移動
3 月 13 日（日）
　2 時 26 分　石巻赤十字病院に到着。
　　石巻赤十字飯沼病院長よりの医療支援要請を受けて、石巻周辺の災害援助にあたる

活動現場までの時系列を表 3 に示す。食糧や資器材を調達し、スポーツ医科学科実習用の救急車仕様の車両 2 台に分乗し、多摩を出発した。

被災地まで、高速道路は一般車両については通行止めであったが、救急車仕様であったため、田中団長の説明により、スムーズに通過することが出来た。一般車両では、高速道路の通行は出来なかったかもしれない。

表 4　石巻赤十字病院の災害医療活動

・応援活動隊　日本赤十字緊急支援チーム 8 チーム
　DMAT 隊 2 チーム
・活動内容　トリアージポストでの傷病者重症度選別
　重症・中等症・軽症エリアでの診療
・状況　海水に長時間浸かっていた状況から引き揚げられた低体温、不整脈、慢性疾患の憎悪などを訴える被災者が、現場や避難場所よりヘリコプターや救急車、自衛隊のトラックなどで多数搬送された。
　13 日・14 日の 2 日で 2,400 名（軽症 1,680 名、中等症 460 名、重症 180 名、死亡 30 名程度）近い被災者が来院して対応にあたった。

石巻赤十字病院の建物は、幸いにも地震や津波の影響は大きくなく、診療機能は保たれていた。すでに、全国から日本赤十字緊急支援チームや DMAT 隊など 10 隊が到着し活動を開始していた。

医療活動としては、来院する被災者の方々の重症度の識別・振り分けや診療を実施しており、この時点では、怪我などによる重傷者は、阪神大震災に比べて少なく、地震の被害よりも津波による影響で、低体温や高齢者の方が具合の悪さを訴えているのが現状であった。

図 1　病院内の被災者の状況

到着時は、診療を終えても、避難場所まで帰る手段がないなど、病院内が被災者であふれかえっており、避難所のようであった。

また、治療エリアも院内の通路やフロアを活用していたが、人が多く、治療するスペースを確保するのに難渋した。

国士舘チームの活動は、13 日早朝から 14 日まで、ヘリコプターや車両で搬送されてきた傷病者の状況から重症度を判断し、病院内への搬送と、選別された傷病者の治療を手分けして行った。

13 日昼過ぎからは、石巻から少し離れた孤立している雄勝地区の取り残された住民の救護と重傷者の搬送の実施を、本部より下命され、医師の田中先生と救命士の中山先生ら喜熨斗助手の 3 名でチームを編成し活動を行った。

図 2　ヘリコプターからの搬送と傷病者選別

ヘリコプターにより 13 日には、約 70 機 180 名の傷病者が搬送されたので、その対応にあたった。

家の上などに取り残された方々を現場からピックアップしてきたもので、自衛隊、県防災ヘリ、消防ヘリ、海上保安庁など各チームにより搬送された。

国士舘チームは、背中にロゴマークがあるユニフォームを統一して活動を行った。

図 3　搬送車両からの院内搬送

現場や避難所から、救急車や自衛隊の車両で搬送された方々を選別して、院内の搬送活動も行った。

次から次へとヘリコプターや車両が到着し、傷病者がひっきりなしに来院している状況であった。

図４　トリアージされた傷病者への対応

病院入り口で選別・トリアージされた傷病者に対して、治療が必要な傷病者対応の黄色エリアでは、医師である田中先生が対応にあたった。

救急救命士は、緑の軽症エリアで対応にあたった。

図５　雄勝地区の状況・救護状況

13 日 16 時に、災害対策本部より、石巻から 1 時間ほどの雄勝地区に 6 人の傷病者がいるとのことで救護と搬送の指示を受け、京都日赤チームと一緒に現場に向かった。雄勝地区は津波の直撃を受け、壊滅状態であったため、避難所を巡回し救護にあたるとともに、喘息発作を起こし呼吸困難を呈していた傷病者を 1 名、石巻赤十字病院まで搬送した。

総括として

・被災地域のうち、援助の手が足りなかった石巻地域の急性期医療の援助活動を効果的に実施できたと考える。

・救援活動中に本大学体育学部 2 年生の両親を救護し、国士舘大学の名を少しでも高められたことは極めて重要な活動ができたと考える。

国を守る国士を育成するという、本学の建学精神からも、迅速に救援実践出来たことの意味は大きいと考えられた。

表５　緊急医療支援隊として今後の備え

- 豊富な人材を有効に活用するための
  ハードの整備や備蓄
  例：衛星携帯電話配備
- 迅速で適正な活動のために災害発生時
  支援派遣要領など事前のルール作り

→ 三位一体の対応
学部
ウェルネスリサーチセンター
防災・救急救助研究所

表 5 に、災害支援に対する大学の対応について提言する。

今後は、学内の人的資源などソフト面を十分に活用するための資器材などハード面の整備を図ると共に、備蓄などを充実し、地域における災害対応の拠点としての機能を備えて地域に根ざした大学として信頼を得ていくことが期待される。

また、学内の各セクションが協働して、事前のルール作りなど対応を検討し、災害に強い国士舘大学として、アピールする必要性を強く感じる。

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

２．［活動記録写真集］
東日本大震災発災の翌日から活動した
国士舘大学緊急医療支援チーム

2011年3月12日被災地支援出発前
（国士舘大学多摩キャンパスにて）

国士舘大学実習用救急車に積み込んだ
支援物資・医療器材

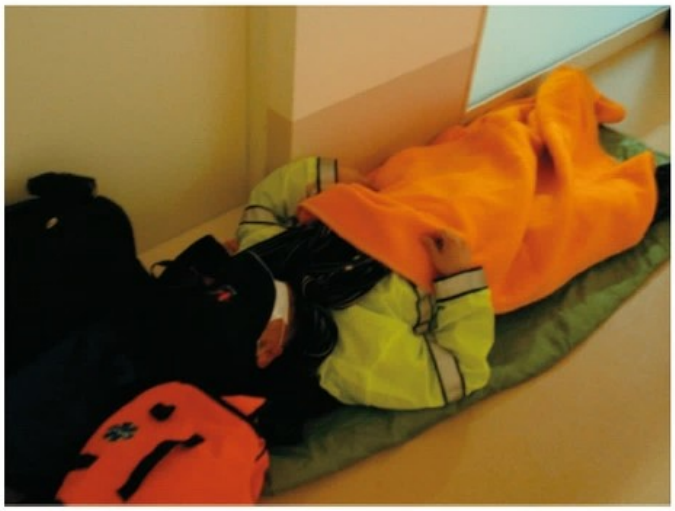
東北自動車道途中のサービスエリアの様子

亀裂が入っている東北自動車道

福島では医療チームが充足していたため、さらに北を目指すための作戦会議中

宮城県庁にて被害状況を聴取し、石巻市への道順を確認

石巻赤十字病院に到着し、現地医師に状況を説明してもらっている様子



深夜２時に石巻赤十字病院に到着後朝まで廊下で仮眠

石巻赤十字病院にて早朝の医療ミーティング

陸上自衛隊のヘリコプターで搬送された方に寄り添って病院までの搬送

海上保安庁のヘリコプターで搬送された方を
ストレッチャーで病院まで搬送

ドクターヘリの離陸

航空自衛隊のヘリコプターで
搬送された方を誘導

心停止傷病者に胸骨圧迫をしながら
ストレッチャーにて搬送

警察ヘリで搬送された方を
ストレッチャー搬送している様子

車イスで搬送を行う国士舘スタッフ

消防団の車両にて搬送された方を
ストレッチャーに収容

平担架にて搬送する国士舘スタッフ

陸上自衛隊の車両で搬送された方を
降ろす自衛隊員と国士舘スタッフ

陸上自衛隊の車両で搬送された方を
ストレッチャーに移す様子

栃木県消防防災航空隊により
搬送された方の引き継ぎ

石巻赤十字病院入り口でトリアージをする様子

トリアージエリア（緑）での患者の対応

トリアージエリア（黄）で診察する
国士舘スタッフ

雄勝半島に医療チームとして初めて
足を踏み入れた瞬間

雄勝半島の被災者の方々に
被害状況を聴取している様子

雄勝半島の避難所にて
避難者に対する医療相談

国士舘大学緊急医療支援チーム第１陣メンバー
（石巻赤十字病院の前にて）

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

３．東日本大震災における国士舘大学での物的・人的支援

－救急医療総合研究所での医療支援プロジェクトを中心に－

国士舘大学大学院救急システム研究科　研究科助手

喜熨斗　智也

I.　震災直後の活動とその現状

2011年3月11日14時46分に太平洋三陸沖を震源として発生した東北地方太平洋沖地震に対し、国士舘大学は翌12日から14日まで8名の緊急医療支援隊を編成し、第1陣派遣隊として石巻市にて医療支援活動を行った。

この未曽有の国難に対して、震災発生直後から国や県レベルで支援物資の調整が行われ始めたが、我々が震災直後に被災地に入り、目の当たりにした現状は、各被災地に支援物質が迅速に分配されない。また、十分足りているものまで支援物資として届き、その物資の移動のための人員の確保や置き場所の確保が困難となっていた。それ以外にも、避難所の規模に比例せずに支援物資が分配されるといった状況もみられた。

さらに、これら以外の問題として、震災直後はマスメディアで取り上げられた地域には多くの支援物資が届いていたのだが、情報を発信することさえできず、道も閉ざされてしまっている場所ほど、実は支援が必要な状態であったが、それを確認することがままならない状況であった。そのような中、被災された方々は津波で家が流されてしまい、普段飲んでいた薬が流されてしまっているなど、多くの問題が浮き彫りになった。

II. 医療支援物資マッチングシステム

災害支援の中でも今回、我々は医療面で早急に対応すべきであると考えた。支援の中でも我々が取り組んだのは人的支援と物的支援であり、さらに被災地が必要としている物の情報と非被災地から提供可能な人的・物的支援の情報をマッチングさせ、効率的、かつ有効的に支援物資を供給するものであった。

それは、例えば、被災地で糖尿病を患っている方がいるところに枯渇しているインシュリンを送り、腎不全に対する透析が可能な病院に透析液を送る必要があるということである。

III. 医療支援本部の立ち上げ

一般社団法人救急医療総合研究所（以下、救急総研と記す）に上記の目的を達成するための医療支援本部が設置された。救急総研は救急医療に関わる調査・研究を行い、救急医療に関わる様々な課題や問題に迅速に対応して、より良い救急医療を提供することを目的として設立された組織である。本組織の代表理事を島崎修次氏が務めており、同氏が国士舘大学大学院救急システム研究科長でもあることから、今回国士舘大学に東日本大震災に対して医療支援プロジェクトを実施するための医療支援本部立ち上げと運営を依頼された経緯となった。医療支援本部には国士舘大学の教員であり、かつ日本救急医学会、または日本臨床救急医学会の会員で構成された。

医療支援プロジェクトの活動は以下のとおりである。（表1）

表1：医療支援プロジェクトの活動内容

1. 被災地における医療機関・避難所等の状況把握
2. 被災地より支援を希望する医療機関・避難所の受付
3. 被災地に支援を行いたい企業・個人の受付
4. 災害情報リンク集の作成

上記の内容を具体的な活動とし、被災地の救急関係者からはどのような医療資器材が必要か、どのような人材が必要かという情報収集を行った。非被災地からはどのような支援が可能か、また医療人材の派遣、医療資器材・衛生資器材の搬送などを適切な場所に適切な方法で実施するための協力要請を行った。

情報を集めるために、救急総研のホームページに入力フォームを作成した。入力フォームは大きく被災地と非被災地の2種類に分け、さらに人的支援と物的支援に分けて入力フォームを作成した。（図1）

この入力フォームは特に非被災地からの応援協力の情報を集めることに効果を発揮した。一方、被災地からは入力フォームから情報が入ってくることが少なかったため、被災地の医療機

関を調査し、電話、FAX、メール、ホームページや SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）などでキーワード検索し、情報を集めたことが効果を発揮した。

図 1：医療支援プロジェクトの入力フォーム

IV. 医療支援プロジェクトの実績（物的支援）

救急総研にて医療支援プロジェクトの体制を構築し、宮城県の石巻市、南三陸町、気仙沼市、山元町、また福島県から東京へ避難されてきた方々を受け入れた味の素スタジアムと東京武道館に支援活動を行った。

図 2：宮城県の被災地支援地域

図 3：東京都での物資支援施設

これらの地域や施設に対して現地で必要とされた物資支援を行った。物資支援を表 2 から表 5 に、医療資材の物資支援、医療器材の物資支援、衛生資材の物資支援、救援物資・防災物資・搬送業務の支援に分けて示す。

表 2：医療資材の物資支援

品名	個数	送付日時	送付先						支援・提供元
			石巻	志津川	気仙沼	山元町	東京	残り	
ESキット	30箱	4/8	15	15				0	（株）アグリス様
車椅子用クラス｜処置キット	30箱	4/8	15	15				0	（株）アグリス様
ディスポ消毒処置キット（セット）	64組	4/12	30	30				0	（株）アグリス様
ディスポ消毒処置キットA	4箱	4/12	2	2				0	（株）アグリス様
ディスポ消毒処置キットB	2箱	4/12	1	1				0	（株）アグリス様
ディスポ消毒処置キットC	1箱	4/12	1					0	（株）アグリス様
消毒液	10箱	4/12		10				0	（株）アグリス様
医療処置セット	3箱	4/8		3				0	柳江美箱様
医療品	2箱	4/8		2				0	長塚保枝様＋本多レディースクリニック様
リレンザ	1箱	4/8		1				0	小島クリニック様
心電図電極（新児電極5枚入り）	15箱	4/8		15				0	（株）フィリップスエレクトロニクスジャパン様
心電図電極（大人電極5枚入り）	15箱	4/8		15				0	（株）フィリップスエレクトロニクスジャパン様
心電図電極エコーローデ皿（電極パッド）	3箱	4/8		3				0	フクダ電子株式会社様
OS-1（ペットボトル24本入り）	294箱	3/21,3/28		269				23	株式会社大塚製薬工場様
OS-1（パウダー7袋×20個入り）	10箱	3/28		10				0	株式会社大塚製薬工場様

表 3：医療器材の物資支援

品名	個数	送付日時	送付先						支援・提供元
			石巻	志津川	気仙沼	山元町	東京	残り	
折りたたみ式ベッド（緑）	5台	4/4		5				0	アコードインターナショナル（株）様
折りたたみ式電動ベッド	10台	4/13	10					0	エムキューブ様＋HSJ様
パラマウントベッド一式（折りたたみ式・手動）	10台	4/29	10					0	パラマウントベッド株式会社様
災害用簡易段ボールベッド	107箱	4/8	100	7				0	メディカル・エキスパート（株）様
パラマウントマットレス	35枚	4/8	10	21	4			0	多摩丘陵病院様
体圧分散マットレスA	128枚	4/13	10		118			0	株式会社シガドライ・ウィザース様
体圧分散マットレス	70枚	4/13	70					0	ハッピーおがわ様＋エムキューブ・HSJ様＋リバップネット様
車用担架	20箱	4/13		20				0	アコードインターナショナル（株）様
車用担架（大）	2箱	4/13		2				0	アコードインターナショナル（株）様
防護服	20箱	3/28		20				0	（株）ノルメカエイシア様
手術用手袋	2箱	4/8		2				0	栄レ・メディカル株式会社様
体重計	30台	4/29			30			0	株式会社ドン・キホーテ＋エムキューブ様
枕くら	150個	4/29				150		0	枕くら株式会社様
布団セット	60組	5/2					60		株式会社ニトリ
寝台シーツ(50枚入り)	19箱	4/8	10	9				0	（株）フィリップスエレクトロニクスジャパン様

表 4：衛生資材の物資支援

品名	個数	送付日時	送付先						支援・提供元
			石巻	志津川	気仙沼	山元町	東京	残り	
次亜塩素酸水（原液）	60箱	3/28	25	25			8	1	株式会社エースインターナショナルジャパン様
次亜塩素酸水（詰替）	38箱	4/13	23	15				0	大栄建設株式会社様
次亜塩素酸水（スプレー17本入り）	14箱	4/13	7	7				0	大栄建設株式会社様
次亜塩素酸水（10Lタンク）	10箱	4/12	6	4				0	株式会社マッキンリー様
次亜塩素酸水（スプレー12本入り）	17箱	4/12	7	10				0	株式会社マッキンリー様
ウィルシューター（100個入り）	237箱	3/21,3/28	110	113		10	4	0	株式会社シガドライ・ウィザース様
モースプロテクション	40箱	3/28	15	15		10		0	株式会社エースインターナショナルジャパン様
ウェットタオル	394箱	3/21,3/28	130	130	130		4	0	株式会社シガドライ・ウィザース様
ファブリーズ	500個	4/22				500		0	P&Gジャパン株式会社様
粘着クリーナー	1000個	4/22			500	500		0	株式会社大創産業様
プラズマクラスター	10台	4/22				10		0	シャープ株式会社様
加湿器	10台	4/13	5	5				0	株式会社シガドライ・ウィザース様
抗ウイルス用スプレーボトル	42箱	4/8	21	21				0	株式会社エースインターナショナルジャパン様

表 5：救援物資・防災物資・搬送業務の支援

	品名	個数	送付日時	送付先						支援・提供元
				石巻	志津川	気仙沼	山元町	東京	残り	
救援資材	米（27kg）	3箱	3/28		3				0	平松正義様
	簡易食料品	1箱	3/28	1					0	斑井浄様
	食品	2箱	3/28	1	1				0	松本仁志様
	Contrex（水）	12本	3/28	6	6				0	松本仁志様
防災資材	うなぎ（放射能対策用タイベックススーツ）	2箱	3/28		2				0	エーエムエムジャパン様
	段ボール（板）	2500枚	4/25	500	500	500	500	200	300	富士段ボール株式会社様＋エムキューブ様
	布テープ（30個入り）	1箱							1	富士段ボール株式会社様＋エムキューブ様
	ラジオスピーカー(4台入り)	1箱							1	株式会社マッキンリー様
	防水シート	6箱	4/8		6			1	0	株式会社シガドライ・ウィザース様＋エムキューブ様
搬送業務	4トン車による機材の搬送	2回		1	1				0	京王運輸様＋国士舘大学様
	8トン車による機材の搬送	1回							0	南木運輸様＋国士舘大学様
	16トン車による機材の搬送	1回		1	1	1			0	インターネット物流様＋エムキューブ様
	大形バンによる機材の搬送	16回		8	4			4		国士舘大学様
	2トン車による機材の搬送	16回		8	8	1	1		0	国士舘大学様

以下に 3 月 21 日に医療支援プロジェクト最初の物資支援の活動を示す。

3 月 21 日 11：00：国士舘大学多摩キャンパスより救急車 1 台、京王運輸の 4 トントラック 1 台にて出発した。チームは医師 2 名、救急救命士 2 名、大学講師 1 名、京王運輸のドライバー2 名の他、経口補水液 OS-1、マスク、次亜塩素酸水、ウェットタオル、軽油、灯油、医療器材等計 4 トンを宮城方面へ向け輸送した。

17：05：東北自動車道、仙台宮城 IC 到着 宮城県庁に移動。

18：00：宮城県庁に到着。

18：01：宮城県庁にて、東北大学の上原教授と面会し、支援調整を行った。

18：38：災害医療支援隊が宮城県庁と調整し、石巻地域と志津川地域に医療物資を届けることとなった。

19：37：宮城県庁から石巻に向けて、医療物資を届けに出発。

20：17：石巻市役所に到着した。

21：13：石巻市役所に経口補水液 OS-1 を 120 箱、マスクやウェットタオル、次亜塩素酸水、食料品その他医療物資計 2 トンを輸送した。

21：24：志津川に向けて移動を開始した。

その後、志津川にて、経口補水液 OS-1、マスクやウェットタオル、次亜塩素酸水、食料品その他医療物資計 2 トンを輸送致した。また、株式会社カーブスジャパン提供の水 16 トンを、IVUSA 国際ボランティア学生協会による搬送協力を得て、救急医療総合研究機構医療支援本部の調整のもと、石巻市へ輸送致した。

V. 医療支援プロジェクトの実績（人的支援）

人的支援に関しては団体・個人を合わせて 127 件の非被災地からの人的支援希望があった。その内訳は以下の通りである。

人的支援希望の男女比は男性 57%、女性 43% であった。

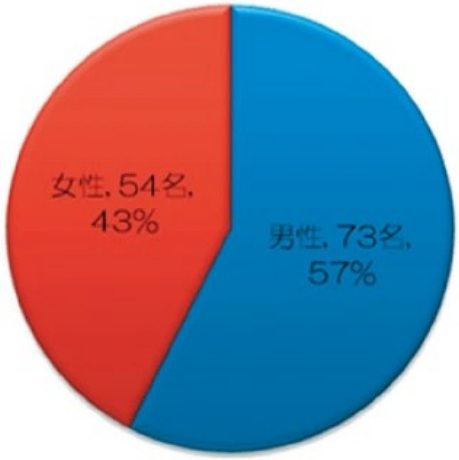


図 4：人的支援希望の男女比

人的支援希望の団体・個人の割合は個人参加を希望した方が 82%、団体としてチーム参加を希望したチームが 18% であった。

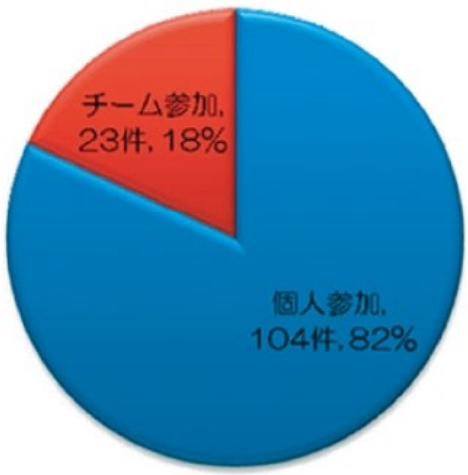


図 5：人的支援希望の団体・個人の割合

人的支援希望の資格別割合は医師が 57% を占め、看護師、救急救命士と続いた。その他には柔道整復師・鍼灸師、臨床工学技士、理学療法士、保育士、牧師などであった。

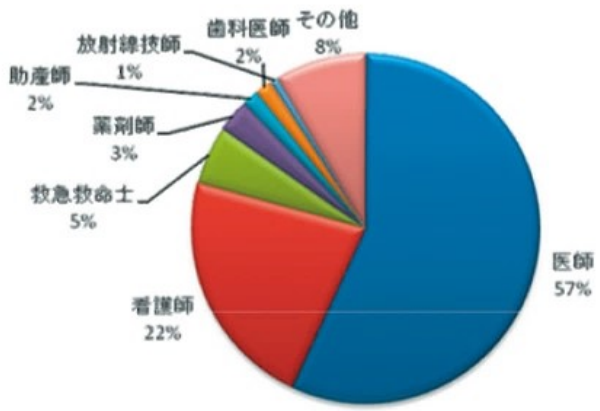


図 6：人的支援希望の資格別割合

救急総研の医療支援プロジェクトの立ち上げも含めると合計 221 名（重複あり）の人的支援を行った。（表 6）

表 6：被災地への人的支援の業務と人数

日付	業務	人数
3/17,18	総研支援室立ち上げ補助業務	6名
3/19以降	総研支援室業務	2名
3/19以降	石巻赤十字医療ロジ業務	3名
3/19以降	南三陸志津川町医療ロジ業務	3名
3/19以降	宮城県災害対策本部 災害保健医療支援室	2名
3/27～4/20	石巻赤十字医療ロジ業務	50名
3/27～4/20	南三陸志津川町医療ロジ業務	50名
3/27～4/20	宮城県災害対策本部 災害保健医療支援室	50名
4/21～5/8	石巻赤十字医療ロジ業務	33名
4/21～5/1	南三陸志津川町医療ロジ業務	22名

東日本大震災に対する国士舘大学からの人的派遣としては第 1 陣の 3 月 12 日～3 月 14 日に派遣した石巻赤十字病院を皮切りに、3 月 15 日からの救急医療総合研究所での活動、第 2 陣の 3 月 21 日～3 月 22 日に派遣した石巻市・南三陸町への物資支援搬送、3 月 19 日～5 月 8 日まで支援活動を行った味の素スタジアム・東京武道館での避難者への医務活動、3 月 26 日～5 月 8 日まで実施した宮城県庁・石巻赤十字病院・南三陸町：サーベイランス業務スタッフ派遣、4 月 4 日～5 月 1 日まで実施した石巻市・南三陸町への国士舘大学体育学部学生ボランティアスタッフの派遣と多岐に渡った。詳細に関しては各項に記す。

VI. まとめ

今回、物的支援・人的支援として母体となった救急総研の医療支援プロジェクトの方法ではかゆい所に手が届く細かい支援が実施できた。しかし、この方法ではかゆい所が分からないと支援できないという欠点もあった。これは報道で「すごい被害」と言われたところにはすぐに支援の手が入った一方、連絡手段が断絶された地域への支援ができない方法であり、この方法を取った結果としての意見では、全体に大きく支援することも必要であり、この方法のようにマッチングさせる支援の必要性も見受けられた。

国士舘大学の災害支援体制としては、高速道路移動中に大きな余震に会い、通行止めとなったが、その際の判断が不明確であったなど、余震が多い中での活動に対して緊急時の対応方法が徹底されていなかった。また、個人のストレス等を勘案して活動期間を 4 日間までと設定していたが、実際には 1 週間以上活動した者もいた。その他、メンタル・ケアの体制が取られていなかったなど課題が多数挙げられた。

一団体としてボランティアする際には具体的な組織構築が必要であり、考えられる範囲内の対応方法の徹底が必要でもあった。ボランティアに行く者に対しては、ボランティアする活動の目的と期間を明確にすることが必要であり、ボランティアスタッフへのメンタル・ケア体制を組織として準備しておかなければならず、非被災地からボランティアを援護、通常業務を担う後方支援体制も必要であったと痛感させられた。

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

４．［活動記録写真集］
緊急支援隊第二陣
石巻市・南三陸町での支援活動

被災地へ送る支援物資を集めた国士舘大学
多摩キャンパス臨床実習室

支援物資を送る準備をした国士舘スタッフ

石巻市役所に到着し、
支援物資を運んでいる様子

石巻市役所内に運んだ支援物資

南三陸町ベイサイドアリーナ外のテントで
毎朝行われた医療チームミーティング

ベイサイドアリーナ内で公立志津川病院医師
とミーティングをする国士舘スタッフ

南三陸町内の避難所へ支援物資を搬送

南三陸町内の避難所で診察を行う
国士舘大学の医師チーム

電気が使えずランタンを使い、
診療を行う国士舘大学医師

南三陸町を走行する国士舘大学救急車

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

５．石巻赤十字病院での支援ボランティアについて

国士舘大学体育学部　非常勤講師

高橋　宏幸

【東日本大震災について】

2010 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分頃、三陸沖深さ約 25ｋｍでマグニチュード（M）9.0（気象庁暫定値）の地震が発生した。宮城県栗原市の震度 7 をはじめ、宮城・福島・茨城・栃木の各県で震度 6 強を観測するなど東日本の各地で気象庁観測史上最大の強い揺れを観測するとともに、太平洋沿岸部を激しい津波が襲った。

【本学の支援ボランティアについて】

宮城県庁からの指示を受け、我々は 3 月 12 日に宮城県石巻市に向かった。派遣先は石巻赤十字病院となり、期間は第 1 次派遣 3 月 12 日（土）～14 日（月）病院の医療支援、第 2 次派遣 3 月 28 日(月)～5 月 8 日（日）病院内の事務支援を目的に支援を行った。

【石巻赤十字病院】

宮城県にある石巻赤十字病院（図 1）では、同日災害医療対策本部を立ち上げ、来院被災者対応を開始した。3 月 12 日より支援日本赤十字救護班による単発的な避難所巡回を開始した。

（図 1　石巻赤十字病院位置）

病院内の来院患者者数は、3 月 11 日から 5 月 4 日の期間中で 12,930 名を数え、その内命に危険性のある緊急度、重症度が高い救急患者数が 1,556 名と今回の震災がいかに大きなものであったかが伺える。

避難所巡回を開始し 3 月 17 日周辺避難所が 300 箇所以上あることを把握するものの、市の機関がことごとく被災し状況を把握し得ないことを鑑み、巡回救護チームによる避難所情報の把握を開始した。3 月 19 日 1 回目の避難所のアセスメントを終了した。

さらには、同医療機関において宮城県災害医療コーディネーターとしての立場から、様々な組織から派遣された医療チームが個別に活動することが非効率と考え、3 月 20 日災害医療コーディーターが 一元的に統括協働する石巻圏合同救護チームをスタートさせた。

【第 1 次派遣　3 月 12 日（土）
～3 月 14 日（月）の支援について】

最初の支援は本学体育学部田中秀治教授、張替喜世一同准教授、中山友紀同講師、永吉英記同講師、大学院喜熨斗智也助手、白川透同助手、本学職員大形敏之氏、大学非常勤高橋宏幸（筆者）の医師 1 名、救急救命士 5 名、事務要員 2 名の 8 名で支援ボランティアに参加した。

3 月 13 日 02:00 頃石巻赤十字病院に到着し、05：00 頃より支援を開始した。我々の与えられた支援は、病院に搬送されてくる方々を院内に搬送する事、ならびに緊急的な医療が必要かそうではないかを選別（トリアージ）することであった（写真 1、2）。

（写真 1　ヘリコプターで搬送された方々を病院内に移動する様子①）

（写真２　ヘリコプターで搬送された方々を
病院内に移動する様子②）

同日の夜になり病院側から石巻より北側の雄勝地区の避難所にけが人が数名いるとのことで様子を見てきてほしいとの指示があり、田中教授、中山講師、喜熨斗助手が救急車にて視察にあたり、病院に残ったメンバーは夜間帯自力で病院にいらっしゃる方々のトリアージ、ならびに軽症ゾーンでの診療の補助にあたった（写真３、４）。

（写真３　病院入り口でのトリアージの様子）

（写真４　病院内で診療の補助をしている様子）

【第２次派遣　３月 28 日(月)
～5 月 8 日（日）の支援について】

第２次派遣では、石巻赤十字病院での巡回診療チームが毎日持ち帰る避難所情報（避難所ごとの症状日報、ライフライン状況）の取りまとめをボランティアとして支援した。

避難所の多くは学校のプールの水を使い、生活をするうえで必要な水を賄うところが多く散見されたが、中にはプールが土砂災害で埋め尽くされてしまっている場所もあり、きれいな水を求める声が日増しに強くなっていくのを現地で感じた（写真５）。

（写真５　プールの中に土砂が流れ込んでいる様子）

石巻圏合同救護チームでは、災害市内のライフラインの様子を見かねて赤十字に集まった義捐金を財源に給水タンクの設置を検討していた。しかしながら、同救護チームには市内に設置す

るほどの人的資源がなく、ちょうど石巻市内でボランティアをしている国士舘大学の学生に白羽の矢があてられ、市内計９つの避難所に給水タンクを設置することとなった（写真６、７）。

このような作業が功を奏したせいか、震災が発生してから５月上旬まで、石巻赤十字病院では大きな感染症の発生も確認されておらず、巡回診療と避難所の衛生面を考慮した活動は十分なものであったと考える。

（写真６　赤十字社の方々の指示に従い
給水タンクを設置する学生）

（写真７　設置後すぐに避難所の
子どもたちが集まってきた様子）

【院内ロジスティック業務について】

院内の事務的な支援については、個人の体力などを考慮し本学教職員、大学院生、大学生がローテーションで支援にあたり最低でも１日２名の支援体制を整えた（写真８）。

（写真８　石巻圏合同救護チーム本部内）

今回の震災では地震の影響よりも津波の影響を強くうけ、巡回診療チームにとって情報のやり取りが問題となった。事実携帯電話の基地局が被害をうけ、携帯電話での通信も困難であり、ライフラインの中の電気がいきている環境ではむしろインターネットを使用する回線での情報のやり取りが効果的であった。

巡回診療を行う上での問題点の中で、限られた時間のなかで避難所等の申し送りも含まれるため、事前に巡回する地区の情報だけでも知りたいという声があげられており、その需要と供給の溝を埋めるため Google と協力し、被災地情報共有マップを作成した（図２）。

（図２　被災地情報共有マップ）

この被災地情報共有マップは、被災地にくる医療ボランティアスタッフが事前に派遣される地区の情報を確認できる体制を構築することを目的に、Web マップ上で避難所情報を閲覧できるシステムを導入した。

各避難所情報（電気、ガス、水道などのライフライン）、かつ避難所ごとの症状日報を石巻圏合同救護チーム内で閲覧でき、情報を共有する方法を検討することを目的とし、石巻圏合同教護チームと共同して開発した。

避難所の日報情報は、数回前まで巡回し更新した内容と比較することができ、誰がみても見やすいように数が減少していれば青に増加していれば赤に表示されるよう工夫した（写真９）。

報告日	2011-05-28	2011-05-29	2011-05-30	2011-05-31
人数全体	1016	1016	1011	970
受診人数	45	45	33	39
下痢	0	0	0	0
嘔	10	10	1	8
嘔吐	0	0	0	0
発熱(38℃以上)	1	1	0	0
呼吸器疾患	3	3	0	0

（写真９　避難所症状日報）

避難所情報を閲覧できることにより、支援にくるボランティアの方々に現地の生きた情報を配信できたこと、さらには本部でも発災後懸念していた避難所での集団感染や容態悪化に対し早い段階で気づくことができるシステムを残すことができたことは、災害の多い我が国において有益なシステムの構築に至ったのではないかと考える。

未曾有の大震災に遭遇し、本大学は宮城県にある石巻赤十字病院において支援ボランティアを展開した。医療に関する支援、また災害対策本部のロジスティックスとしての支援を精一杯活動した。

最後に被災地に一刻も早く平穏な日常が戻るよう、今後とも祈るだけではなく行動で支援を続けていきたいと考える。

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

６．「宮城県災害対策本部災害保健医療支援室」へのロジスティクス支援

国士舘大学大学院救急システム研究科　修士課程２年

後藤　奏

1．はじめに

我々は東日本大震災発災にあたって、宮城県災害対策本部災害保健医療支援室に対し、医療支援、人的支援活動を平成 23 年 3 月 28 日より同 5 月 8 日にかけて実施したので、ここに報告する。

宮城県災害対策本部災害保健医療支援室(以下；支援室と記載)は、宮城県災害対策本部の分室であり、被災地で支援活動を行っている医療・保健チームや、被災自治体の業務を物的、人的の両面よりサポートするという目的で設置された。支援室の活動拠点は宮城県庁内に設置され、収集された情報は宮城県災害対策本部へ逐一提供され情報の共有が行われていた。構成メンバーは、東北大学上原鳴夫教授を代表とし、東北大学のスタッフを始め、ユニセフからのスタッフや日本全国の公衆衛生に長けた医師など多岐に渡る人員で構成されていた。今回我々は、田中秀治教授が村井嘉浩宮城県県知事より委嘱を受け、支援室の人的支援、物的支援を行うこととなった。

2．活動内容概要

支援室の活動内容は、

① 被災地域ライフライン情報の収集
② 被災地域医療情報の収集
③ 被災地域避難所情報の収集
④ 活動中の医療団体への物的支援
⑤ 現地自治体への人的、物的支援

の5項目を主に行っていたが、当時は人員不足、物資不足、ノウハウ不足などが合い重なり、機能的に活動が難しい状況であった。そこで、国士舘大学スタッフは主に、

① 支援室ロジスティック(事務・調整)班
② 現地医療施設支援班
③ 現地先遣視察班

の3班構成により支援室への支援活動を行った。

3．支援室ロジスティック班

支援室ロジスティック班の主な活動場所は、宮城県庁内の会議室であった。上記でも述べたとおり、当時支援室は人的にも物資的にも十分な状態では無かった為、事務機能の確立、強化や宮城県内で活動を行う際の車両運行のマネージメントが急務であった。具体的には、受付業務の設置や、今までに収集された資料の再整理、各企業から支援されたPCのセットアップ作業やモバイルルータ型のインターネット回線の開通作業、各自治体や医療機関等に配布支援する PC やネット回線などの手配、配送、管理など事務機能の面で大幅に増強を行うことが出来た。

さらに、収集された医療情報やその他の情報を現地で活動している支援チームへ確実に提供する為に、宮城県災害対策本部との連携を密に行い、情報の積極的な共有を行った。

図 1　支援室活動当初の様子

図 2　支援室で各企業より支援された災害用支援 PC のセットアップ業務を行っている様子

当時は宮城県内の避難所情報が錯綜しており、正確な情報の把握が難しく、特に被害が甚大で

あった石巻地区(石巻、雄勝、牡鹿、女川)の情報把握がきわめて困難であった為、支援室では平成 23 年 3 月 30 日に石巻市、石巻保健所と連携し石巻地区避難所実態調査を行うこととなった。この調査の際のロジスティック業務を国士舘大学が担当することとなった。

まず、調査の計画を作成するために、臨時の石巻市役所、石巻保健所が設置された宮城県立石巻西高等学校へ行き、現地の職員と調査計画を調整した。存在が確認されているが、避難者数や食料の支援状況、不足物資や衛生環境など詳細が確認できていない避難所を調査することを前提とし、リストに載っていない避難所の情報やリストへの掲載などを目的とした。

図 3　石巻市職員と調査計画を作成する様子

調査活動を行うにあたって、車両の確保が大きな問題となった。現地の車両の大半は津波に流され、さらに深刻なガソリン不足という状況であった。我々は国士舘大学関係車両 4 台手配したほか、現地のタクシー会社に協力を依頼し、5 台のタクシーを用意して頂くことが出来た。さらに調査当時、雄勝、牡鹿、女川方面は道路状況が悪く、アクセスが厳しい状況であった。そこで、雄勝、牡鹿、女川方面で支援物資の供給活動を行っていた NPO 団体である国際ボランティア学生協会(以下;IVUSA と記載)へ協力を依頼し、現地の日菜所調査において車両の提供と運行などを引き受けて頂き、多大な御協力を頂いた。

図 4　雄勝、牡鹿、女川方面の避難所調査へ協力頂いた NPO 法人 IVUSA の車両

調査期間は 2 日間であり、調査を行った避難所は 100 カ所以上に昇った。調査員は、国際保健医療学会学生部会を通して支援室へボランティアに参加していた学生を中心に行われた。実際に避難所へ赴き、保健所より依頼された調査項目に関して聞き取り調査や支援物資の調査、衛生環境などの調査を行った。

図 5　避難所として使用されていた公民館
石巻市避難所リストでは詳細不明となっていた。
白いワゴン車は国士舘大学関係車両

避難所は学校や公民館を始め、集落の集会所やプレハブ小屋、企業施設や立体駐車場、個人宅など多種多様な形態があり、避難所の把握や実態調査は困難を極めた。避難所を探す場合には、その地区で生活されている方々へ聞き込みを行うことが最も有効であった。さらに、避難

所で近くに避難所がないか確認する方法も有効であった。これは、避難所同士で情報交換を行い、支援物資の供給を受けたりなど互いに支え合っていたことが大きな要因であったと考える。

図６　集落の避難所として使用されていたプレハブ小屋　10 前後が生活していた

図７　当時は日が短く尚且つ電機が復旧していなかったため、写真のように暗闇の中で避難所を検索するのは困難な作業であった

４．現地先遣視察班

上記の石巻地区避難所実態調査を行うにあたり、雄勝、牡鹿、女川地域の事前情報が少なく、計画を作成することが難しい状況であった。そこで、車両を保有し、車両運行をある程度自由に行える国士舘大学が現地の避難所状況を視察することとなった。視察班は２名で構成され、使用した車両は１台であった。視察先は、石巻市、雄勝地区、牡鹿地区、女川地区、気仙沼地区を巡回し、各地区の大きな避難所や臨時設置された市役所等へ出向き、現地の状況や、避難所となっているが詳細な情報が入っていない場所などの聞き込みを行いリスト作成を実施した。

図８　女川の基幹的な避難所であった女川総合体育館避難所を訪問している様子

図９　女川総合体育館避難所の救護室で医療状況や衛生状況、付近の避難所の情報などを収集している田中教授

５．現地医療施設支援班

支援室の活動内容の一つであった被災地域の医療情報の収集を行う際に、最大のネックになったことは、現地の被災医療機関の人員的な余裕が全く無いということであった。当初はこちらから電話やＥメール、FAX 等で情報の提供をお願いしていたが、被災医療機関に大きな負担となることとなるため、被災医療機関へスタッフを派遣し、被災医療機関内で避難所情報、医療

施設情報の収集、情報の整理を行い、得られた情報を現地医療機関や現地活動中の医療支援チームへ提供した。また、情報は支援室を経由して宮城県災害対策本部へと逐一提供を行った。

スタッフの派遣先は、当時石巻地区の基幹的な役割を果たしていた石巻赤十字病院、南三陸町のベイサイドアリーナ(総合体育館)の2カ所にスタッフを各2名常駐させて支援活動を行った。

6．支援隊の装備

我々が支援を行う際に持ち込んだ物品として、車両4台(国士舘大学ウエルネスリサーチセンターと一般社団法人ハートセーバージャパンより借用)、ガソリン(20リットル携行缶4本)、GPS機能付携帯電話、携帯型プリンター、スキャナー、PC、ネット回線モデム、カメラ、その他各種事務用品を現地へ持ち込み活動を行った。車両4台は災害時緊急自動車登録を行っていたため、現地でのガソリン給油を優先的に行って頂くことが出来た。

7．まとめ

今回の東日本大震災は、未曾有の大災害であった。被災地の方々が活動を行う際に最大の問題であったのが、津波で車両が流されてしまい身動きが出来ないということであった。今回我々は車両を4台持ち込んでいたため、車両を使用する活動の依頼が大変多く、被災地でのロジスティック活動には自ら移動できることが重要で、現地で使用する車両の重要性を再認識させられたと共に、微力ながら有効な支援活動が実施できたと考える。

さらに被災地で情報の収集を行う際には、通信手段の確保が重要である。衛星携帯電話、インターネット回線モデム、PCが大変有用であった。電力と携帯電話会社の電波の復旧が早期に行われたため、有効に活用することが可能であった。

今回の支援活動では、様々なノウハウを持つ人材を適切な場所へ配置することが出来、有効な支援活動を実践することが出来た。宮城県災害対策本部災害保健医療支援室支援班の活動の中で、国士舘大学が担ったロジスティックス人員と物品を適材適所に配置できたことは、大きく評価出来ると考える。

感謝状

がんばろう東北！

国士舘大学防災・救急救助総合研究所 様

貴会は 東日本大震災津波災害におきまして
被災された方々のいのちと健康をまもる救援活動に
たいへん貴重なご支援を賜りました
ここに深甚の謝意を表します

平成24年2月11日
東日本大震災災害保健医療支援室
代表 上原 鳴夫

東日本大震災災害保健医療支援室より贈られた感謝状

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

７．「国士舘大学チーム」のこと

石巻赤十字病院　宮城県災害医療コーディネーター

石巻圏合同救護チーム統括

石井　正

僕は大学時代硬式テニス部に所属し、それこそ在学中の6年間、練習に明け暮れていたのだが、にもかかわらず万年補欠であった。そんなイマイチの僕なのに、先輩方は僕をかわいがってくれたし、後輩たちも僕を立ててくれた。また僕も、できる限りも後輩たちの面倒をみた。非常に居心地がよいクラブであった。だから僕は、古い人間かもしれないが上下関係がきちんとある集団が大好きだ。偽善的な悪平等主義に基づくオママごと的サークル活動など大嫌いである。相互信頼を担保するならば、他己中心的な秩序を重んじる組織の方がずっと信頼できる。

今回我々は、石巻医療圏で東日本大震災に対応するために「石巻圏合同救護チーム」を立ち上げ、のべ3633チームもの救護チームが参集した。当時、最大328か所の避難所のアセスメントを継続的に行っていたのだが、そのデータを整理するスタッフ支援を東北大学教授の上原鳴夫先生を介していただくことになった。それが国士舘大学非常勤講師の高橋宏幸さん率いる数名のチームであった。その親玉は、田中秀治先生（国士舘大学スポーツ医科学科教授）である。田中先生ご自身も発災直後に数名の配下とともに当院に参集してくれていた。その時はヘリ搬送患者のトリアージを一手に引き受けて頂いていた。
彼らは、アセスメントデータの整理とともに、Google の開発した避難所情報検索ソフトに毎日データのアップデートを行なってくれた。さらには、国士舘大学の学生さん方が 11 か所の避難所に簡易手洗い装置を設置する現場作業を引き受けてくれた。

彼らは一言でいうと、僕の大好きな上下関係を重視したまさに「体育会系」の集団であった。皆さん「侍」のたたずまいで非常に礼儀正しく、目立とうとせずかつ自分の仕事・目標に向かって黙って着実に進んでいく。高橋さんに至っては、東京に帰ってからも、電子メールでこの業務を、合同救護チームの活動が終了する9月30日まで継続してくれた。大変な支援である。

また4月はじめ、福祉避難所を開設するに当たり、段ボールベットや電動介護ベット、耐圧分散マットが必要になり、あるメーリングリスト上で上原先生が、物資調達支援の窓口になっており、その後方支援しているのが田中先生であることを思い出した。思い切って、4/7、メールで前述の物資支援を依頼した。

すると、同日すぐに田中先生からレスポンスがあった。どういうコネをお持ちなのかさっぱりわからなかったが、「本日依頼のあった体圧分散マット10枚、 電動介護用ベッド10台、 体圧分散マット軽 70 枚、簡易ベット（暖 DAN）70台を調達した」とのメールであった。おまけに、石巻までの搬送の調整も全部やってくれると言う。

世の中には、やり手っているもんだな、と心底感心した。

なんでそこまで支援してくださったのか。
きっと国士舘大学チームには自己顕示欲などは微塵もなく、「すべては被災地、被災者のために」という思いのみで活動されていたからだ、としか思えない。

本当の善意とはこういうものなのだと教えられた気がした。この人的物的支援、がなければ、僕らの合同救護チームの活動はどうなっていたかわからないと思う。

国士舘大学の皆さんと出会えたことは、本当に幸運であった。

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

８．南三陸町における医療支援活動

国士舘大学大学院救急システム研究科　修士課程２年

高山　祐輔

1.　背景

3月11日の東日本大震災の発生に対し、宮城県災害対策本部医療保健支援室は被災地における衛生環境、疾病構造の把握とそれに対する迅速な対応を目的として「医療救護活動サーベイランス＃1」を用いた医療、生活状況調査を行った。本調査票は医療支援チームに配られ、避難所につき1枚記入し毎日、医療統括へ提出される。

この調査票のデータ化と解析要員及び保健福祉課地域包括支援センターの業務補助要員として、南三陸町医療統括本部へ国士舘大学大学院救急システム研究科の教職員及び大学院生の派遣（派遣1）と医療物品の管理業務の担い手として南三陸町医療統括本部より人員派遣要請を受け、国士舘大学体育学部スポーツ医科学科の学生及び同大学大学院生の追加派遣を行った。（派遣2）

2.　活動の概要

(1)　期間：2011年3月28日～5月1日

(2)　活動場所：南三陸町内（南三陸町医療統括本部及び南三陸町地域包括支援センター）

〒986-0725　宮城県本吉郡南三陸町志津川字沼田56

(3)　活動人員：派遣1：7名（教員2名、大学院生5名、）、派遣2：29名（大学院生2名、国士舘大学卒業生1名、スポーツ医科学科学生26名）

(4)　活動内容；

1)　医療情報サーベイランス入力・解析

2)　医療物資管理

3)　保健福祉課活動

3.　被災状況

(1)　震災前人口：18,035,人（2011年2月）

(2)　被災者数：5,401人（死亡者数：455人、安否不明者数：640人、避難者数4,306人）（2011年4月15日現在）

(3)　医療機関数：（震災前）7か所（公立志津川病院＋診療所6か所）→（震災後）3か所（公立志津川病院仮設診療所、診療所2か所）

4.　ライフラインの状況

3月11日の発災後、南三陸町内の全域でインフラ（水・電気）が断絶状態となった。その後、連日の様に早朝から夜にかけて電気の復旧作業が行われ（写真1）、震災から一ヶ月余りが経過した4月15日の午後に志津川地区と周辺で電気が復旧し、復旧の瞬間は町役場職員のみならずベイサイドアリーナに避難する人々から拍手が巻き起こった。

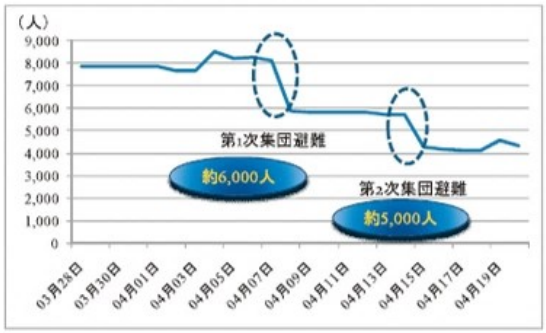
水は県外の水道局や自衛隊による給水が行われたが小規模避難所では給水が十分でなく、手洗いや食器の洗浄ができず衛生環境の悪化の大きな原因となっていた。

写真1：電気復旧工事の様子

5.　避難者数の推移

3月22日現在の南三陸町内の避難者総数は8,756名であったが、近隣市町村への第一次集団避難（4月3日～6日：822名）、第二次集団避難（4月11日～14日：540名）を経て4月20日時点での同町内の避難者数は4,326名と半分以下となった（表1）。

表1：避難者数の推移



6.　医療体制の状況

3月28日～4月20日までの間、南三陸町へは全国から約20チームの医療チーム（病院単位、医師会、NPOなど）が支援に入り、段階的に支援チーム数は減少した。この県外からの医療支援チームの撤退、避難所での巡回診療、定点診療終了のタイミングに合わせ、避難を強いられていた地元の医師や看護師などが南三陸町に戻り診療の準備整え、県外医療支援チーム主体の医療から地元医療スタッフによる本来の南三陸町の医療へと移行を図った。

7.　南三陸町の医療体制の経過

・3月11日：東日本大震災発生
　ベイサイドアリーナ診療所設置
・3月12日：西澤医師（南三陸町医療統括本部責任者：公立志津川病院）がベイサイドアリーナで診療開始
・4月18日：公立志津川病院仮設診療所開設
・5月1日：避難所診療を48ヶ所から6か所に縮小
・5月14日：6か所の避難所診療終了
　ベイサイドアリーナ診療所閉鎖

8.　支援活動

(1)　医療情報サーベイランス入力・解析

生活環境、インフラ、治安、診療状況（受診者数、受診理由、診断など）など大きく9項目からなる調査表（医療救護活動サーベイランス#1）は各避難所につき一枚が避難所での診療（巡回・定点）を行う医療支援チームによって記入され、毎日提出された。この調査票の内容をMicrosoft社のExcel®を用いて集計を行い、その結果を宮城県災害対策本部医療保健支援室及び南三陸町医療統括本部への報告を毎日行った。本調調査票の集計・解析の内容で緊急で共有すべきものは全ての医療支援チームが参加して毎朝行われるミーティングで周知され、その他のものは各チームの代表者のみが参加し、医療統括本部との意見交換を目的に毎週水曜日の日中に行われるクラスターミーティングで資料として使用した。

診療の受診理由は感染症状（呼吸器・消化器）、精神症状（不安・不眠など）が多い結果となり、その他では津波で定期薬が流された為に薬の処方を目的とした受診が多い傾向にあった。3月28日～4月19日までの期間（4月8～12日を除く）、同町内ベイサイドアリーナの次に大規模な避難所である志津川高校での医療支援チームの診察を受けた人の人数は延べ407名、その内、定期薬処方目的の受診者を除くと「呼吸器感染症」が46%、消化器症状が30%（「下痢」9%、「嘔吐・嘔気」11%、「発熱」10%）、「病院搬送・紹介」7%、「呼吸困難」、「インフルエンザ疑い」、精神症状（「不安・不眠」3%、「精神科疾患」2%）がそれぞれ5%、「発疹」2%であった（図1）

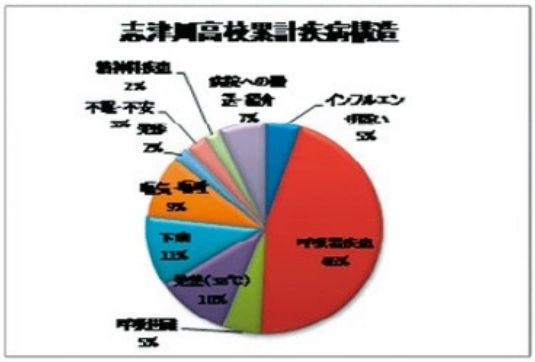


図1：志津川高校での受診者疾病構造

(2)　医療物資管理

南三陸町医療統括本部下で医療物品の管理を行っていたJA長野厚生連の撤退に伴い、医療統括本部からの要請を受け国士舘大学及び大学院でその業務を引き継ぎ行った。

業務内容はベイサイドアリーナ内の臨時医療物品倉庫での必要物品の検索と在庫管理、発注であり非常にシンプルであるもののこの業務の需要が高かった背景は長引く停電と作業スペースの問題であった。倉庫内は懐中電灯の明かりしかなく、また非常に狭隘なスペースに全国から送られた医療支援物資が無秩序に置かれ、医療支援チームが自力で必要物品を探し出せない現状があった（写真2）。

写真2： 医療物資倉庫の様子（オレンジ：国士舘）

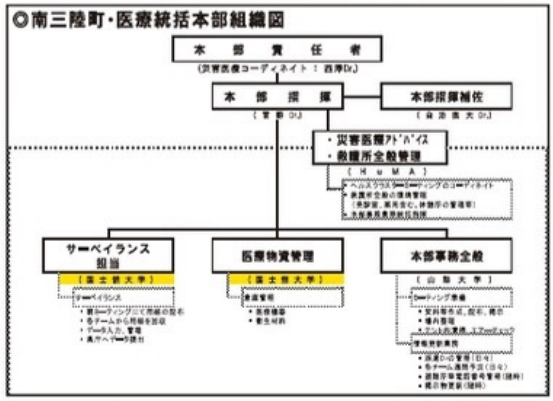


図2：南三陸町医療統括本部の組織図（4月1日）

スムーズな活動環境の構築を目的にNPO団体など連携し、まず棚卸を行い、引き継ぎ時に不明であった倉庫内の物品の種類と数の正確な把握を行った。また、自衛隊の発電機より倉庫内への電気供給を受け、倉庫内の照明の増設を行った。これらの作業によって作業効率が大きく改善した。さらに、4月15日に電気が復旧したことによって活動の環境が大きく改善されたといえる。

また、ベイサイドアリーナ診療所機能の公立志津川病院仮設診療所（ベイサイドアリーナ敷地内）へ移行（4月18日）に合わせ、医療物品倉庫からの新たな医療物品の発注は原則的に行わず、手袋やガウン、手指消毒ジェルなどの在庫数が多い消耗品に関しては積極的な使用を各医療チームと保健師チームによびかけた。医療物品倉庫は5月14日にベイサイドアリーナ診療所と同時に閉鎖となる為、余った医療物品は公立志津川病院仮設診療所の仮物品倉庫へ移動する事で合意に至った。

国士舘大学の支援活動終了の5月1日後はNPO法人ユニバーサルレスキュージャパンがその業務を引き継ぐこととなった。

4月1日時点での南三陸町医療統括本部の組織図を図2に示す。

(3) 保健福祉課活動

南三陸町保健福祉課の地域包括支援センターでは全国から支援に入っている約20の保健師チームが民家避難者を訪問し、生活面・医療面の要支援情報の聞き取り調査を行っていた。この活動によって収集された要支援情報は解決に行政による対応を要するものと即時対応が可能なものに大分され、国士舘大学ボランティアスタッフは後者の支援業務を行った。対応を行った支援活動は避難所（歌津地区、名足保育園）への毛布、生理用品などの生活物品などの運搬、避難所（高齢者施設）での入浴介助、志津川地区の避難所であるハイムメアーズでの炊き出し、避難所（ベイサイドアリーナ）内での手洗い場の作成（写真3）、大規模避難所に集中していた一般ボランティアスタッフの均等配置の調整、登米市立栗原病院に入院していた避難者の退院に伴う避難所への搬送、医療面でのフォローが必要な避難者の避難所間搬送避などである。

写真3：国士舘ボランティアが作成した手洗い場

9. 問題点と今後

(1) 支援物資の物流障害

全国から送られる支援物資は大量であり、その量は受け入れ側の仕分・分配の能力を大きく上回っていた。南三陸町の支援物資倉庫は前述の医療物資倉庫と同様に物資が無秩序に置かれ、避難者からの物資の需要に効率よく対応できない状態が慢性的に続いていた。この問題に対し、町では支援の制限をホームページ上での情報公開、ボランティアを大量に動員しての棚卸などを行った。

(2) 避難所衛生管理

インフラの断絶は避難所生活の衛生環境を一層悪化させる原因となっていた。特に断水は衛生管理上、深刻であり食事で使用した食器を水洗いできず、ウエットティッシュで拭く程度で再利用せざるを得ず、この衛生環境は消化器感染症の蔓延の温床となっていた。そんな中でノロウィルス感染症患者が散発的に発生した。しかし、医療統括本部では住環境、衛生環境を考慮するとノロウィルス感染症の散発的な発生は許容し、パンデミックを防ぐ事を目標に体制をとり、ノロウィルス感染症に関するする大きな混乱はなかった。

食品衛生対策として、使い捨ての紙皿や紙コップ、割りばしなどを避難所や民家へ配布し、巡回先での配布と衛生指導を行う措置を取ると同時に、ノロウィルスに対して有効な次亜塩素酸水による手指・食品・トイレ衛生管理の励行をおこなった。

(3) 避難者の自立障害

全国から送られる大量の支援物資や医療チームを含めた様々なボランティアによる支援活動は南三陸町の避難者の自立の足かせになっている事は町の災害対策本部でも大きな課題となっていた。町の復興には町民の自立が必要不可欠であり、その為には町民が本来の生活を送るだけの自力をつけなければならない。

しかし、避難所の生活環境は劣悪であったものの食事、マッサージなどが無料でその場で受けられる事は元々の生活よりも豊かな面でもあり、避難者の自立の障害となっていた。

また医療の面でも同様であった。震災前、南三陸町内の医療機関は公立志津川病院の他、6か所の診療所があったが、震災後は全国各地から医師、看護師、薬剤師、保健師などの多く医療従事者が支援に入り（医療支援チーム、保健師チーム各 20 チーム)、「医療インフラ」も震災前と比べ充実している環境にある。健康に不安を抱える避難民は特に、自ら医療機関へ行かなくても毎日身近で診察を無料で受けられる環境は震災以前と比べある意味では充実している状態であった。

こういった状況に対し医療統括本部では全国らの医療支援チームの段階的に撤退させ、その数を減らすことで徐々に本来の南三陸町の医療体制を目指していた。医療支援チーム数は 4 月 30 日で 8 チームを残してその他の全てのチームが撤退し、5 月 14 日で全ての支援チームが撤退する予定であった。

10. おわりに

東日本大震災に対する南三陸町における国士舘大学体育学部スポーツ医科学科及び大学院救急システム研究科による医療支援活動は発災から約 2 週間後の 3 月 28 日より始まり、およそ 1 カ月の間行われた。この支援活動には教員、大学院生、学部学生、卒業生が参加し、結果として「オール国士舘」体制での支援であった。多くの医療支援チームが短期間で人員が入れ替わり、長期的に支援活動を継続することが難しかった中、国士舘大学のボランティアスタッフは中・長期的に支援活動に加わり、継続的に情報の供給が可能であった事は医療統括本部との良好なコミュニケーションの構築の要因となり、さらにスタッフの大半が学生と大学院生であった為、年齢層が低くその活発な活動は「Toughness と Intelligence の国士舘」と称された。

前述の様に南三陸町の復興の為には町民、町役場の自立が必要不可欠である。

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

９．東日本大震災に伴う味の素スタジアムでの避難者受入れに対する医療支援

国士舘大学大学院救急システム研究科　修士課程２年

稲村　嘉昭

1．はじめに

東京都は、3 月 11 日に発生した東日本大震災に伴う福島第一原発の事故による避難者の受け入れを 3 月 17 日（木）より東京都内の施設で開始した。開放施設は 3 月 17 日から府中市の味の素スタジアム、綾瀬市の東京武道館、3 月 22 日から江東区の東京ビックサイト、千代田区の東京国際フォーラム、4 月 9 日から旧赤坂グランドプリンスホテルでそれぞれ避難者を受け入れた。

国士舘大学が医療支援を行うこととなった経緯は、3 月 18 日（金）に東京都福祉保健局より避難所の医務室ボランティアの依頼が入り、19 日（土）から担当することとなった。活動場所は、府中市の味の素スタジアムと綾瀬市の東京武道館の 2 施設で、活動期間は 3 月 19 日から 5 月 8 日までの 50 日間であった。本報告は、味の素スタジアムでの活動をまとめたものである。

2．避難者

避難者数は、受け入れを開始してから数日で 180 人を超え旧赤坂プリンスホテルが受け入れを開始した 4 月 9 日から徐々に減り始め、国士舘大学が活動を終了した 5 月 8 日は 35 名の入居となった（図 1）。

図 1　避難者数の推移

避難者の主な所在地は、福島県が全体の 98%を占め、中でもいわき市や双葉郡から避難されてきた方が多かった。津波の被害が大きかった宮城県からの避難者は少なかった（表 1）。

表 1　避難者の所在地

県名	市郡名	市郡合計人数	県合計人数
福島県	いわき市	166	396
	双葉郡	122	
	南相馬市	63	
	相馬市	11	
	郡山市	10	
	二本松市	6	
	西白河群	5	
	相馬郡	5	
	田村市	2	
	田村郡	2	
	白河市	1	
	須賀川市	3	
宮城県	石巻市	2	5
	栗原市	1	
	仙台市	1	
	刈田群	1	
茨城県	水戸市	1	1
千葉県	浦安市	2	2
計			404

主な避難理由としてはやはり原発退避というのが多数であり、全体の 87%を占めていた（表 2）。

表 2　避難理由

原発退避	352
津波	15
地震	4
震災被害	5
家屋損壊	19
ライフライン無	1
その他	2
不明	6
計	404

3．医務業務

医務業務は、職種や資格によって分担され、それぞれが連携し合い実施されていた。

①医師（国士舘大学 教授）

避難所全体の医務業務の統括、毎朝の回診

②救急救命士（国士舘大学 卒業生）

患者情報の記録や医師の診療の補助、医務室業務のコーディネート

③救急救命士養成学生（国士舘大学体育学部）

バイタルサインの測定、避難者とのコミュニケーション

④保健師（東京都福祉保健局）

健康相談室の開室、避難者の健康面等の相談、心のケアの実施

⑤東京消防庁

被爆検査、現地警戒本部の設置、急病人発生時の救急搬送

4．国士舘大学活動概要

活動日時は 3 月 19 日から 5 月 8 日までの 50 日間で、毎日 10 時から 17 時まで主に医務室業務を担当した。活動内容は医師による回診、医務室にて体調が悪い方や具合が悪い方への対応、医療機関受診の必要性の判断、近隣医療機関への案内等である。

医務室には医師 1 名と救急救命士 1 名、そして救急救命士養成学生 2 名が常駐し、緊急時に対応できるような一次救命処置資機材や外傷資機材、市販薬を携行した（写真 1）。

写真 1 医務室室内の様子

医師による回診は入居されている各部屋に医師が巡回し、その日の訴えや体調の良し悪しを聴取する（写真 2）。

写真 2 回診を行う医師

医療的なフォローが必要な人のみならず全ての人々に積極的な声掛けを行い、毎日の血圧測定が必要な方には救急救命士及び、救急救命士養成学生が測定した（写真 3）。

写真 3 血圧測定を実施する救命士養成学生

また、3 月 25 日より本学ウエルネスリサーチセンターのトレーナーによる運動療法が、医師による回診の後に続いて行われ、寝たきりの方や車いすの方を対象に運動療法を実施した。中でも車いす生活であった避難者の方が約 2 週間足浴を実施した結果、歩行が可能になりとても満足されていた様子であった。

5．医務室対応

国士舘大学が活動を行っていた医務室での対応は避難者数の推移と同じように減少傾向となった。3 月 19 日から 5 月 8 日までの対応人数は 71 名（男性 39 名、女性 38 名）で 1 日平均対応人数は 1.6 人だった。

症状別では、医務室に来室される方の多くが喉が痛いや痰が出る、体がだるいといった感冒様症状、腹痛・下痢が多かった（図 2）。回診時に水分補給を促していたためか脱水という症状は少なかった印象があった。

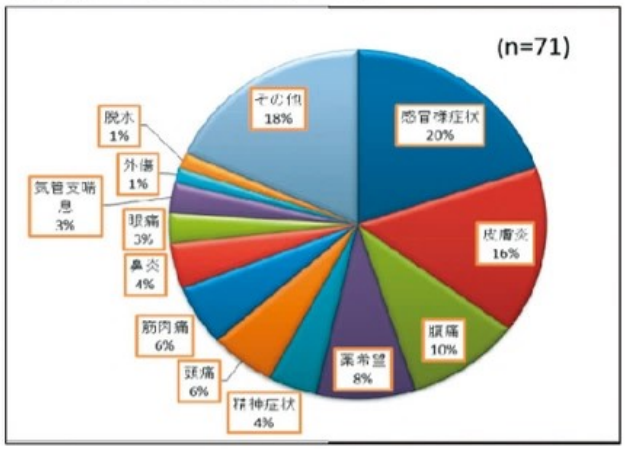


図 2　症状別医務室受診者

医務室に受診した 71 人の内 36 人（51%）が市販薬で対応し、15 人（21%）が医療機関紹介を行った（図 3）。健康相談は主に保健師さんが担当していたため医務室への相談は少なかった。

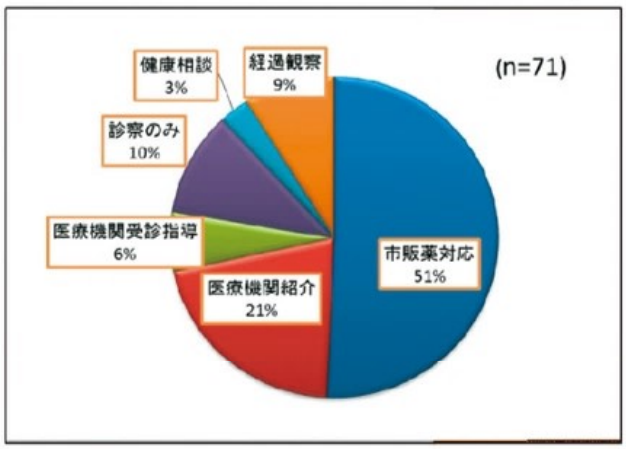


図 2　医務室対応割合

医療機関を紹介した例は、多くが元々処方されていた薬が無くなり、近隣の医療機関を受診するように紹介した例が多かった。

6．問題点と改善点

今回の活動で挙げられた問題点は多くあり、それに対する改善点を見出すことで少しでも避難者に快適な生活を与えられるように活動を実施した。その問題点と改善点を下記に示す。

① 避難者が使用できる衛生器具がない

国士舘大学が支援物資で頂いた次亜塩素酸ナトリウムスプレーや除菌ウエットタオルの配置を行い、誰でも自由に使用できるようにした。また、入居者全員にマスクを配り風邪等の予防に努めた。

②回診時に毎日のフォローが必要な人が分かりづらい

避難者居住区の図を作成し一目でフォローが必要な人がどの人か分かるようにし、回診時に役立てた。

③病院に受診する場合、移動手段がない方への対応

車がある方は車で行って頂く。足が不自由な方に対しての車両等を準備しておくべきである。

④寝たきりの方や車いすの方への運動促進が必要である。

回診時に運動療法による深部静脈血栓症の予防を提供している

⑤部屋の乾燥でくしゃみや咳・喉の痛みを訴える人がでてきた

湿度計による湿度管理が必要だが費用がかかるため、各部屋濡れたタオルを干して湿度を保つようにしている

⑥精神疾患を患っている方への対応

近隣の医療機関では受け入れることが困難ということで日々の活動において問題点としてあげられることが多々あった。しかし、行政と医療機関側の問題が関わっている為改善には至らなかった。

7．まとめ

被災地と同様に日々のニーズが変化してくるためそれに応じた柔軟な対応が必要とされた。被災者の方との会話をすることは普段の会話よりも一層の背景の理解と言葉使いや表情に気を付けなければならないのでとても勉強となった。毎朝定期的に血圧を測定し会話をしているだけでも感謝の言葉を頂けたので継続してボランティアを実施していることに意義があったのだと感じた。

さらに、この度の味の素スタジアムでのボランティア活動を通して学びえたものは多くあった。特に、災害時に必要な知識、災害を目の当たりにした経験、様々な背景を持った方々とのコミュニケーション、多くの機関との関わり合いを持つ多職種連携、ボランティア体制のシステム構築、それらは正に国士舘大学の教育理念に掲げられている「活学」とも考えられた。

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

１０．東日本大震災における国士舘大学での医療支援

国士舘大学大学院救急システム研究科　修士課程２年

曽根　悦子

【はじめに】

2011年3月11日に発生した「東日本大震災」による東京電力福島第一原子力発電所の状況変化に伴い、福島県からの避難者を3月17日から東京武道館(足立区綾瀬)で受け入れることが決定した。国士舘大学では3月19日より東京武道館で医務係を担うこととなった。

【救護室全体の活動】

国士舘大学で救護室を担当したのは、2011年3月19日～4月24日の東京武道館が避難所として開設し、閉鎖するまでの37日間である。

救護室を1日運営していく上でのスタッフは、足立区医師会医師2名(13:30～14:30)、保健師2名(保健師1名・看護師1名)、国士舘大学救急救命士2名、国士舘大学救急救命士養成課程学生2名の計8名である。

活動時間は10:00～17:00は救護室として、保健師2名、救急救命士2名、国士舘大学救急救命士養成課程学生2名が常駐し、13:30～14:30の1時間の間に医師による健康相談とし、医師が2名救護室に在室し、回診を行った。

【医務業務の役割分担】

・医師(足立区医師会)

健康相談(1日1～2回)、近隣の病院紹介

・保健師,看護師

館内巡視、血糖測定（月・水・金)、医師による健康相談の補助

・国士舘大学

館内巡視、医師による健康相談の補助、傷病者発生時の初期対応、慢性疾患患者の把握、糖尿病食の配布、血圧測定・血糖測定補助、要入浴介護のリスト作成、こころの相談受診者リスト作成

・糖尿病食の配布

３月３０日～　糖尿病患者対象：６名、１日２回(昼・夜)　最大10食準備、食前・食後２時間以内の血糖測定、１食８００kcal、お味噌汁付き

・こころの相談

毎週火・木曜日に足立区医師会の精神科医の先生が往診してくれる

・入浴介護サービス

対象は体の不自由な方（救護室にて要介護者リスト作成)、実施先は足立区地域包括センターの方々、館内のシャワールーム貸切、日時：３月２７日（５名)・４月６日（３名）⇒火・木：足立区地域包括センター ディサービス（２名）

※バイタル測定基準

BP:170/100、HR:110、BT:37.2℃

【救護室の１日の流れ】

・10：00～救護室にてミーティング

（ホワイトボード、避難所図面を使用する）国士舘大学スタッフ、保健師、医師、東京都福祉保健局、東京都スポーツ振興局が参加し、前日までの流れ、救護室が閉まった後体調不良者について、東京都の方々のミーティング内容、今週１週間の東京武道館避難所のスケジュールの確認を行う。さらにどのような体調不良の方々がいるのか、生活に不安を抱いている方、東京都の方々に対応をして頂きたい方など、新しく避難所に入館された方の生活場所を教えてもらうなど、避難所で生活されている方の情報交換を行った。

写真1　救護室にてミーティング

写真2　避難所図面記載ホワイトボード

・10：30～巡視開始

国士舘大学スタッフ、保健師、医師にて２つチームを作成し、以下の内容に分かれ館内を巡視する。

①第一武道場、大武道場：問診、血圧測定（避難所図面に名前がある方を中心に）

②足の不自由な方々、糖尿病の方々の血糖測定（月水金）

この巡視の際に、体調不良の方がいないかを確認する。体調不良の方がいた際は場所を確認し、医師が来た際に救護所に来てもらうよう伝える。新しく避難所に入館された方には、救護所の存在を伝え、体調不良など困ったことがあれば、救護所に来てもらうよう知らせた。

さらに、既往歴に高血圧や糖尿病、足が不自由な方のバイタル測定を行う。毎日巡視の際に声掛けをし､バイタル測定を行う方に対しては、カルテを作成し、毎日のバイタル測定の結果を記入し日々の変動などを確認していく。糖尿病の方には、月・水・金に保健師が血糖測定をした。さらに糖尿病食が必要かどうか確認をした。

足の不自由な方に関しては、入浴の状況、食事の有無、バイタル測定などを毎日行い、現状になにか問題点がないかどうか確認する。さらに3月後半には､柔道整復師のボランティアで来ていたが、許可なしには避難所館内には入れないため、救護所を通して足の不自由な方へのケア（マッサージ、リハビリなど）を一緒に行った。足の不自由な方や腰が痛いなどを訴える方などの情報共有を行い、ニーズに合わせて紹介をする。要介護が必要な方には、デイサービス・入浴を行ってくれる施設があり、施設と相談しながら日程を決める。その際も救護所を通し、情報交換を行った。

精神的に不安定な方、元々既往歴に精神疾患を持っている方、不眠を訴えている方には、精神科の先生がきて行う「こころの相談」というものがあることを伝えた。

写真3　巡視

・11：30～午前中の情報の共有、データーのアップロード

巡視で新たに体調不良や高血圧や糖尿病などの既往歴をもっている方がわかった場合は、ホワイトボードに記入した。

柔道整復師、介護士、精神科医師への相談が必要な方もピックアップし、引き継ぎノートやホワイトボードに記入した。

糖尿病食が必要な方には、次に日の食事の有無を確認し、提供してくれる病院に電話を行った。

・12：15～糖尿病食配布

糖尿病食が東京武道館に到着したら救護室に連絡が入り、救護室の者が受け取りに行く。夜間は福祉保健局の方が配布をしてくれるため、一緒に糖尿病食の配布を行った。

・13：30～医師による健康相談開始（13：30~14：30）

午前中の巡視の際に体調不良を訴えていた方

に再度声掛けを行い、医師による健康相談が開始されたことを伝えた。

健康相談の補助（血圧測定、体温測定など）を行う。近隣の病院紹介をし、そこまでの地図の作成、健康相談票のコピーをとり、紹介状として作成した。

写真４　医師による健康相談

写真５　医師による健康相談・補助

・15：00～巡視開始

足の不自由な方や毎日声掛けをしている方に対して、医師とともに巡視をする。（避難所図面に名前がある方を中心に）血圧測定、血糖測定、体温測定、聴診などの補助を行った。

・15：30～その日に聴取出来たものなどをアップロード

その日に聴取できたものや、新たに体調不良を訴えた方について、ホワイトボード、紙ベースでの避難所図面のアップロードを行い、情報の共有化をはかった。

・16：00～救護室にてミーティング

国士舘大学スタッフ、保健師、東京都福祉保健局、東京都スポーツ振興局の方々と救護室にてミーティングを行う。健康相談者数や体調不良を訴えた方などについてなどの報告を行う。その他、次日以降の東京武道館のイベントなどについて情報交換を行った。

写真７　救護室にてミーティング

・16：30～書類の整理（カルテ、退館者等の整理、避難所図面コピー）

明日の救護室の準備を行い業務終了。

・17：00～救護室施錠

【医師による健康相談者数】

救護室を開始してから37日間での医師による健康相談を行った結果、受診者は合計 336 人であった。開始してから「常備薬」か欲しいという相談がとても多かった。避難してきた際に薬を置いてきてしまった、薬が切れた、などの相談が多く聞かれた。その後、相談者数は減少していき、最後の時期は「皮膚のかゆみ」など皮膚疾患を訴える方が増えた。避難所開始から支給された毛布の交換や清掃をするように声掛けをして、少しでもかゆみが軽減するように対策をとった。

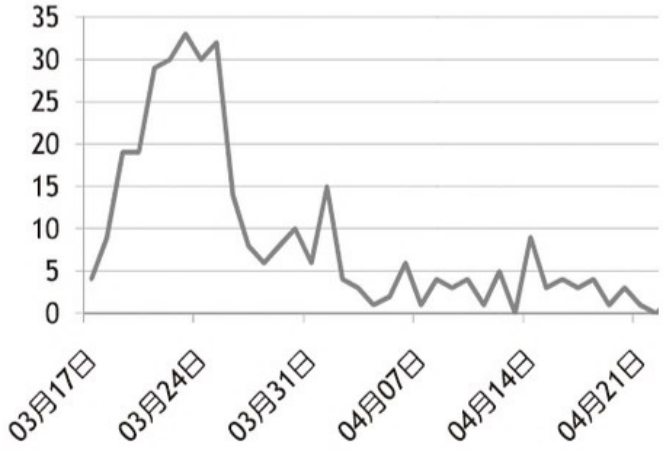


図１　医師による健康相談者数

【医師による健康相談者・症状】

救護室での医師による健康相談に来た方の症状は、336 人中 36%が「感冒症状」、14%が「不眠・不安」、12%が「皮膚疾患」、8%が「頭痛」、3%が「腰痛」、3%が「下痢」、3%が「打撲」、21%が「その他」であった。

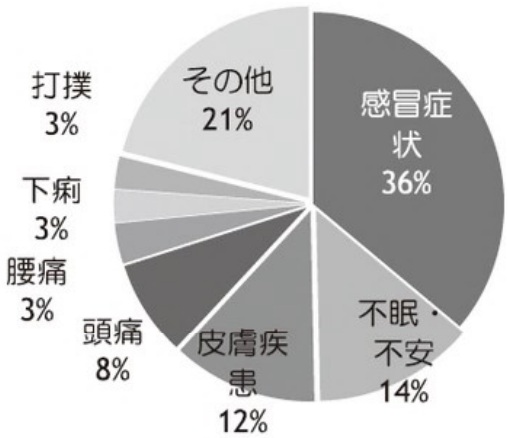


図２　医師による健康相談・症状

【救急搬送事案】

救護室から外部の医療機関への救急搬送は 3 件あった。下記に詳細を示す。

・８５歳男性（３月１９日）

胆汁様の嘔吐が続き、119 要請

⇒ 綾瀬　苑田第一病院へ入院

・６８歳男性（３月２３日）

発熱(39.6℃)が続き、医師の判断により 119 要請 ⇒　検査によりインフルエンザ陰性

・７０歳男性（３月２５日）

発熱 38.9℃、医師の診察により、呼吸音ラ音を聴取、既往歴に気管支喘息があるため、医師の判断により 119 要請

【今回感じた問題点】

・継続観察者の場所の把握が難しい

⇒避難者のエリア配置の段階で、体の不自由な方・リスクの高い既往歴がある方・小さい子供がいる方に対して、避難ブースを固めてもらう。

⇒救護の目が届くところにいてもらい、継続観察や巡回診療がしやすいため、体調の変化などに気付き易い。

・プライバシーがない

⇒不眠を訴える方々が多かった

⇒カーテンなどで仕切りを高くしプライベートな空間を作成するべきである

【天皇両陛下ご訪問】

天皇両陛下が東京武道館にご訪問された際、国士舘のスタッフにもお声をかけて下さった。

写真８　天皇両陛下ご訪問

Ⅲ．東日本大震災への医療支援活動

１１．［活動記録写真集］
福島県被災者避難施設　味の素スタジアム・東京武道館・東京ビッグサイトでの医務活動

味の素スタジアム敷地内にある避難施設入り口

東京都職員と国士舘大学の医師、
および救急救命士とのミーティング

味の素スタジアム内に開設した医務室で
国士舘大学の救急救命士が医務対応

国士舘大学体育学部スポーツ医科学科の学生が
医師の回診に同行し血圧測定

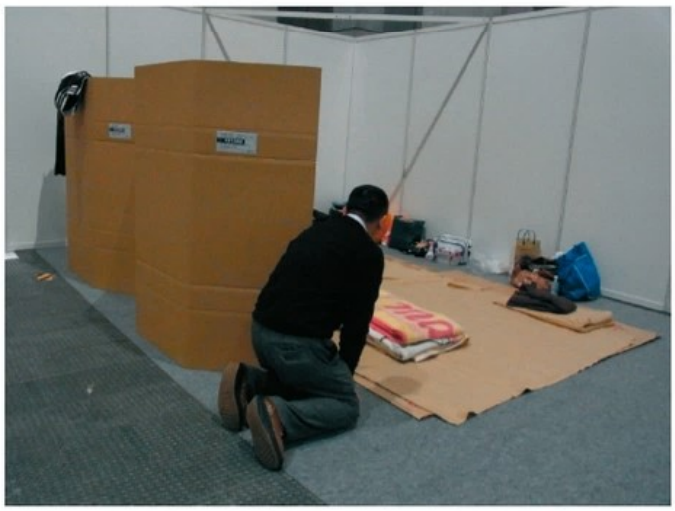
味の素スタジアム内の避難施設

国士舘大学医師の定期回診

医師の回診に同行し、補助を行う
国士舘大学体育学部スポーツ医科学科の学生

東京武道館内に避難している様子

東京武道館にて医務ミーティング中の
国士舘大学の救急救命士



東京ビッグサイト内の避難施設にて
国士舘大学医師の回診

Ⅳ．東日本大震災での学生ボランティアの役割と活動

１．国士舘大学体育学部
講　師　　中山　友紀

２．国士舘大学体育学部
講　師　　永吉　英記

３．国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科
修士課程１年　　浅倉　大地

４．国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科
修士課程１年　　山崎　源太

５．国士舘大学大学体育学部スポーツ医科学科
４　年　　下田　和輝

６．国士舘大学大学体育学部スポーツ医科学科
３　年　　太田　浩史

７．[活動記録写真集]
東日本大震災発災後の国士舘大学学生の
ボランティア活動

Ⅳ．東日本大震災での学生ボランティアの役割と活動

１．被災地での学生ボランティアの役割と防災教育の在り方

国士舘大学体育学部　講師

中山　友紀

1　はじめに

このたび発生した東日本大震災は、今もなお私たちの記憶に「味覚」「嗅覚」「聴覚」「視覚」「触覚」という五感のいずれか、あるいはすべてが記憶として残っているのではないだろうか。また、地震・津波が発生した直後から、被災者や救出・救助者又は、現在社会を生きる若者達の環境や心理状態に変化をもたらした。そもそも各個人で日頃から何を準備し，災害に対してどのように対処すればよいのかを考えるべきであるが、未曾有の災害では手も足も出ない状況であったのが本音であろう。しかし、その災害から芽生えた効果は大きく、学校教育では得る事の出来ない何かを獲得し、化学反応し続けている感が伺え知れる。ここでは、災害に関する定義を再確認するとともに、災害が与える様々な影響について確認するとともに、この度発生した東日本大震災において、災害現場の第一線で数多くの災害現場に立ち会った経験のある救急救命士という立場、大学教員としての立場から、被災地で若者（学生）達とボランティア活動を通じて感じた学生ボランティアの役割と防災教育の在り方について報告する。

2　災害とは

私たちが「災害」と聞いて思い浮かべるのは、地震や台風などの自然現象に伴う被害であろう。我々の人類は、海、山、川、草木等の緑に囲まれた自然豊富な地球上で、その豊かな自然の恩恵を受けて生活を営んでいる。しかし、自然はときとして猛威をふるい、風水害や地震・津波、噴火爆発、旱魃などを引きおこし、我々の生命を奪い、広く社会機能も麻痺させ、日常生活をも困難にする。また、自然災害だけでなく、列車や航空機事故や、化学工場や放射性物質を扱う施設での事故など、人間が関与するいわゆる人為災害も同様に大きな被害をもたらす。テロなども災害に含まれる。

経済開発機構（Organization for Economic Co-operation and Development）は災害を「地元の対応能力を超えており、国内あるいは国際レベルの外部援助を要請する必要がある状況や出来事」と定義している。また「突然のしかも大規模な環境の変化であり、誰も望まないようなつらい新しい現実を生み出すもの」とも定義されている。つまり、災害とは、大きな破壊、損害をもたらし、地域あるいは国内だけでは対応が困難となる、予測不能で突然おこる現象である。

しかし、災害は生活環境のみが変化するのではなく、心身に様々な変化をもたらす。事項では心身に与える影響について理解を進める。

3　災害後の心的ストレス

3．1　被災者のストレス

災害は大きな衝撃をひとびとに与え、その心理的打撃がもたらす心のゆがみが心的ストレスである。ゆがみは災害を受けたすべての人におこり、異常な状況における正常な反応ともいえる。ストレス反応は、身体、思考、感情、行動などにあらわれ、時間経過とともに変化する。

災害後に生じるストレス反応は、時間の経過と災害復興とともに徐々におさまるが、災害によって受けたトラウマ的体験によって、強いストレス反応を示したり、時間が経過するとともにストレスが深刻化する場合がある。いわゆるトラウマ的ストレス反応であり、過覚醒、再体験、回避という反応を示す。こうした状態が１ヶ月以内に自然治癒するものは急性ストレス傷害 acute stress disorder(ASD)と呼ばれ、１ヶ月以上続く場合には心的外傷後ストレス傷害 posttaumatic stress disorder(PTSD)と分類する。

3．2　救援者のストレス

災害時のストレス反応は、被災者だけではなく、「隠れた被災者」ともいわれる救援者にもあらわれる。救援者は、悲惨な現場を目の当たりにしながらも、使命遂行のために、われを忘れて救護活動を行うなかで、時には最悪感や無力感にとらわれてしまうことがある。救援者は万能ではなく、自分の背中を見えない。つまり自分の行っていることを、客観的に見ることは困難であることを理解する必要がある。

救援者におこるストレス反応には、私にしかできない状態、燃え尽き症候群、被災者離れ困

難症、元には戻れない症候群がある。こうした救援者のストレス処理には、個人で行う自己管理と、チーム間での日々のミーティングや相互に観察し合う支援がある。また、あらかじめ救援内容を確認すること（ブリーフィング）、救護中の息抜き（デフュージング）、最終的な救援の総括（デブリーフィング）も必要とされる。

私たちは、日常多くのストレッサーに対処することを余儀なくされているが、災害時には日常以上のストレッサー、つまり人びとの生命や財産を脅かす出来事が次々とふりかかることになる。このようなストレッサーに適切に対処することにより、深刻な状態に陥ることを防ぐ、こころのケアが重要なのである。

４　ボランティア

阪神・淡路大震災（１９９５年）以来、大規模な災害が発生すれば、いつもボランティアの姿が見られる様になってきた。被災地に駆けつけたボランティアは、主として災害救護活動に参加するが、現在では、復興支援や平常時の防災活動に参加するボランティアも災害ボランティアと総称される。

５　大地震で起こること

大地震において家屋の倒壊、津波、様々なライフラインの途絶が発生するとともに、人間が感じる五感の均衡が崩れた状態になり、災害と認識し、五感の感覚が多く失われるほど大災害と感じる。多くの場合、大地震直後から生体反応（交感神経が有意になり、ノルアドレナリンが分泌し、唾液腺分泌減少、頻脈、気管拡張、血圧上昇、瞳孔散瞳、末梢血管の収縮、内臓活動低下）や、五感の幾つかが失われ、パニックになる。しかし、五感の幾つかが失われたことを自分で自覚する事が重要であり、緊急事態を認識する証でもある。冷静に自分の何の均衡が崩れたのかを認識するとともに、危機行動を開始する必要がある。以下からは、東日本大震災発生直後から時間経過とともに被災者および学生の心はどのように変化していったのかについて報告する。

５．１　発災直後

被災者は２０１１年３月１１日１４時４６分地震発生直後「縦揺れ・横揺れ」「突き上げるような」「立っていられない」（２０１１．３．１２　毎日新聞朝刊記載）状況であると被災者は証言し、またニュース（緊急地震速報）等のメディア・イベントを通して、バーチャル的に体感した非被災地の者は「映画みたいな光影」、「戦争の後のよう」（２０１１．３．１３　朝日新聞朝刊で記載）と感じ間接的被災者となった。だが、それ以上もそれ以下も無く、誰しもパニックで頭の中は真っ白。良くて、柱等の固定物に掴まるのがやっとではないだろうか。防災避難訓練等では机に下へ隠れ、揺れがおさまった後外へ避難することをずっと教育され信じてきたが、こんな強い揺れで何を考え行動すればよいのか。私なら柱等の固定物に掴まるだろう。

学生も一人の人間として被災者同様にパニックになり、頭の中が真っ白。揺れがおさまった後に携帯電話、インターネット、又はメディア等で情報収集等する。

このように両者共に「情報」により心情を大きく左右されている。被災者は特に「状報（状態を報告すること）」をいち早くキャッチし、「状態」をもとに人々が自律的に危機回避行動を本能的に行い、一時避難所到着するやいなや、個々で感覚的に収集した「情報」を持ち寄り、集約する事が繰り広げられる。しかし、東日本大震災の被災地では、「情報」の発信基地局自体壊滅状態とないりその機能を失い、「五感」の視覚、聴覚を失った状況で茫然自失、恐怖感、不安感、悲しみ、怒りと言った感情の崩壊を感じていた。

５．２　発生から１時間

被災者は、突然の震災発生から我に返り、人々は個々に感じた長さこそ違いは有るにしても、おおよそ現在自分自身に降り掛かった状況が認識出来る時間帯である。その時になり、漸く自分自身の生命維持をする方法や、家族等の安否確認を認識するタイミングとなる。

学生の家族、友人連絡できない状況である場合、合理的思考の困難さ、思考狭窄、集中力の

低下、記憶力の低下、判断能力の低下などの思考能力が崩壊し、感情機能も低下崩壊していることから、無我夢中で確認作業で必死であった。

５．３　発生から24時間

被災者は、地震による心理的衝撃が和らいでくると、災害によって生まれた新しい現実に気づきはじめる。その段階から災害等で失ったもの、生まれたもの、変わらなかったものを確認していく時期で、発生した出来事を自分で見て、感じた事や物から現実を理解する時期でもある。被災者は何の変哲もない道であっても、その地域の住民にとっては、意味をおびているものであり、様々な思いの詰まった物である。このように、風景や出来事を特定かつ共通の意味を有する現象として人びとに把握させる空間記憶が存在する。その空間記憶の回復をめざし、ここは大丈夫だ、ここは変わりないという事を確認する。

学生は、メディアイベント等を通じ各被災地の状況を理解する時期である。しかし、それが被害を受けているのかいないのかを確認判断が出来ないため、若者自信が個人個人持つ空間記憶により把握、比較し、被災地をより深く理解したつもりになりまた、被災者の言葉（訴え）を理解したつもりとなった。

５．４　発生から７２時間

災害の専門家の間に、GOLDEN 72 HOURSという表現の存在がある。人命・安全の確保に関する時間的制約を示すと同時に、災害発生から７２時間を過ぎると生存率は低くなることを示している.

被災者はこの頃になると、震災によって生まれた新しい現実から、自分自身で出来るものと出来ないものが明らかになり、それらが震災からなのか、自分自身の実力なのか又は、疲れなのか、被災者が自暴自棄となる時期である.

これらは災害ストレスに起因する心身変調であり、再体験や生理的緊張の諸症状を自覚する被災者は多いが、そうした心身変調の意味を理解する人は少ない。「何か変だ，何かおかしい」、「自分は変になったのか」という気持ちを抱く人が多いが、おそらく、災害ストレスによる心身変調であると自覚せずに、みずからの体験やそのつらさ、震災における悩みを語っている。いずれにせよ、安心できる相手、信頼できる相手をみつけて自己開示する必要性がある時期である。

学生は、知らず知らず打ち明け話を基本とするデブリーフィングを実施していた。間接的ではあるが、災害を通じて自分たちの体験や対応についての共通認識の確認を行っている。その場合には，友人間で心理的な抵抗感なしに打ち明けることの出来る環境を整えることが大切であり、打ち明け話を通じて、震災後の心身変調が、正常な反応であることを理解させることとなる。災害時に体験したことを相互に絡み合って、事態の改善を目指し話し合う姿勢、思いやる姿勢がこの時期に芽生えたのである。

５．５　発生から１週間

この頃になると被災者は、震災によって生まれた新しい現実を脆弱ながらも受け入れ、各個人レベルで生活、救出・救助活動のスタイルが確立してくる時期である。また、阪神・淡路大震災以来，大規模な災害が発生すれば、いつもボランティアの姿が見られるようになっており、被災者は彼らと共存ししばらく自立に向け生活スタイルを確立していく時期である。

この時期の被災地では、駆けつけたボランティアによるさまざま復興支援一色であり、災害ボランティアは、被災者の傍らにあって、あくまでも被災者を活動の中心に据え、臨機応変に、被災者や被災地の支援を行っている。そうした支援活動を学生は初めて認識した。個性あふれる個々の被災者や、独自の風土や土地柄をもつ被災地という特個的な場に心が惹かれたのである。

５．６　発生から１ヵ月

混沌としていた新しい現実もやがて落ち着きをみせ始める。阪神・淡路大震災では約３ヶ月でライフラインが復旧した頃、ボランティアと

呼ばれた若者は去り、自衛隊も完全撤退した。また、社会的関心はひとたび真新しい出来事が発生するやいなや、たちまち被災地からマスコミも去り、被災地のことはあまりマスコミでも取り上げなくなった。被災地の人びとの生活は震災前のように彼らだけの生活に戻った。つまり、被災地に日常性が戻ったのである。

震災後の現実そのものが安定し、輪郭がはっきりしてきたときにはじめて、本当の意味での現実適応過程が始まる。つまり、この時点から被災者の格差が明確になり始める。被災程度の違いや復興に降り向けられる資源の量に違いから、その後の対応もおのずと違ってくる。それまでは地域共通の課題であった災害からの復旧が、復興段階に入ると個人単位あるいは世帯単位での個別課題へと変化する。この段階で「みんな一緒」「おたがいさま」は喪失する。大枠で現実が定まったということは、引き続きその現実が自分の人生にとってどのような意味をもつかを検証することが求められる段階がきたことを意味する。

学生は、これらの時期に学生ボランティアとして被災地宮城県石巻市に赴いた。彼らにボランティアに参加した理由を尋ねてみた。「被災者を助けたい」「自分の技能を活かしたいから」などの答えがかえってきた。どれも納得出来る答えであった。もちろん、友人に誘われ仕方なく参加する人もいたが、「いてもたってもいられなく」と回答する学生が最も多く、与えられたボランティア活動を、愚痴一つ言わず黙々と行っていた。「何かがいつもの学生と違う」が私の彼らに対する感想であった。

本来アンケート調査を行って、参加動機や感想等の最頻値を求めたり分類したりしてはっきりと特定すればよいように思う。しかし今回そうした調査を重視していない。理由は、そもそもボランティアは、それぞれ一個人が一人の人間として、被災者等に向き合い、感じ、必要と思われる物事に手を差し伸べる事である。

若者や現代社会において、答えやこれから実施する物事について事前に知り、理解することを良しとする風潮が氾濫している行為に相反した行為ではあるが、そこから生まれた自立性は大きいと感じ、今なお「何かがいつもの学生と違う」が良い方向に変化し続けている。

５．７　発生から半年

この時期は、震災発生以来活動し続けてきた人びとの疲労が極限に達する時期である。蓄積疲労からくる免疫力の低下から体調不良となり、「出口が見えない」という言葉が災害対応に従事してきたほとんどの担当者の口癖になる時期でもある。震災を契機として創出された現実がまだ明確な輪郭をもたない間は、日々の状況は変化し続け、人びとを興奮させ、気持ちを高揚させる。流動的な現実に対応する、あるいは遅れをとらないようにするだけで気が張っていた時期である。自分が取り巻く環境が次々と変化する以上、外的な環境変化に対する注意を集中する必要がある。人びとはその代償として疲労を蓄積しながら、いわば「燃え尽きながら」毎日を送ってきた。半年か経過し復興計画が樹立され、実行段階に移ると、新しい変化が起きなくなった。また、被災地以外では、震災関連の報道は激減し、国民全体が「なかったこと」にしてしまう風潮が出始め、緊急援助隊や広域援助隊をはじめ学生ボランティアたちでさえも、学業・生活にもどり、まるで過去の活動を懐かしむように、仲間同士で武勇伝を語り合い、仲間に受け継がれていくにしか過ぎない程度でもある。

そして間もなく震災から一年が経過する。何が変化し何が変わらないのかを学生ボランティアに帯同した大学教員として、伝えるべき責務があると考える。

６　おわりに

振り返ると地震発生直後、身の危険を感じあらゆる情報を得ようと直視し、１時間後では家族の安否を確認し現実を把握しようとしていた、２４時間後では生き残りを考え、７２時間後ではあらゆるものに不満をいだき、１週間後では毎日の生活だけで大変だったが復興に希望をもち、被災地は善意で溢れていた。１ヶ月目では

様々な問題に直面しながらも自立に向け努力し、半年が経過し燃え尽きてしまい間もなく１年が経過する。そして学生達も通常教育では得る事の出来ない何かを、経過とともに変化し獲得した。

我々は何をすればいのか？

決してこれらの経過を教育し伝える従来の災害教育、防災教育ではなく、その瞬間瞬間で何を考え、何を感じ、何をやらなくてはいけないのかを教育しなければならない。つまり、日常生活のなかで展開されている家事や仕事、勉強、子供の安全、高齢者を始めとする様々な福祉と社会問題、地域の伝統など生活まるごとを組み込みながら、みんなで繰り返し、地域特性に合わせた災害・防災教育をしなければならないと考え、本災害にボランティアといて参加したことにより、学生共に化学反応し続けている。

引用文献

1) 日本赤十字社　事業局看護部編集：災害看護学・国際看護学，医学書院，東京 (2010)
2) 京都大学防災研究所編集：防災学ハンドブック，朝倉書店，東京 (2004)
3) ベン・ワーズナー，岡田　憲夫訳：防災学原論，築地書館，東京 (2010)
4) 守屋　克也，渥美　公秀　編著者，近藤誠司，宮本　匠　著者：防災・減災の人間科学，新曜社，東京 (2011)
5) 都甲　潔，飯山　悟：トコトン追求　食品・料理・味覚の化学，講談社，東京(2011)
6) 山口昌樹，中島　康，中山友紀：災害ストレスの対処法，講談社，東京（2011）

Ⅳ. 東日本大震災での学生ボランティアの役割と活動

２. 学生ボランティア派遣システムとベースキャンプの設置

国士舘大学体育学部　講師

永吉　英記

1. 派遣までの経緯

3 月 12 日に国士舘大学緊急医療支援隊が石巻に派遣されたことにより、甚大な被害を受けた石巻市の被災状況と、これから必要とされる支援内容が明らかとなった。緊急医療支援後に必要となった支援は、ニーズの高い物資を病院や各避難所に提供することであった。スポーツ医科学科は、関係する企業、学会、財団等と連携し物的支援が進められた。その後、3 月下旬には石巻市に設置されている病院や各避難所までの輸送路が整備され、メディアによる石巻の被災状況が頻繁に放映された影響もあり、全国各地から援助物資が届けられるようになり、支援物資の必要性が少なくなってきたが、次なる支援は、震災直後から対応に当たっていた病院や避難所運営のスタッフらが疲弊し、また、避難所から自宅に一時帰宅する被災者も増え、広範囲にわたるガレキ撤去作業の必要性が高まったことによる人的支援であった。石巻市では石巻専修大学の広大なキャンパスを拠点として、石巻復興支援協議会が石巻社会福祉協議会及び石巻市と連携してボランティアの受け入れを開始したことにより、国士舘大学でも学生ボランティアを組織し被災者支援活動を行うこととなった。

2. 学生ボランティア組織と参加の手続き

国士舘大学では、附置研究センターであるウエルネス・リサーチセンターにおいて、スポーツイベント救護、ＡＥＤ講習会、各種スポーツ等教室等、年間 200 件以上(22 年度報告)の活動を、300 人の学生ボランティア登録者（24 年 2 月現在）によって行われている。今回の被災者支援ボランティア活動においても、参加者情報の整理、傷害・賠償責任の保険加入、迅速な連絡体制が必要なことから、被災者支援活動に参加する学生は、ウエルネス・リサーチセンターが管理・運営するホームページ（図１）内のボランティアシステムによって参加登録を行わせた。被災者支援活動の参加希望者らには通常のボランティア保険に加えて、天災に対応した保険に加入し、参加リスクの説明を行った上で本人と保護者の同意を得るための「被災者支援ボランティア参加願い」（図３）を提出させ参加のの手続きを進めた。

図１. ウエルネス・リサーチセンターホームページ
(http://wrc.kokushikan.ac.jp/index.html)

図 2. ホームページの参加申し込みフォーム

提出先：国士舘大学ウエルネス・リサーチセンター　ＦＡＸ：042-339-7227

国士舘大学体育学部
学部長　渡辺　剛　殿

被災者支援ボランティア参加願い

私は以下の事項を承諾した上で、東日本大震災の被災者支援に学生ボランティアとして参加することを希望します。

1. 被災地に行くにあたって被災地側に迷惑をかけず、食事・宿泊所などは自己負担とします。
2. 自らの健康管理・精神管理をしっかり行います。
3. 学生の本分を忘れず被災者のために考え、行動します。
4. 国士舘大学ウェルネス・リサーチセンターのボランティア登録により、ボランティア保険（登録費無料）に加入します。
5. 保護者は上記の条件を了承し、学生の参加を承諾しています。

平成２３年４月　日

学生名前：＿＿＿＿＿＿＿＿ 印

学籍番号：＿＿＿＿＿＿＿＿

携帯番号：＿＿＿＿＿＿＿＿

メールアドレス：＿＿＿＿＿＿＿＿

保護者氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿ 印

保護者連絡先：＿＿＿＿＿＿＿＿

保護者住所：＿＿＿＿＿＿＿＿

図 3. 参加リスクの説明と本人と保護者の同意書

3. 期間設定と装備

通常、キャンプ生活では3日目から4日目に事故や怪我が多く発生するといった報告があり、その要因は、環境への適応に対する注意力低下に加えて、心身の疲労が伴うこととされている。そこで、今回の被災者支援学生ボランティア活動では、第1クールを3泊4日と設定し、過酷なキャンプ生活での心身の疲労と、それに伴う事故や怪我の発生リスクを少なくするための期間設定を行った。また、第1クールの参加人数を30名と設定した。この人数設定は、石巻市でのボランティア活動中に使用できる車両4台(10人乗りハイエース、12人乗りキャラバン、7人乗り車両、2人乗りレンタルトラック)で乗車可能人数が31名であり、被災地で続く余震から、さらなる津波等のリスクに備えて参加者全員が車両で避難できる状況を確保するためであった。

被災者支援活動参加者らには出発前に事前説明会を開催し、参加リスク等の説明に加え個人装備について詳細な確認を行った。3泊4日の第1クールで準備した備品は、個人装備（表1）、全体備品（表2）となった。ベースキャンプ地となる石巻専修大学グラウンドは、自衛隊により仮設トイレは設置されたが、ボランティアが宿泊するための屋内施設はなく、テントによるキャンプ生活の準備と、電気、水道、ガスは使用できない状況であったため、調理のためのプロパンガス、トランシーバーや携帯電話充電のための発電機の準備が必要となった。また、調理や食器の片付けができる排水施設はなく、残飯を一切出さないような対応が必要となった。30名分のキャンプ生活に必要なテントや寝袋等の備品は、国士舘大学体育学部の野外教育実習で使用しているものを活用した。

4. 食料計画

1クール（3泊4日）での食事メニューは表3のとおりであった。食料の賞味期限を考慮して、2日目の朝までの食料は各自で準備させ、それ以降は、学生ボランティアに引率した本学教職員と野外活動経験豊富な大学院生2名によって調理し給食で行った。冷蔵器具がない条件下に対

表1. 個人装備一覧表

個人装備

装備名	個数	理由・ポイント
タオル(作業用)	5	汗をかくので、多めに持って来て下さい。
作業マスク(防塵マスク)		作業日ごとに。
帽子	1	
長靴(作業靴)	1	なければ履き替える靴1足持参。
作業着 上下	1	必ず袖の長い物。色が濃い物。
着替え	2	汗をかくので、多めに持って来て下さい。
靴下	4	厚手の物。多く持っていくこと。
雨具(カッパ)	1	雨が降っても行動できる。
洗面用具	1	お風呂時。
寝袋	1	寝る時の必需品。なければ毛布貸与。
水筒(ペットボトル)	1本	現地で支給。
常備薬	適量	心当たりのある人は、持っていこう。
懐中電灯	1	
ウエットティッシュ	1～2	何かと便利。除菌付きがベスト。
筆記用具、ノート	1	メモを取るときに。
マイ箸・マイコップ	1	
嗜好品	適量	飴、カロリーメイトなど各自判断。
腕時計	1	時間厳守。
バス内昼食	1	4月4日バス内食持参。
雑巾	2	必ず持って来て下さい。
トイレットペーパー	1	
あると便利		
布ガムテープ	1	何かと便利。
新聞紙	1部	
ビニール袋	3～5	
デジタルカメラ	1	
サンダル	1	
電池式携帯充電器	1	

表2　全体装備一覧

≪活動備品≫	数量	≪生活備品≫	数量
ねこ	6	テント	15
角スコ	15	集会用大型テント	2
丸スコ	5	寝袋	70
デッキブラシ	10	テントマット	15
水切り	10	発電機	1
砂袋	200 × 4	長椅子	15
ちりとり	12	アルミテーブル	12
バール	5	プロパンガス	6kg × 2
ヘルメット		大鍋	2
		コンロヘッド	3
		ランタン	15
		延長コード	2
		ザイル・ペグ	

表3. 第1クール（3泊4日）の食事メニュー

	1日目	2日目	3日目	4日目
朝	×	各自準備したもの	雑炊	チキンラーメン
昼	各自準備したもの（バス内）	サンドイッチ（食パン3枚）	サンドイッチ（食パン3枚）	カロリーメイトなど
夜	各自準備したもの	白米 おかず（キムチ、梅干しなど）	うどん、缶詰	×

応し、必要なカロリー量と最低限の栄養バランスを考慮してメニュー設定を行った。2日夜に大鍋2つで約60合を炊飯し、キムチ、漬物、梅干し、魚のつくだ煮、ふりかけをおかずとした。大鍋に残った白米は、3日目の朝に鍋に水を加えて雑炊とし、さらに鍋肌に残った雑炊の残りに水を加え3日目夜のうどんスープに利用し、うどんスープの残りは、4日目の朝のチキンラーメンの加水となるように、残飯を一切出ず、鍋を洗わないで済むようなメニューで展開した。鍋や食器類は、調理又は食後トイレットペーパーでふき取り、弱酸性次亜塩素酸ナトリウムを使って最終処理をした。昼食は、活動現場で短時間で食べられるように、朝食終了後、各自、食パンにジャムやマーガリンなどを塗って、アルミホイルに包み、ビニールに入れてお弁当として持参させた。食材の保存は、3日目に使用する冷凍うどんを保冷材代わりとして、冷蔵の必要な漬け物や残り食材は冷凍うどんと一緒にクーラーボックスにて衛生面に注意しながら保存した。

表 4. 30人分の食材リスト

		個数	数量
食パン	6枚切	15	90枚
イチゴジャム	紙のパックが良い	20	20個
ブルーベリー	紙のパックが良い	20	20個
チューブバター		20	20個
米(無洗米)	10 kg	3	30 kg
冷凍うどん			30玉
チキンラーメン			30個
キムチ	大		5パック
ふりかけ			5種類
味噌汁パックミックス	小分け		30食
佃煮(小魚等)			5種類
漬物(ビタミン豊富なもの)			5パック
梅干し	はちみつ		3パック
乾燥ねぎ			2パック
みそ			
しょうゆ			
ほんだし			
カレーパウダー			
乾燥わかめ			

5. ベースキャンプの設置と活動内容

国士舘大学被災者支援学生ボランティアのベースキャンプは、石巻専修大学内グラウンドに設置されたボランティア受入キャンプ地内(図4)の一角に設置した。大型の集会用テントを風上にして、風下側に13張りの5〜6人用のドームテントを囲うように設置した。北上川近くに位置していたこともあり、強烈な風が吹き、多くのテントのポールが折れ、後発グループが新しいポールを持ってくる間は、ガムテープで補修したりして対応した。また、期間中雪が降るなど気温が低い日も多く、1人2個づつ準備した寝袋を使用しても、寒くて眠れない学生もいた。

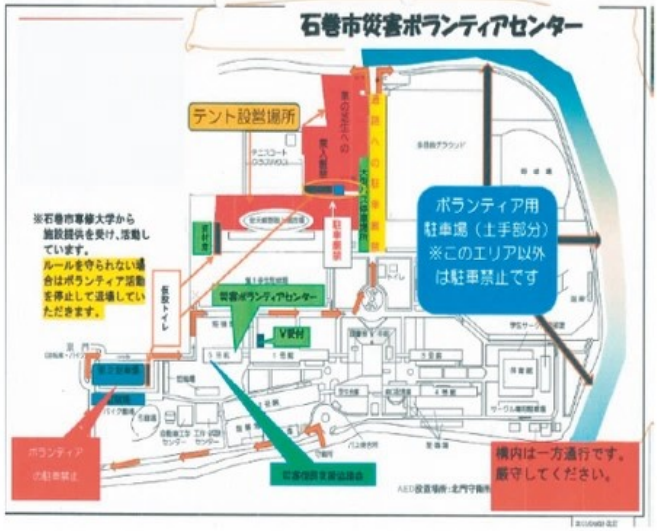


図 4. 石巻専修大学ボランティアセンターとキャンプ地

写真 1. 国士舘大学ボランティアベースキャンプ

食事や、食後毎日開かれるミーティングは大型の集会用テントの中を利用した(写真2)。ミーティングの内容は、石巻専修大学内の教室に設置された石巻災害復興支援協議会の全体会(自治体・社会福祉協議会・主力団体の代表者らの会議)で調整された、翌日の災害復興支援計画に基づき、国士舘大学チームに割り当てられた作業内容について詳細を確認することであ

った。代表者会議は石巻専修大学グラウンドでボランティア活動をしている全団体（300 団体を超える）の中から、継続し、大人数で組織された団体代表者数名に限り出席することが可能で、国士舘大学は全大会に継続して参加することとなった。全大会には、全日程参加する大学院生 2 名が出席し、期間中、毎日、会議に出席して作業内容の確認と調整を行った。

国士舘大学チームは、体育学部学生がメンバーであることから、代表者会議において、がれき撤去・泥だし作業グループ（通称マッドバスターズ：図 5）のスペシャルチームと称され期待されていた。多くの重機やダンプを所有する日本財団と、数百名のボランティアを組織しているピースボートらと連携してがれき撤去・泥だし作業が進められた（写真 3）。重機により自動車や冷蔵庫などの大型のがれきをダンプに詰め込み撤去した後、ゴミ収集車（パッカー車）に津波で流れてきたがれきを手作業で詰め込む作業。その後、堆積した泥をスコップ等で土嚢に詰め込みトラックに乗せる作業が国士舘大学チームの主な活動となった。シャベルカーやクレーン車、ダンプ車との連携が必要であり、また、重油等が染みこんだ比重の重い泥を手作業で運ぶ体力的に厳しい作業であった。大学院生 2 名がそれぞれ 1 隊を編成し、5～6 人の班を 3 グループ統率し、隊長、班長からの指示系統で作業にあたった。

写真 2. ミーティングの様子

図 5. 石巻災害復興支援協議会の作業分担

写真 3. マッドバスターズ作業終了後の片付け

写真 4. 作業終了後の学生ボランティア達
（石巻専修大学ボランティアベースキャンプ地にて）

Ⅳ. 東日本大震災での学生ボランティアの役割と活動

３．21 日間にわたる被災地での人的支援活動

国士舘大学スポーツ・システム研究科　修士課程１年

浅倉　大地

1. はじめに

今回の東日本大震災にあたって、国士舘大学体育学部は人的支援としてボランティアを希望する学生を被災地である石巻市に派遣した。期間は4月4日から4月24日の21日間で、私は院生として学生のボランティア活動をコーディネートする立場で、21日間の全日程、石巻に滞在し活動を行った。学生は3泊4日の日程で順次交代し、第1陣から第6陣まで活動を行った。第1陣から第6陣までの参加者の延べ人数は202名であった。（表1）本報告書では石巻市での人的支援の活動報告を行う。

表1：石巻市への派遣人数

	体育学部学生	大学院生	教職員	参加者数
第1陣	17	2	1	20
第2陣	18	2	1	21
第3陣	31	2	2	35
第4陣	33	2	3	38
第5陣	41	2	2	45
第6陣	39	2	2	43
合計	179	12	11	202

2. 活動内容

1）第1陣

最初の陣では初めて災害ボランティアをする学生がほとんどであった。そこで災害支援活動などで豊富な経験を持つIVUSA（国際ボランティア学生協会）と一緒に活動を行い、作業の進め方などを詳しく教わった。活動内容は北上川沿いの河北地区での民家の片付けのお手伝いが主であった。

津波が来た事によって民家の床下には大量のヘドロが堆積していた。このヘドロを放置しているとカビ、害虫の発生、シロアリの被害の可能性がある。その為、床板をはがし、ヘドロを取り除き、消石灰で消毒を行う必要があった。

また、水浸しになってしまった畳、ヘドロや水をかぶってしまった家具など持ち主がもう使わないと判断したもの、どこから流れてきたのか分からないが家の中にあるものを家から運び出し、収集しやすいように道路の脇に出した。

学生は実際に津波の被害にあった家で、被災者の方と接し、津波の爪痕や、発災直後の話を聞くことで、一層気を引き締めて作業にあたり、また被災者の方に少しでも元気になってもらおうと笑顔で明るく接していた。

写真1：床板をはがして泥だし

写真2：民家の片付けに向かう学生

2）第2陣～第4陣

立町地区での商店街の道路に流れてきた瓦礫の片付け、たまったヘドロの片付けを行った。立町地区とは石巻駅の目の前の商店街が多い地区であり、早期復興すれば、石巻の復興のシンボルとなり得る地域であった。そのため、早急に瓦礫で塞がれた道路を開通させ、片付けを行う必要があった。

そこで、石巻災害復興支援協議会が主導となり「まちなかスマイルプロジェクト」と題して、立町地区など中心部の一斉清掃活動を行った。このプロジェクトには個人ボランティア、NPO/NGO、市民の方など総勢1000名もの人が参加し、一斉に活動を行った。国士舘大学もこれに参加し、他の地域から来ていた重機が扱えるボランティアと協力して立町地区の清掃を行った。

活動場所は、津波が堤防を超えた北上川からわずか400～500m程度しか離れておらず、道路では車が逆さまになり、信号機や家財道具など様々な瓦礫があり、ヘドロも大量に堆積していたため、片付けが思う様に進まず、作業は困難を極めた。

しかし、一つ一つの瓦礫をこつこつと撤去し、第2陣～第4陣までの約2週間続けて同じ場所で活動を行い、無事に道路を開通させるまでにいたった。この2

週間で片付けたヘドロは50ｔ近いものであった。

学生たちは商店街という生活エリアに自分たちの背丈程の津波がやってきた事を受け、言葉を失っていたが、実際に被災者の方と接し、話を聞く事で、自分たちが頑張る事で少しでも何かの役に立ちたいと、作業を黙々と力強く行っていた。

写真３：立町地区の活動前

また、道路で作業をしていると、近辺のお店や民家の方からの清掃依頼も多く寄せられ、そちらでの片付けのお手伝いも並行して行った。

写真４：立町地区の活動後

写真５：学生が１日で片付けたヘドロ（土嚢）

3）第５陣

中浦地区にあるお寺の泥だし、汚れてしまった仏具の洗い、墓地の清掃が主な作業であった。石巻港からわずか500mの場所にあり、お寺の本堂の床下のヘドロの量は5cmを超えていた。学生たちは本堂の下の狭く暗い床下に潜り込み、作業服を真っ黒に汚しながらヘドロをかいていた。

仏具の洗いは、細かい汚れも残さない様に歯ブラシを使って、一つ一つの仏具を大切に丁寧に洗っている姿が見られた。

墓地は津波によって墓石のほとんどが倒れてしまっている状況であった。１つ１つの墓石の重さは50kgをこえており、学生の力を持ってしても持ち上げる事は難しかったので、戻せるものは戻し、重くて戻せないものは墓石を持ち上げられる重機が墓地の中まで入れるように墓地内の道のヘドロをきれいに除去した。

写真６：お墓の清掃を行う学生

4）第６陣

渡波地区での側道の開通が主な作業であった。渡波地区は津波によって壊滅的な被害を受けた地区であり作業現場は海から500m程度離れたところで、未だに海水によって冠水している場所であった。この地区の海沿いには、水産加工業の工場が多くあり、津波によってその工場から流れたイカ、魚の開きなどの水産加工物が、民家に散乱し、悲惨な現状であった。

なおかつ、測道で道が細く、重機が奥まで入れないため全て手作業での片付けとなった。

しかし、その様な環境でも日々暮らしている被災者の方もおり、学生たちも困難な状況に負けず、石巻市のボランティアセンターから支援物資として頂いたガスマスクをつける、マスクを２重、３重にするなどの工夫をして、作業にあたっていた。

写真７：ガスマスクをつけ作業をする学生

3. 生活状況

1）宿泊環境

ベースキャンプは、石巻の中心部に車で15分～20分程度の場所にある石巻専修大学構内のグラウンドに設置されたボランティア受入キャンプ地内の一角に設置した。テントは4～5人で1針とし、毛布や寝袋は支給した。宿泊用テントの他に、本部用として大型の集会用テントをたて、全員での食事やミーティングの場とした。

1ヶ月の滞在の間に天候も様々に変化し、時には風が強く吹き、テントをたてていられない状況もあり、女子は本部テントで、男子は潰れたテントの中で一晩を過ごす事もあった。また、夜の間にかなりの雪が降り、雪の重みでテントが潰れてしまう事もあった。

天候による困難な状況はこの1ヶ月で幾度となくあったが、学生たちは被災者も同じ状況におかれている事を考えれば自分たちはまだまだ大丈夫と耐えていた。

テントサイトの周辺にも同じ様なボランティアがたくさん来ており、週末などの人数が多い時では500人程度の人がテントサイトで宿泊をしていた。

トイレはボランティアで共有の仮設トイレがあったが、シャワーやお風呂はなく、電気、ガス、水道などのライフラインも断たれており、普段の生活と比べれば過酷な環境であった。

同じ大学構内には被災された方への避難所もあり、実際の避難者の姿を確認する事もできた。

写真７：宿泊テント

写真８：大型テント内でのミーティングの様子

2）タイムスケジュール

石巻では朝から日没まで作業を行った。朝は朝食を食べるとすぐに、車で作業現場に向かい、お昼の12時まで作業を行った。昼御飯を食べて少し休憩をしたあとは、また日没まで作業を行った。

年齢も若く、体育を学んでいるものとして、どこの団体よりも早く現場に入り、最後まで現場に残り活動をする事を目標にしていた。さらに体力を活かして午前、午後ともに決まった大きな休憩をほとんど取らずに活動を行い、給水などの小休憩は各自の判断で行わせた。その心構え、やり方の成果か、「必ずいる。」「最後までやる。」「仕事を選ばない。」「作業が速い。」と被災地の方や、ボランティア内での国士舘大学の評判はとてもよかった。

暗くなりテントサイトに帰っても電気がないので、懐中電灯やランタンの明るさで食事を取り、翌日の昼食のサンドイッチを作った。その後、翌日の活動場所、注意点などをミーティングで伝え、２１時には就寝していた。作業に全力で集中して臨めるように、ボランティアに関する事以外は一切行わなかった。

表2：1日のタイムスケジュール

7時00分	起床＆朝食
8時15分	キャンプ地出発
9時00分	午前作業開始
12時00分	昼休憩
13時00分	午後作業開始
16時00分	作業終了
17時30分	夕食
21時00分	就寝

4. 安全管理

1）連絡体制

活動時期が4月とまだまだ余震が続いていた時期であったために学生の安全管理にはとても気をつかう必要があった。活動場所での活動中に大きな余震があった時の避難先、高台の場所、集合場所の確認、連絡方法など事前に地元に詳しいボランティアセンターと打ち合わせを行い、その情報を学生にも活動前に伝達した。また、いくつかのグループに分かれて活動を行う時は、各グループのリーダー、引率の教職員、院生にトランシーバーを携帯させ、有事の際にいつでも連絡がとれる体制をとっていた。

4月7日の23時32分に起こった地震では石巻市でも震度6強を観測し津波警報が発令された。ちょうどテントで就寝間際であったが、地震の発生とともに本部テントに集合し、津波警報の発令により全員で石巻専修大学の校舎の階段を登り高台に避難した。幸いにも、津波は来なかったが、東京で感じる揺れと違いと下から突き上げられる様な衝撃があり、すぐに地震とわかるものであった。

2）服装

被災地での活動時の服装は、瓦礫による怪我を防ぐために長袖、長ズボン、ゴム手袋、釘などの踏みぬきを防ぎ、冠水したエリアでの活動にも対応できるように長靴（安全靴）、防塵、防臭の為のマスクは確実に着用させ、屋内での活動時は頭部を守る為にヘルメットを着用させ、ゴーグルも希望者にはつけさせた。

Ⅳ. 東日本大震災での学生ボランティアの役割と活動

４．スムーズな活動を行うための過程

国士舘大学スポーツ・システム研究科　修士課程１年

山崎　源太

1.石巻災害復興支援協議会について

市民が復興のために立ち上げた組織で、石巻市を拠点として女川市や東松島市など全国の災害復興支援に関わる NPO、NGO および特別なスキルを持つ個人の方々が連携し合い、円滑で効率的な活動を行うための場を提供する団体。

現在(2012 年 1 月)330 団体の登録があり、12 の分科会に分かれて活動をしている。

現在、下記のスキームにあるように「移送」・「仮設サロン」・「キッズ」・「心のケア」・「生活支援」・「復興マインド」・「マッドバスターズ（泥清掃）」・「メディカル」・「リラクゼーション」・「浜支援」・「炊き出し」・「ダニバスターズ（避難所衛生改善）」、団体の枠を越えて協働していた。しかし、「炊き出し」と「ダニバスターズ」の分科会に関しては状況の変化により終了。

新潟や長野の豪雨による災害にも協力を行い、ボランティア、機材、資材を現地へ提供する活動も行い、日本全国の災害に支援を続けている。

2.石巻市災害ボランティアセンター

石巻市災害ボランティアセンターでは石巻市民からのニーズを元に個人ボランティアとのマッチングを行っている。個人ボランティアの登録やボランティア保険などの手続きを行い、ニーズの内容から合った人々を現地へ派遣する活動を行っていた。しかし、大きな団体が活動する場合は石巻災害復興支援協議会に登録し、活動目的を同じくする団体と分科会にて情報共有や調整を実施しながら活動した。また、避難所の訪問や仮設住宅への訪問を行い、ニーズを集めている。

3.登録ボランティア団体

大きな団体としては、日本財団、AP バンク、ピースボート、今回の震災で結成されため組 JAPAN など大きな団体も活動した。その他にも全国の大学や企業なども参加し、それぞれができる最大の力を出し合いながら支援を行った。

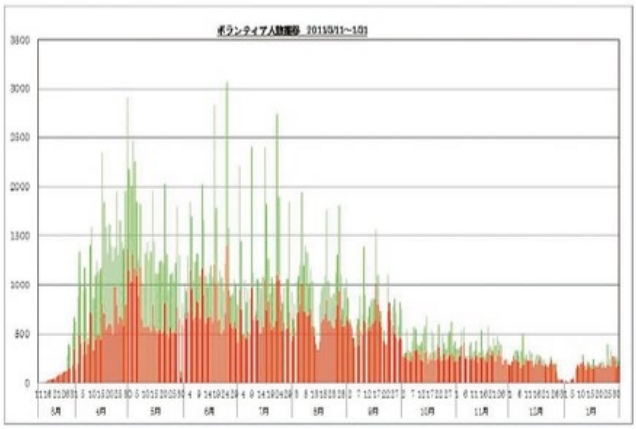


図 1.ボランティア数

全体会での報告会で報告されていない団体の人数は含まれていないが、報告されている人数を算出している。

4.全体会

夜 7 時より各団体の代表者が集まり、活動の報告と活動予定を報告した。各団体がその日行った活動を報告し、ニーズを集めながら、他の団体と協力ができるように全体会は進められた。町の大きなクリーンイベントも行い、全ての団体で集中的に活動を行うこともあり、一つの大きな団体として活動をした。また、共通の情報を共有するとともに、地域の人々に必要な情報を伝えるための連絡手段ともなっていた。

この会議は、画期的なシステムとなっており、石巻スキームと呼ばれた。メディアに対しても積極的に行っている活動をアピールした。

＜石巻　災害復興支援　関連団体＞（2011 年 12 月 16 日改定）

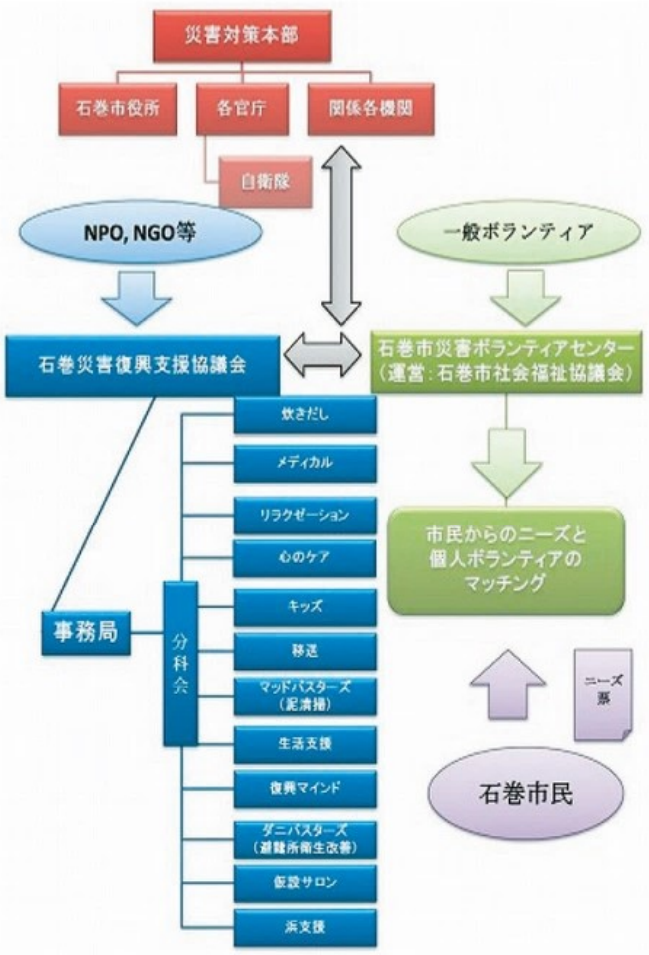


図 2.石巻スキーム

ここの会議では、ボランティアの人々の活動を行う場所によって必要な物資の提供もした。悪臭のする地域においては、マスクの提供。思い側溝を運ぶ道具。掃除に必要な高圧洗浄機などの提供も行っていた。

石巻市民の方々の参加もあり、多くの情報をここでは収集することができた。

写真 1.全体会の様子

震災後石巻専修大学が提供して頂いたホールで行っている全体会の様子。余震により天井が崩れてしまったために、使用ができなくなってしまったが、300 名くらいのボランティアが集まって行う会議であった。

写真 2.全体会の様子

石巻専修大学内の教室を提供していただき、石巻災害復興支援協議会の本部が設置された。部屋のスペースに限りがあるため、各団体の代表者 1～2 名の参加に限定された。

写真 3.暴風によるテントサイトの状況

雪や風などの時にもスタッフの方が見周りをしてくれていた。大学とのやり取りも行い、このような場合には、大学の施設を開放して頂き、ボランティアは非難を行った。

5.分科会

セクッションごとに次の日の活動について詳しく話を詰めて、活動をスムーズに展開するための話し合や、また、石巻災害ボランティアセ

ンターからの要請もここで調整を行った。特にマッドバスターズにおいては現地からのニーズも高く、ボランティア数が多く必要であり、全体の 7～8 割の団体がこのグループに参加していた。特に個人ボランティアの方は原則、全員ここのセクションに所属していた。

全体会の情報を踏まえて、分科会では大きな団体の代表が集まり、現場での指揮をとるグループが参加していた。その中で、どこの地域にどの団体が活動していて、明日の活動で重機や人手が何名必要だから、重機を持っている団体と人手の出せる団体と一緒に明日は活動を行えるように調整が進められた。足りない備品の提供もあり、トラックの貸し出しもここで行った。

この分科会に参加している団体は、自己完結ができることが前提となっている。また、分科会終了後には、一緒に活動する団体との詳細な活動内容の調整を行い、次の日の活動に備えるようになる。

分科会終了後には、講習会も行われることもあり、側溝の開け方や、重機の使用の仕方、マスクの使用の仕方など、その時に必要な技術の講習を団体が集まって行っていた。

写真 4.分科会の様子

活動報告と次の日の予定をまとめている様子。ここでの話し合いでまとめた紙を石巻災害復興支援協議会に提出し、次の日の全体会の報告時に使用した。

写真 5.講習会の様子

会長と日本財団による側溝のふた開けと道具の使用方法を説明している様子。側溝掃除に関わる団体は参加し、講習を受けて、活動を行っている。側溝は重いため、手運びをして骨折をしてしまったという件もあり、事故をこれ以上増やさないためにもこのような講習は重要であった。

写真 6.自衛隊の敷地内

自衛隊では、物資の提供を行っており、被災者へ届けられない部分をボランティアがサポートしている。また、作業するにあたって必要な道具の提供やガソリンの提供なども行っている。

写真 7.日本財団の水洗い場

水道が通っていない時期に日本財団が川の水を浄化して、家庭用の水として使える機械を一般の人々に開放した。また、ボランティアの道具の洗い場としても使用させていただいた。

6.活動

活動は、話し合いで決めた集合場所に、集合し、他の団体と共同で活動を行った。特に街の一斉清掃の時などの時には、人手や重機と上手く連携をとる必要がある。活動の合間に話をして、どの場所から清掃していくかなどを状況に応じて対応していく。また、トランシーバーなどでもやり取りを行い、スムーズに活動を行えるようにしている。また、途中で他の場所に応援なども行い、マッドバスターズ全体で活動を行える体制にもなっていた。

7.国士舘大学の学生ボランティアの体制

学生ボランティアには、6 名くらいのグループを編成し、各グループにリーダーを立て、トランシーバーでやり取りを行いながら、活動を行った。各リーダーの上には、大学院生や教員が付き、活動に人手が必要ならば、そこで調整を行っていた。さらに、他の団体とのやり取りも大学院生を通じて行いながら、個人ボランティアや団体の方をグループに混ぜるなど現場で判断することも多くあったが、国士舘大学の学生のパワーと元気で街の人々に元気を分け、ボランティアの人達を引っ張っていけたと考えている。

国士舘大学の学生ボランティアの全体会や分科会で、日頃の活動において大変よく働いていることから、高評価を受けた。そのことから、全体会や分科会では、国士舘大学の存在は、次第に主要な団体と同じような立場になり、仕事も国士舘大学が総仕切りをとるなど、多くの団体を引きいれ、全体で 400 名くらいの団体として活動を行う事もあった。また、重機班にも指示を出し、現場がスムーズに進む様な流れを作ることもできた。トラックなども借りたりすることもできるようになり、国士舘大学として他の団体との信頼が強く作り上げられ、最終的には、2 か所で総指揮をとり活動を進めていくなど、20 日間最前線で活躍をすることができた。

8.まとめ

今回のボランティア活動を通じて、ボランティア、市民、ボランティアセンターの 3 つが上手く連携を取れていたために、活動がとてもスムーズで、様々な地域への支援を行うことが出来た。今までの震災でのボランティア活動は、各ボランティアがバラバラに動いており、まとまりがなく、スムーズに活動が進行されていなかったという。石巻においては、ボランティアに対するサポート体制もしっかりと行われており、活動も明確で、参加しているボランティア団体が一つの大きな組織として活動している。また、地方の行政と企業とのやり取りも行っており、ボランティアが手をつけて良い場所や活動を行ってはいけない場所の調整なども行っている。

今後東京で震災が起こったときには、国士舘大学として、施設の開放や地域の人、ボランティアセンター、ボランティアとの連携を調整する役割を果たし、学生ボランティアは、その最前線でボランティアを引っ張り、地域の人々に元気を分けていく活動を目指していく必要がある。

参考資料

石巻災害復興支援協議会
http://gambappe.ecom-plat.jp/
2012 年 2 月 10 日現在

Ⅳ. 東日本大震災での学生ボランティアの役割と活動

５．学生ボランティアを経験して

国士舘大学体育学部スポーツ医科学科　４年

下田　和輝

東日本大震災が発生してから、テレビで毎日流れるひどい環境の報道をみて、私にも何かできないかと思った。まず、自分と同じ思いの人達を集めていつでも被災地に行きボランティアを行えるように準備しようと思っていたところ、田中先生、中山先生のご指導により国士舘大学として活動ができるようになり、最終的には体育学部全体で活動を行うことができるようになった。

そして、参加したいという学生が 250 名にのぼり、実際に 203 名の学生が被災地に行きボランティア活動を行った。

図１：宮城県石巻市

今回の国士舘大学の活動は宮城県石巻市、南三陸町中心に、学生は４月４日から５月８日まで活動した。

今回、学生は参加するにあたって２つの目標、目的をもって活動にあたった。

１．津波の被害があった家や建物に行き、ヘドロ、ガレキの移動除去を行い、人手不足を解消する
２．被災地の方とのコミュニケーションを大切にし、震災の大きさを肌で感じ学ぶこと

学生として出来ることは何かと常に考え、行動、活動することを胸に刻み被災地に向かった。

被災地に、バスで 6～8 時間かけて向かった。バスの中では特に景色に被災した光景はあまり見られなかった。しかし、石巻市に入ってから状況が変わった。バスに乗っていて臭いがひどくなってきた。また、周りの光景もガレキや車が散乱していて衝撃を受けた。

ボランティアの集合地点である、石巻専修大学に到着した。バスから降りるとヘドロの臭いで鼻がもげそうだった。それだけでなく、ガレキ等の微粒子が飛んでおりマスクをしていないと咳こんでしまう状態だった。

写真１：石巻市市内の状況

上記の写真は石巻市内の写真、海側に行くにつれて状況はどんどん悲惨になっていった。初日は、石巻専修大学でテントを張ったり、食事の準備などをして初日が終わった。

ボランティア活動は 2 日目から行った。国士舘大学は様々な場所で活動を行った。

【活動内容】
・小学校
・中学校
・商店街
・公民館
・消防団施設
・お寺、お墓
・道路
・個人宅

石巻市メンバー一日の流れ

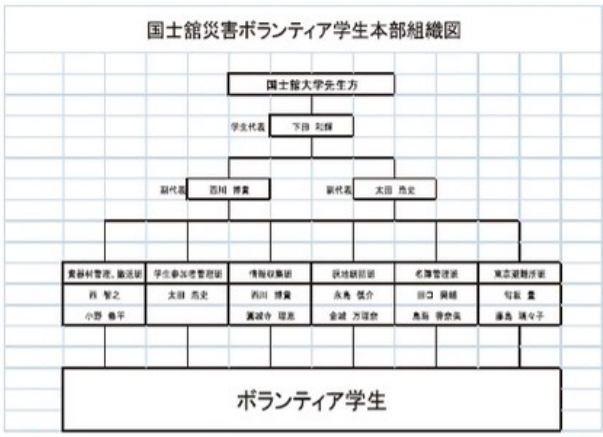
	Aメンバー	Bメンバー
6時	起床	
6時15分	朝食準備	
6時45分		起床
7時		ゴミ拾い
7時30分	朝食	朝食
8時	片付け	片付け
8時15分	出発準備	出発準備
8時45分	出発	出発
10時	作業	作業
	ヘドロ、家材運び出し等	ヘドロ、家財運び出し等
12時	昼食	昼食
13時00分	作業	作業
	ヘドロ、家材運び出し等	ヘドロ、家材運び出し等
15時	作業終了	作業終了
15時30分	撤収	撤収
16時30分	夕食準備	夕食準備
17時半		本部に活動終了連絡
18時	夕食	夕食
19時	ボランティア会議	ボランティア会議
21時30分	国士舘会議、連絡	国士舘会議、連絡
22時	就寝	就寝

上記にあるのは一日の流れである。Aチーム、Bチームに分けて役割を決めて行った。石巻専修大学には国士舘大学以外にもボランティアが400人以上おり、数多くのテントがあった。そのため、ボランティアのなかでもルールが出来ており、毎日ボランティアが集まって活動報告や次の活動場所を確認しあう会議が行われた。
基本的にボランティアの活動時間は、朝の9時～16時までと決まっており毎日、ガレキの除去、家具や畳等の運び出し、仏具の洗浄、給水所の設置などを行った。

写真2：活動風景

私たちは、被災地で上記のことを体験し、環境や臭いなど、最悪と言っていいほどの環境だった。しかし、被災者の方は震災に臆することなく、復興に向けて頑張ろうとしている姿をみて私たち学生も頑張ろうと思った。

最後に、被災地で円滑に活動でき、また後方支援できるように大学内に学生本部を作り活動を行った。今後もこの学生ボランティア組織を経由して被災地への支援をつづけていく予定である。



Ⅳ. 東日本大震災での学生ボランティアの役割と活動

６．学生災害ボランティア活動報告

国士舘大学体育学部スポーツ医科学科　３年

太田　浩史

3月11日、東日本大震災が起こり、テレビに映るＳＦ映画のように押し寄せる津波、押し流されていく、家屋、車、人、現実で起きていることなのかを錯覚する様な光景であった。今でも鮮明に覚えている。その光景を目にした私は、強く心揺さぶられ、「何かしたい、何か出来る事をしなければならない。」と強く思った。そして、学生を集い、教授の先生方に「被災地へ行きボランティア活動をしたい。」と嘆願をした。先生方には、強いご理解を頂き、すぐに学生ボランティア本部を設立出来ることとなった。そこで、宮城県志津川・石巻からのボランティア要請があった。私は、学生本部・志津川ベイサイドアリーナでの活動について報告を致します。

表１　被災地で活動をした学生数

出発隊別	石巻	志津川
第一陣	22名	3名
第二陣	25名	3名
第三陣	34名	5名
第四陣	36名	7名
第五陣	43名	5名
第六陣	43名	5名
学科別	石巻	志津川
スポーツ医科学科	164名	28名
体育学科	23名	0名
こどもスポーツ教育学科	16名	0名
学生総数	学生203名	学生28名

志津川は、2010年人口17,431人、太平洋に面した、リアス式海岸における狭い市街地湾から一体となった地形港として、古くからの活用沿岸漁業や養殖などの漁業岸が有名である。一年を通して海産物に恵まれた土地であった。

私たちは、志津川のベイサイドアリーナという避難所に行き、活動を行った。志津川には、第一陣で4月4日から3名の学生が現地入りし、その後も、第六陣まで28名の学生が現地での活動を行った。活動期間は、4月3日～4月24日までの21日間であった。

私は、いち早く被災地に行き、活動をしたいという気持ちを抑え、学生本部での後方支援活動を約一ヵ月行った。その内容は、実に多岐にわたり、この時の経験は、人生に一度のとても恵まれた経験だったと今改めて思う。その内容は、被災地で活動中の学生及び、これから活動を行う学生のために被災地の状況把握をし、情報統制を行うことであった。このことでこれから被災地に向かう学生は自分で必要なものを考え荷物と気持ちの準備ができる。またその他には、被災地からのニーズを聞き、ボランティア数・物資をそのニーズに合わせて調整・調達を行うものであった。人数調整では、避難所のテント数、東京から持ち込む食糧などを計算し、なんとかニーズに合う人員調整を行った。次に学生本部での活動で、一番重要かつ、大変だったのが、物資のニーズに応えることであった。その内容は、被災地の医師からメールでニーズを聞き、それに応えるため関連企業に直接電話をしてお願いをするというものであった。これは、震災を引用して行われる詐欺などとはっきりと区別して、信用してもらう必要があった。そのために、ホームページを開設、また、お願いの内容を記載した文章を作成、送信ということを迅速に行い、いち早くご協力を得て、郵送をするということが何よりも重要であった。被災地では、震災の影響で身体的にも精神的にも荒んだ被災者で溢れている。この状況に一つでも多く、1日でも早くニーズに答えることで被災者が救われる。このことをご理解して頂いた企業からご支援を頂いた。それは、避難所へのマットレスや空気浄化のためのプラズマクラスター、ダニや蚊などの防虫剤などのご協力であった。心身込めて伝えれば伝わると改めて感じると同時に、日本が団結して復興しようする一体感を感じた。そのことをより強く実感する機会となったのが、街頭での募金活動であった。銀座すずらん通りのすずらん祭り・多摩センター駅で行われた、こども祭りで私達は、街頭募金活動を行った。多くの方が私たちの活動に賛同をして頂き、多くの募金をして下さった。そ

の善意に何度も助けられ、被災地への活動をここまで多岐に渡り、続けることができた。震災から一年経過、今後も引き続き後方支援活動を行っていく予定である。

本部での活動を1ヶ月行った後、初めて被災地に入ったのは、石巻・南三陸であった。早い時期から何度もボランティアに参加した学生からすれば、ある程度、復旧した後と思うだろうが、しかし、月日が経過しても被災地には、ただ、悲惨な現実が広がっていた。町もない、家もない、ぐちゃぐちゃに壊れた車。建物があったであろう場所には、瓦礫の山があるだけ。まだ、この瓦礫の下に多くの人が埋まっているのかと思うと、何とも言えない気持ちでいっぱいになった。ただただ、無残。こんな現実が目下に広がった瞬間、私には堪えきれない気持ちが込み上げた。しかし、避難所であるベイサイドアリーナに着いてみると、被災者の方々は落ち着いて生活をしており、多くの笑顔も見られた。私が到着する前に電気・水道も復旧したそうで一見、不自由のない生活をしていた。私が到着した時にはそんな印象を持った。

ベイサイドアリーナの外観はとてもキレイで、外観に破損はほとんどなく、多くの被災者がここで寝泊まりをし、各家族がダンボールで区画して、生活をしていた。震災当時は、最大で約1500人もの人が避難してきていた。

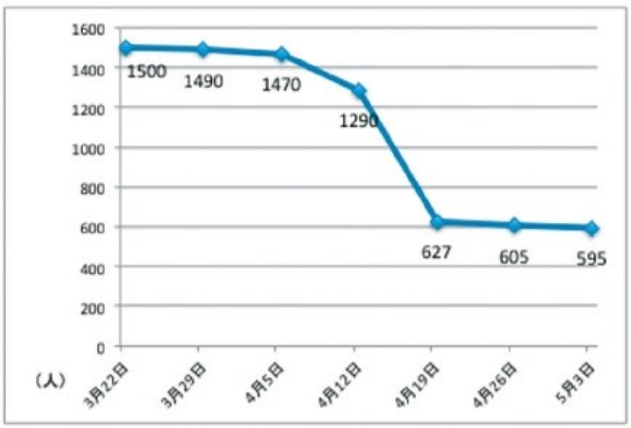


図1ﾍﾞｲｻｲﾄﾞｱﾘｰﾅ避難者1週間ごとの推移

避難者1週間ごとの変化をみると、日に日に避難者は減り、自立に向け動き出している人、やむなく、故郷を去る人、その後は一人ひとり大きく違う。

表2ベイサイドアリーナ生活日程

6:00	起床
6:15	朝食
7:00	メディカルミーティング準備
7:30	医療テントにてミーティング
8:30	医療物資の管理及び一般ボランティア
12:30	交代で昼食
13:00	医療物資の管理及び一般ボランティア
16:30	物品倉内データ入力
17:00	業務終了　倉庫施錠
17:30	テントにて夕食（炊き出しの残り）
18:00	自衛隊風呂へ入浴
19:00	活動報告・計画
22:00	就寝

ベイサイドアリーナでは、表2のような日程で生活をした。私たち学生の支援内容は、主に医療資器材倉庫の管理であった。院生から動きについての引き継ぎをして頂き、館内の見取り図や、一日の活動の仕方、重要連絡事項など、学生同士が引き継ぎをできない中で、現状把握をするため必死に頭に叩き込んだ。東京を朝出発し、夕方に現地入りした学生は、初日この説明を受け、明日からの活動に備えた。次の日から、医療資器材の場所や個数の管理をし、各医療団体が足りなくなった物資を補充しやすくするため、倉庫内の整理や、足りない物資の注文などを行った。第一陣で現地入りした学生たちは電気が点灯しない、真っ暗な状況での活動となり、懐中電灯やランプを手がかりに行った。しかし、第四陣からは電気も復旧し、物品整理や個数の確認などもより正確に行うことが可能となった。

また、物品倉庫の管理と並行して、ボランティアセンターでの登録をし、一般ボランティア活動も行った。テントの中で写真についた泥や汚れを丁寧に落としていく作業や炊き出し、ノロウィルス蔓延のため手洗い場の作成、棚作りなど多くの活動を行った。写真の泥落しでは、

被災者のことを思い、一枚一枚、少しでもキレイに思い出を残せるよう努力した。炊き出しでは、毎日行われる避難所でのお手伝いとして、昼食や夕食の準備をお手伝いした。食事の内容はカレー、ラーメンなど、バリエーションには富んでいた。しかし、震災から２ヶ月以上が経つと、食生活の偏りから体調不良となる方も増えたと聞いている。被災地では、仕方のないことかもしれないが、この点に関して私は、早い段階から栄養士の方と連携して、なるべくバランスに富んだ食生活に努めるのも急性期を越えた被災地には重要だと強く思った。その他にも、被災地では集団生活の中で衛生面での不安を抱えていた。それは、ノロウィルス蔓延というかたちで猛威をふるった。これに対応するため、消毒・手洗いなどを徹底すべく、トイレに手洗い場を作成した。この効果は劇的でノロウィルスは大流行する前に食い止めることができた。

またこのことは、被災者の生活レベルを向上することへもつながった。更には、歌津地区の避難所となっている中学校へ行き、平面の段ボールを試行錯誤して組み立て、棚を作成した。 避難所に届いた本を並べたり、各家庭に配り衣服を収納して頂いたりと好評を頂いた。その理由には、もちろん棚の利便性もあるが、避難所リーダーの方にお願いをし、一つ一つの棚に利用する方の元気が出るようにと願い、コメントを

書かせて頂いたからであった。このように被災地で国士舘大学が行った、毎日の小さなことを約一か月間つなげることで、震災で傷ついた被災地に大きな復興という影響を与えることができた。

そんな実感をしていた、３日目のある日一人の被災者の方とお話しする機会があった。その方のお話しでは、「海から約２㎞離れている場所にも津波が押し寄せ、マンションの３階以上の高さまで車ごと流され、屋上に取り残された」という、辛い経験を涙ながらにお話しして頂き、被災された方々の心の奥には間違いなく大きな傷が残されていると再認識させられた。

今回の、震災で起きた津波の高さは最大で38.9m に達したと発表されている。 その津波が残した爪跡は、あまりにも大きすぎるものであった。避難所に到着する前に見た防災対策庁舎は、第一避難所に定められていた。ここには、何十人もの人が避難していた。しかし、防災対策庁舎は、最上階の３階を大きく越える津波に襲われ、鉄骨のみ残った。 後日、志津川の町長さんとお話しをする機会があり、町長さんと副町長さんはこの防災対策庁舎の３階で津波に呑まれながらも手すりにつかまり、九死に一生を得たとお伺いした。悲惨な現実に打ちひしがれていた私に町長さんは、「でも、一生を得たのだから一生懸命生きなきゃな。だから、今は復興に向けて頑張るよ。」とおっしゃっていた。私は込み上げる気持ちを抑えきれなかった。

志津川では、市役所も津波により流されてしまったため、仮設庁舎が造られている。この仮設庁舎では保健師の方と連携して各避難所の状況を把握し、巡回を行った。 また、要介護者の安否確認、現在の避難所状況をまとめた、リス

トの作成も行った。そこで上がった、仮設庁舎での問題点は、津波で職員が流されてしまった。電子機器の破損、通信回線の混乱、津波によるデータや資料の流出、移動手段が無い、職員家族の安否不明などが大きな問題として挙げられていた。私は、仮設庁舎で要介護者リスト作成を行った。自分が担当したのは、介護や生活支援を受けている方の名前、生年月日、支援階級、現在の状態、避難先をリストにすることであった。リストを作成し始めて少しすると当然のように【死亡】【行方不明】の文字が出てくる、またどのように亡くなったかまで明確に記してあり、それをただ、ただ写すだけの仕事であったが、胸がいっぱいになり、これだけたくさんの人が一回の震災で亡くなったのかと思うと、目頭が熱くなった。 また、保健師の方々も一人ひとりが家族や友人を亡くしていたり、家を流されたりと、多くの大切なモノを今回の震災で失っていた。

被災地では今でも多くの家を失った人や、家族を亡くした人たちであふれていた。しかし、いつまでも下を向いていられないと、前を向いて懸命に一日一日を生きている。そんな姿に、改めて被災地の復興を全力でお力添えしようと思えた。町長さんのおっしゃる通り、簡単にはいかないけれど、被災地は少しずつ再建を続けている。そのおかげで日に日に町は、もとの形を取り戻しつつある。今では、ホームページやニュースでしか情報を得ることはできないが、本庁舎の建設、漁業の再開、仮設住宅の増設など明るいニュースも多く聞かれるようになった。私たちは志津川でよく聞いた言葉があった。それは、「この志津川を第二の故郷と思ってほしい。」という言葉であった。この傷ついた第二の故郷のため、多くの教授の先生方や事務の方々、学生の仲間で協力をし、ここまでの支援活動ができたのは、大学という団体では、間違いなく国士舘大学だけであると、お聞きした。そのことに大きく、強く誇りを持つと同時に、これだけの経験をさせて頂いたことに深い感謝の意を示します。そして、この第二の故郷が復興した際には再びこの地を訪れ、再建した志津川を見ながら、自分のした小さなボランティアが大きな幸せに変わる時を夢見ている。

今回、東日本大震災で私たちは多くのものを失った。しかし、今回の教訓に学んだことも多くある。そして今、それは防災訓練という形で広く日本全国で行われている。今回、経験したことをこれからの人生で活かすとともに、後世に伝えていくことが重要だと感じ、これからも復興・防災に力を入れて活動をして行く。それは、今回救えなかった多くの命を救うことにつながるはずであるから。

Ⅳ．東日本大震災での学生ボランティアの役割と活動

７．［活動記録写真集］
東日本大震災発災後の
国士舘大学学生のボランティア活動

石巻専修大学内のボランティアテントサイトの
国士舘大学ボランティア本部テントでのミーティング

学生ボランティアが寝泊まりするテント

家屋のガレキの除去を行う
国士舘大学学生

石巻の商店街のヘドロの入った土嚢を
トラックに積み込んでいる様子

ヘドロの入った土嚢をリレーして
運んでいる様子

津波で使用できなくなった家電を運ぶ学生

家屋内のヘドロをトラックの荷台に
載せている学生

石巻の商店街の清掃

石巻の商店街で使用できなくなった
タタミを運んでいる様子

石巻の商店街の廃棄物を
トラックに載せ搬送

ヘドロの入った土嚢を瓦礫置き場に
降ろしている様子

がれきを収集場所に降ろす学生

ボランティア活動からテントサイトに帰ると、
強風のため、潰れてしまっていたテント

南三陸町でのボランティア活動
学生が作成した避難所用の棚

南三陸町にて学生が医療支援物資の
整理を行っている様子

赤十字奉仕団の方とともに学生が
給水装置を作製

Ｖ．ボランティア参加学生レポート

第１陣：４月４日（月）～４月８日（金）：参加学生　１８名

第２陣：４月９日（土）～４月１２日（火）：参加学生　１８名

第３陣：４月１２日（火）～４月１５日（金）：参加学生　３２名

第４陣：４月１５日（金）～４月１８日（月）：参加学生　３４名

第５陣：４月１８日（月）～４月２１日（木）：参加学生　４３名

第６陣：４月２１日（木）～４月２４日（日）：参加学生　４２名

第１陣

４月４日～８日

参加学生　１８名

下田　和輝
原　貴大
千田　晃平
金城　万里菜
村上　翔太
下山　知基
森本　純
塚本　健二
小座間　翔太
永島　慎介
直井　彩夏
大須賀　惇
斎藤　拓実
森屋　洋
佐々木　茉央
西野　華央里
友野　隆文
加藤　祐太

体育学部スポーツ医科学科　４年　森屋 洋

IVUSA との共同作業であったため、スムーズに作業に取り組むことができた。家族を失い取り残された被災者だけでは目の前の現実と向き合うことすら儘ならず、復興を成し遂げることは難しい。現地に出向いて協力して作業を行うことがとても大切だ。周りの活力が、立ち止まる被災者を後押ししているところが非常に大きいと思う。今後も人員・物資等継続的に支援を行い、全面的に心身のケアに力を入れたい。

体育学部スポーツ医科学科　４年　塚本 健二

私は第１陣で宮城県石巻に行ってきました。実際に現地に行き、テレビで流されている映像はほんの一部だと思いました。第一陣として、まず自分達がボランティアをする前に自分達の衣食住をしっかりと確保する事が重要だと思いました。自分達の生活が出来なければボランティア活動はできません。被災地では主に浸水した家の家具や崩れた壁、津波によって流された物を道路脇に移動させ、畳・床板を剥がし、床下に浸水したヘドロを掻き出しました。一軒を片付けるのに約２日掛かりました。これから復興に向けて長い月日が掛かると思いますので、これだけで終わりにするのではなくこれからも手伝いをしたいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　４年　下山 知基

実際に被災地へ入って気付いたことは、報道などで知ったよりも被害が大きいということだ。家屋内には１階の天井付近の２ｍ弱の高さまで水に浸かった跡があった。海から流れた水が町のすべてを飲み込んだため、辺りはどこから流れてきたのかも分からない瓦礫と一緒にあらゆるものがヘドロまみれになっていた。想い出の詰まったものなどもすべてである。近くにある小学校ではグランドに避難した小学生１００人以上が津波に流されまだ見つかっていないらしく、私はその話を聞いた時本当に心が痛み、言葉が出なかった。復興のためにはまだまだ長い時間がかかる。大勢の人手と物資が必要だが被災地の方々のみでは不可能であり、多くの支援が必要だと思った。支援を必要としている方々のために出来ることがあるならば、もっともっと出来る限り協力していきたいと思った。

体育学部スポーツ医科学科　４年　斎藤 拓実

今回、国士舘大学の第１陣で宮城県石巻市被災地の出発にあたり、何を持っていけばいいか分からず、被災地の方の迷惑にならないように水・食料・防寒着等を持って行き、余りは次のグループに引き継ぎました。生活面では IVUSA の団体の方々による炊き出しなどが出て、作業面ではスコップなどの道具を貸し出しして頂き、助けて頂くことが多々ありました。最終日に震度６強の地震・断水による不便さを体験して水のありがたみを理解することができてよかったです。

体育学部スポーツ医科学科　4年　西野 華央理

私たちが向かった河北地区は、避難した小学生たちがほとんど流されてしまった大川小学校の近くで、活動をした家では大川小学校で津波にあった小学生の女の子も手伝っていました。お父さんは「生き残りなんです。」と私たちに教えて下さりました。友達も先生も犠牲になり、また勉強も出来ないこの環境の中で、気丈に振る舞い活動を手伝ってくれました。きっとこういう状況に置かれている子供はほかにも沢山いると思いますので、一刻も早く学校に行って勉強や友達と遊べるようになることを心から願います。作業中、食料や水が不足しているにもかかわらず、被災者の方々が差し入れをして下さいました。人の温かみというものを感じました。今までの穏やかな日々を被災者の方が取り戻せるように出来る限り協力したいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　4年　千田 晃平

私たち第1陣は宮城県石巻市で活動することになり、私は4軒を担当した。床下には10cmほどのヘドロがあり、1日がかりで除去する事が出来た。3軒目の倉庫の中には大量の家具や家電があり、男全員で撤去した。4日前まで浸水していたためヘドロが重く、水分を多く含んでいた。全ての作業が終わると家の庭には、考えられないほどの瓦礫や木々、家具の山があった。この作業をしてみて私が一番に思ったことは、こんな数日だけのボランティアでは、ほんの少ししか役に立たないということだ。しかし、これからもこの活動を続けていけば少しずつでも復興の手伝いが出来ると思うので、私はこれからもボランティアを続けていきたいと思う。

体育学部スポーツ医科学科　4年　加藤 祐太

南三陸町の町並は、まるで原爆が落ちたのではないかと思わせる、目を疑う光景であった。防災対策庁舎は鉄骨しかなかった。自衛隊などが回収してきた写真の洗浄作業を行った。全てを失った人々の思い出の詰まった写真をきれいにして返してあげようとするが、泥がついた写真は色が消えてしまうため儚い思いも感じた。現地の医療状況としては、亜急性期から慢性期に移行する時期であり、感染症に対する各種消毒剤の利用が目立った。石巻町中スマイルプロジェクトという活動に参加し、焼き鳥通りのヘドロ・瓦礫の除去作業を行った。重機で除去することが困難なため人力に頼るしかない。国士舘大学体育学部の学生だけでなく、重機会社の方々、日本各地から来られたボランティアの方々全員の協力によって成し遂げられた活動ではないのかなと感じた。活動を終え焼き鳥通りから撤収する際、おばあさんに「ありがとうございました」と丁寧に深々と頭を下げ言われた時には、胸が熱くなる思いであった。この活動で得た様々な経験は、自分にとって大きな財産になった。

体育学部スポーツ医科学科　４年　小座間 翔太

家の中に入った泥を掻きだす仕事を行ったとき、泥を掻きだすにもその中に色々な物が混ざっていて、指輪やアルバムなどもあり、被災者にとってはその一つ一つがとても大切な物なので除去するにも慎重にやらなければなりませんでした。今回のボランティアを通して、被災した方はとても明るく、逆に私たちが元気づけられる部分もあり、被災して自分達のことで忙しいにもかかわらず、私たちのことを気遣ってくれ、被災地にはとても温かい人間の優しさがあるんだと感じました。また、被災地には継続的なボランティア支援が必要だと感じました。

体育学部スポーツ医科学科　４年　永島 慎介

現場は、自分達が来る４日前くらいにやっと人が入れるようになったばかりで、ほぼ手付かずの状態と言っていいくらいの状況だった。自分が担当したお宅では、自分達のために昼食を用意してくださっていた。すごくありがたかった。本当にお腹が一杯になるくらい、おいしい昼食を頂いた事に今でも感謝している。昼食時におばあちゃんが自分達に涙を流しながら「あなたがたは神様のような存在です。」と言ってくださった。自分も涙が出そうになるくらいで、今でもあの時のことは覚えている。このお宅の方に本当に喜んでくれたことがすごくうれしかった。復興したらまた遊びにおいでとまで言ってくれた。みなさんの事は一生忘れないと言ってくれた。未だに復興までは程遠い現状がそこにはある。そんな過酷な状況にいても決して下を向いている方はいなかった。皆上を向いていた。今回自分が被災者の方々に元気を逆に沢山もらった気がする。本当にこの経験は自分の財産になった。

体育学部スポーツ医科学科　４年　大須賀 惇

今回、私が被災地へ行き思ったのは、どの地域も被害には差が無いということだ。私が言った地域は家屋がしっかり建ったまま残っている地域であった。しかしそこに住む人々は日常の生活や思い出を破壊された。そして家族や友人を失った方も少なくはない。ニュースなどでは「比較的軽い被害―」といった表現を使ったりしているが、今回の災害で被害が軽かった方などいないと思う。何よりも失いたくないものや人を失った方もいるはずだ。未だに強い余震は続き、復興には 10 年以上という人もいる。私は 7 日に強い余震にあったが、そのような余震にほぼ毎日あっている人々がいることを思うと、自分に出来ることはすべてやらなくてはと思う。本当に小さな力かもしれないが、これから先も被災地を支えていこうと思う。

体育学部スポーツ医科学科　４年　金城 万里奈

避難所の住民の方、被災者の方の印象として、まず、皆温かいと思った。自分達が一番苦しいはずなのに、昼食や飲料水の用意をして下さったり、1つの作業が終わると泣いて喜びお礼を言って下さったり、私たちを神のように思っていたそうである。私たちがボランティアを頑張る！のではなく、私たちが頑張ることによって被災者の方が少しでも元気を、少しでも笑顔を取り戻せたら…という思いで活動を行ってきたが、被災者の方の温かい気持ちに、私たちの方こそ力をもらうことができた。まだまだ厳しい状況だが、少しずつ前進していければと思う。また今回は、最終日に大きな余震があり、ビジネスホテルでのストレスケアどころではなくなってしまった。1か月近くが経ち、自分の中でも少し気が緩んでいたのか、幼少期の頃の記憶がフラッシュバックしてしまい、動けなくなってしまった。その時一緒にいたみんなの温かさはとても有難かった。それと共に、まだ決して油断できない状況だと再認識できた。まだ気を引き締めて生活しなければいけない。

体育学部スポーツ医科学科　４年　森本 純

国士舘大学から東日本大震災被災地救援ボランティアの第 1 次隊として活動をしてきましたが、テレビや新聞などで見る被災地と、実際に自分の目で見る被災地とでは大きく印象が違い、現地の方々がおかれている状況の過酷さに衝撃を受けた。1 次隊は IVUSA という国際ボランティア学生協会の方々と一緒に活動をし、炊き出しなどを頂けたので、食事について困ることはなかったが、野外でのテント生活や自由に水を使えない生活は普段の生活と比べると辛く、これよりも辛い生活で精神的にも肉体的にも苦しい日々を送っている被災者の方々を思うと、とても苦しい気持ちになった。自分が被災した立場だったらと考えると、ボランティアの存在の大きさを感じると思うし、なにより見ているだけではなく行動を起こさなければいけないということを強く感じた。こういった災害はいつどこで起こるか分からないが、何かあった時には今後も協力し、力になれるよう活動したいと思う。

体育学部スポーツ医科学科　４年　友野 隆文

被災地には、個人的にボランティアに来ている人も多く、日本にも復興のために活動する人たちが、意思を持つ人たちがいるのだと思い感動した。作業場を担当したが、木材が散乱しどこから流れついたか分からない建物の残骸が本来の出入り口を埋め尽くしていた。退かしても一向に減らない木材に嫌気が差していたがそんな時、ご主人や住んでいる人の笑顔や、前向きな気持ちにより自分はボランティアでこういう人たちの復興を手伝うと同時に、気持ちの面でも元気づけないといけない立場なのにと思い、それから辛いとか、嫌という気は一回も起きなかった。日に日に綺麗になっていく現場がまるで自分の家のように嬉しく思った。被災地のために役立ててもらおうと思います。日本に住む人全員が出来る、やるべきことを見つけしていくべきだと思うボランティアでした。

体育学部スポーツ医科学科　4年　村上 翔太

3月11日、東京で地震にあった。しばらくして、宮城県沖が震源地だと知り、地元である岩手の実家が心配になった。日を増すごとに、死者の数が増えていくのは本当に悲しく、今自分に何が出来るのだろうと思うばかりだった。約1カ月が経とうとするころに、ボランティアに行き、あるおじいちゃんの家で作業をした。家の1階部分は完全に使えなくなっており、庭も納屋もぐちゃぐちゃだった。1日でも早く綺麗にしてあげたいと思い、もくもくと作業をした。おじいちゃんは常に僕らのことを気遣ってくれ、「疲れたべ、ちょっと休憩してください。はい、これ水で悪いけど。」と支援されている水やパン、お菓子などをくれた。泣きそうになった。被災されているのに、どうしてこんなに僕らのことを心配してくれるんだろう、どれだけ辛い思いをしているのになんでこんなに優しいのだろう、と感じた。東京に戻り、今自分に出来ることを頑張って続けていきたい。

第２陣

４月９日～１２日

参加学生　１８名

鈴木　紀之
加藤　大裕
細川　俊介
坂井　豪
吉田　智絵
斎藤　亨夢
大関　拓朗
外村　慎之介
井上　達也
松井　茂樹
伊崎　千尋
田井　浩太郎
飯田　俊祐
長谷川　弘樹
田中　理沙
村上　加奈
谷口　享弘
目黒　優也

体育学部体育学科　４年　鈴木 紀之

今回のボランティアでは主に瓦礫除去を行いました。たくさんの人の協力によって３日間で１本の道を開通させることができました。この活動を通じてたくさんの人のつながりを感じました。１本の道を開通させることは決して楽なことではありませんでしたが、とてもやりがいがあり、達成感もありました。たくさんのことを学ぶことができ、よい人生経験ができました。

体育学部スポーツ医科学科　４年　加藤 大裕

今回ボランティアに参加し、貴重な体験でありとても有意義な４日間を過ごすことができた。

被災地を目の当たりにし、震災の影響に絶句した。人々の思いが詰まった写真や物がヘドロまみれになっていた…。失ったものの方が多い中で必死に生きようとしている方々がたくさんいらっしゃった。その１つ１つが胸に刺さり、自分の無力さや被害の少ない場所に住んでいることが悔しくてたまらなかった。また作業中に地元の方々とあいさつを交わすことが何度かあった。ご高齢の方に顔をくしゃくしゃにして感謝の言葉を言われたときは、胸が張り裂けそうになった。

みんなで協力して東北を支えていきたいと思った。

体育学部スポーツ医科学科　４年　細川 俊介

今回災害ボランティアに参加し、ほんの少しの支援しかできず残念な気持ちがありましたが、この様な支援しか私たちには出来ないとも感じました。しかし私の人生の中でとても大事な４日間となり、いい経験ができたと思います。帰りに志津川に行き戦場のような光景を見て言葉を失ってしまいました。

ボランティア活動を長い期間続けることが大切と感じ、また参加したいと思いました。

体育学部スポーツ医科学科　４年　坂井 豪

震災が起きてから募金などしましたが、やはり被災地へ行き何か役に立ちたいと思っていました。わずかながら復興のお手伝いができたことをうれしく思います。

一緒に作業をした建築業の方が、意欲だけで現場で来る若者のボランティアは戦力にならない。むしろ邪魔だと思っていたそうです。ですが一緒に作業をして、上辺だけでなく、積極的に活動する私たち学生を見て、「日本の若者も捨てたもんじゃない！」と思ったそうです。私はとてもうれしかったです。

復興に向けて役に立ちたいと思い活動した３泊４日は、私にとって貴重な時間でした。

体育学部スポーツ医科学科　４年　吉田 智絵

石巻駅周辺でヘドロの除去を行いました。何度スコップですくっても終わりが見えない状態でした。でも、そんな私たちに「ありがとう」と言ってくれる地域の方々を見ると、私たちのやっている事は小さくて地道なことだけれど、この活動は少なからず復興へ繋がっているのだと思いました。

被災地には、『復興』という言葉が軽率に思えてしまうくらいに悲惨な状況で、これから先、どうなっていくのか不安になりました。しかし、私たちよりも前向きな被災者の方々を見ていると、どんな些細なことでも自分に出来る事をやっていこうと思いました。

体育学部スポーツ医科学科　４年　斎藤 亨夢

仙台塩釜港付近を通り過ぎる時、被災地なのだと改めて確認しました。それは全く海なんて見当たらないにも関わらず、流木が田んぼの真ん中にあり、車がおもちゃの様に転がっていました。正直震災から一カ月も経つのだからもっとよくなっているものだと思っていました。

私たちの作業した商店街では力仕事が多かったこともあり、私たちは力になれたのではないかと思います。町の方からの感謝の言葉が自分たちの力になりました。しかし、たいしたことも出来ない自分が悔しいと思えたことも事実である。もっともっと力になれるよう勉学に励み消防官となり、災害が起きた時には先頭に立ち力になりたいと再認識し、実際に被災地に行き少しでも被災者の気持ちが分かったことは今後に活かせると思う。今回ボランティアに参加出来て良かったと思いました。

体育学部スポーツ医科学科　４年　大関 拓朗

最終日に志津川に行った。そこは石巻よりもひどい状況であった。

このボランティアで一つの小さな力がたくさん集まり、大きな力となって被災地がみるみるうちに復興していくのを目の当たりにした、傷ついた日本が少しでもは早く復興するのを期待したい。

体育学部スポーツ医科学科　４年　外村 慎之介

街中スマイルキャンペーンという石巻駅周辺の道にあるヘドロや瓦礫の撤去作業をしました。作業をしていると住民の方々が声をかけてくれて、自分たちにも余裕がないのに感謝してくれました。中には涙を流している方もいました。

これからも何らかの形で復興の力になればと思います。

体育学部スポーツ医科学科　４年　井上 達也

私は少しでも手助けになればという気持ちでこの活動に参加した。テレビで見ていた光景とは全く違うという印象を受けた。“ひどい”としか言葉が出てこなかったのは人生で初めでだった。私も中学校３年生の時に新潟中越地震を体験したが比べ物にならなかった。

作業をしていると、地元の方が涙ぐんでお礼を言ってくれたこともありました。悲しみを少しでも救えたら思い、国士舘大学の学生は一生懸命作業に取り組みました。正直、作業の中には辛いこともあった。しかし、誰一人として弱音を吐かずに、被災した方に比べればたいした事ないと口を揃えて言っていた。本当に頼もしい仲間だ。

ここから何年かかる分からない復興のほんの少ししかお手伝い出来なかったが、今回のボランティアで何も感じなかった学生は１人もいないと思う。また日本人の団結力、精神力の強さを肌で感じることが出来た。

体育学部スポーツ医科学科　４年　松井 茂樹

被災地を直接自分の目で見て言葉を失った。地面はヘドロで覆われ、道のいたるところに瓦礫が積み上げられていた。自分たちが３日間作業したのは町のほんの一角にすぎなかった。この悲惨な状況を自身で経験し、これからも自分に出来ることを続けていきたいと強く想った。

体育学部スポーツ医科学科　４年　伊﨑 千尋

私たちの行った石巻では物資の不足はあまり感じられなかった。報道によって注目されていた町にはたくさんの物資が送られ、逆に取り上げられていない町では水不足や食料不足の問題が多かった。ここまでの大規模災害で平等に配分するのは難しいが、今後大規模災害が起こった際には適切に対応すべきだと思った。

私たちは２０人で丸一日かかり一軒の家のヘドロや瓦礫除去を行った。この様な作業なら私たち素人でも出来る。少しでも多くの人が東北へ行き、一日も早く復興してほしい。被災者の方々と話せる機会はあまりなかったが、瓦礫の中で復興を信じ、頑張っている姿にはとても勇気をもらった。

体育学部スポーツ医科学科　４年　田井 浩太郎

石巻で被災状況を目の当たりにし、それまで普通に生活していた人たちが、津波によって大きな被害を受け、避難所で生活している姿を実際に見て心が痛くなりました。

自分たちが当たり前のように使っている水も電気も被災地では不足していました。その様な環境での生活は初めてだったので、人生に一度きりの経験になった。そしてボランティア活動を通じて被災者の方たちの苦しさも実際に体験できたので、参加できてよかったと思います。

体育学部スポーツ医科学科　４年　長谷川 弘樹

このボランティア活動を通じて感じたことは、報道で映し出されているよりも現状は悲惨だという事。未だに強い地震があるなか、被災者の方々は厳しい状況の中で生活しており、自分が思っていた以上に前向きでした。すべての作業を終えた時、達成感とやりがいを強く感じることができました。私に出来ることがあるなら、また積極的に参加したいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　３年　田中 理沙

作業中大きなヘドロをどかしたら、新芽がヘドロから顔を出していた。暗く冷たいところで少しでも成長しようとしている新芽と被災地復興が重なり、胸が熱くなった。瓦礫やヘドロが散乱している中でも懸命に前に進もうとしている人たちがいる。学生の自分に出来ることを精一杯やろうと思った。今しか経験できないこと、見ることができない、感じることができないものを全力で吸収しようと思った。作業終了間際、おばあさんがボランティア一人ひとりに頭を下げてお礼をしてくれた。おばあさんの涙を見て、感謝されてうれしい気持より、何か複雑な想いだった。

今回被災地に行けたことは自分の世界観を大きく変えるものとなった。

体育学部スポーツ医科学科　２年　谷口 亨弘

石巻でヘドロや瓦礫の除去を行いました。しかし、とても時間のかかる作業で一人の力ではどうすることも出来ないと痛感しました。

一軒ずつお伺いし、お手伝いできることはないかと尋ね、私は一軒しか手伝うことができませんでした。しかし、今回活動に参加してもっと自分も何かしなければならないと感じました。

体育学部スポーツ医科学科　２年　目黒 優也

被災地に行くにあたって私は「ボランティアをしに行く」ではなく「させていただく」という気持ちで臨んだ。被災地は報道で見てきたものとはまったく違った。ほんの数百メートル距離が違うだけで被害状況にとても大きな差があった。

私たちは一軒の家のヘドロを除去するのに２日間かかったが、完全には元に戻らない。それでも日本全国や世界各国から集まるボランティアの方々の力は大きいと思う。

私は私に出来ることを継続的に行って行きたいと思った。

体育学部スポーツ医科学科　２年　村上 加奈

私たちが作業をしていると街の方々が「お疲れ様です。」「ありがとうございます。」など声をかけて下さり、辛いのにお礼を言ってもらいより一層やる気が出た。作業中家の庭には他の家から流れてきた写真あった。悲しかった。

石巻の友達の家、部活の合宿で泊まった民宿がなくなっていたのが、とてもショックだった。

石巻も南三陸町もとてもきれいな街、一日も早く復興してほしいと強く想った。

第３陣

４月１２日～１５日

参加学生　３２名

下島　正誉
吉田　理恵
伊藤　翔平
松崎　朱里
嘉藤　一輝
足立　文佳
小山　克哉
金城　万里奈
向山　真未
佐藤　達哉
有馬　弘泰
今井　寛隆
鈴木　雄也
富居　峻大
宮原　宏徳
飛　伸幸
塚本　拓巳
小野　修平
都　城治
高野　聖
隈元　絢子
吉田　剛大
宮園　宏行
渡辺　俊明
金子　翔太郎
藤巻　直毅
堀　葵
大澤　竜平
増田　桜子
大砂　璃華
永島　慎介
田中　理沙

体育学部スポーツ医科学科　4年 伊藤 翔平

3泊4日という短い期間でしたが、すごく貴重な体験をすることができました。テレビのニュースを観ていてすごい状況だと思ったが、実際に来てみるとテレビで観るよりも悲惨な状況でした。海から3㎞～4㎞離れた場所さえも津波が2m来ており、お店の天井まで水が来ていて津波の恐ろしさを実感しました。また、3日目に手伝いをさせていただいたスナックの方に、まだスナックのママが見つかっていないと話を聞いたときにはなんて言えばいいのかわかりませんでしたが、1日でも早く発見されてほしいと思いました。食事面や日常生活については、普段自分たちが普通に過ごしていることがどれだけ幸せかというのがすごくわかりました。東京に戻ってきてから食事をする際には、被災地のことを考えたら食べ残しは絶対にできなし、食材1つ無駄にできないと思いました。このボランティアを通して得たものを、今後就職してからもその先も、どんどん活かしていきたいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　4年 金城 万里奈

裏方業務だったこともあり、最初は「ボランティアとしての需要はあったのかな」と不安を抱いていた。だが統括ドクターから「あなたたちがいなければ、またそこへ人を割かなくてはいけない。でも、あなたたちがいるから成り立っている」とおっしゃっていただき、感謝と共に自分たちの大きな力となった。今回志津川で活動させて頂いてまず思ったのが、みな本当に笑顔、元気がなく、疲れている印象だった。住む家も何もかも失い、避難所でのライフラインも遮断しており衛生面も復興していない状態で、石巻との違いだと思った。そんな思いを感じながら、入浴時に見た被災者の方のキラキラした笑顔を私は一生忘れない。何もかも失い不安しかないとおっしゃっていたが、私たちボランティアにとても感謝していると言われ、本当に泣きそうになった。自分たちが一番辛いはずなのにと、返す言葉が見当たらなかった。私たちが全力で東北を支えていかなければと強く思った。

体育学部スポーツ医科学科　4年 嘉藤 一輝

同じ国に住んでいる人が苦しんでいるのだから助けるのが当たり前。「ありがとう」という言葉は言われなくて当然。という気持ちで参加したのに、いざ「ありがとう」と言われるととても胸が温かくなりました。ヘドロ除去作業がほとんどだった今回のボランティアはなかなか力がいる活動でしたが、「ありがとう」という言葉で力が溢れてきたし、すごく良い気持ちになりました。「ありがとう」という言葉がここまで人を勇気づける力を持っていることを改めて気づかされました。自分にできることは何でもしたいと思いました。胸の奥で、「頑張っていきましょう。共に生きていきましょう。そのために今立ちあがって、自分たちが住んでいた街を取り戻すために努力していきましょう。」と叫んでいました。復興のために自分たちができることはボランティアだけでなく節水節電などたくさんあるので、復興にはどのくらいかかるかわかりませんが、同じ日本人として頑張っていきたいです。

体育学部スポーツ医科学科　4年　足立　文佳

今回私たちがやったことは、道路や住宅の泥や、使えない家財道具などの撤去作業でした。やり始めたときは本当に誰かのためになるのかわからず、ただただ作業を続けていました。しかし、昼休憩のときや1日の作業終了時に、「お疲れ様」「ありがとう」と声をかけていただくことで、誰かのためになっていたんだな、と実感しました。私たちがやっていることはとても地味な作業だけれど、その地域に住んでいる方たちに感謝してもらえることや街が少しでも綺麗になっていくのを見て、やりがいを感じることができました。南三陸町を通ったとき、本当にここに人が住む街があったのか、戦場に来たみたいだ、と思うような光景でした。震災から1カ月経っているのにいまだにこの状態であるということを目の当たりにして、まだまだ復興には時間がかかり、多くの力が必要なことを実感しました。本当に誰かのためになることをこれからも続けていかなければならないと感じました。

体育学部スポーツ医科学科　4年　小山　克哉

朝から1日中瓦礫撤去とヘドロの除去でした。予想以上に泥が多く、1日中活動しても少しの範囲しか除去できませんでした。たった十数メートルの細い通路のヘドロ除去でも、多くの人の力と多くの時間がかかりました。津波で全て押し流された現場を見て、あまりに悲惨な光景に言葉が出ませんでした。復興することがどれほど大変なことなのか、多くの人がボランティアの力を必要としていることがわかりました。

今回の活動を通してどれだけ被災地の方に協力できたかわかりませんが、少しでも何かをしたいという思いを、今回のボランティアで表すことができ感謝しています。

現地の様子を実際に見て、テレビの放送だけでは伝わらないことを多く体感しました。今回のボランティアだけではなく、これから先、自分にできることをできる限りしていきたいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　4年　松崎　朱里

気仙沼に着くと、そこにはテレビで観た光景が広がっていた。家やスーパーなどは跡形もなく、4階建ての建物に車が乗っていたり、木の10m上にはタオルや衣類が引っかかっていた。現場では、通りの泥かきを行った。前日に雨が降ったこともあり、想像以上に重たく、また臭いもすごかった。鈍った体にはとてもきつかった。被災地にいるとボランティアの方、大人、子ども、お年寄り、外国の方、全ての人が「おはようございます」「こんにちは」「お疲れ様です」と声をかける。東京ではみられない光景だと思った。最初は人が通れなかった日も、最終日には車も通れるほど綺麗になり、初めてこの道は赤いレンガだったのかと気づいた。石巻は地域住民、ボランティア全ての人々で復興に向けて懸命に生きている様子を見ることができた。私がいたのはほんの4日間だが、その人々の姿に逆に私が勇気をもらったと思う。

体育学部スポーツ医科学科　4年　向山 真未

現地ではボランティア同士や被災者の方などの挨拶が飛び交い、和やかな雰囲気だった反面、緊張感も漂っていた。元気な挨拶で被災者の皆さんを元気づけることも、私たち災害ボランティアの重要な役割だと痛感した。泥だらけになりながらの日々の活動は、力作業が多く、翌日筋肉痛になった。本来重機で対応するような場所も、人手で地道に対応するしかなかった。人間の底力を感じた。まだまだできることがあると思った。体は疲れたが心は元気になっていくことが実感できた。今回の私の驚きは、災害ボランティアと挨拶の多さだった。被災者からの「ありがとう」「ご苦労様」「頑張ってね」などの声かけに胸がつまった。返す言葉が見当たらなかった。復旧復興には、相当な時間を要するであろう。想像できない悲惨な事態になっていたが、前に進もうとしている人々の姿に感動と勇気をもらう毎日だった。みんなで協力しあい、少しでも復旧復興に貢献できるよう頑張った。

体育学部スポーツ医科学科　4年　佐藤 達哉

今回参加して気付いたことは、まだまだ多くのボランティアが必要だということです。実際に私たちが作業中にもたくさんの方からボランティアを必要とする声がありました。わたしたちが行えることは些細なことです。しかし、そんな私たちを必要としている方々がいます。私たちの前に立ち止まって「ありがとうございます」「ご苦労様です」と声をかけるおばあさん。差し入れを持ってきてくださるスナックのママさん。被災者の方々は私たちが想像できないほどの苦しみを受けているはずなのに、悲観的にならず前を向いて生きていました。このような状況下でも自分勝手にならず、相手のことを思いやり協力して助け合っていました。元通りにするにはこの先何十年とかかることでしょう。しかし、思いやりの気持ちを忘れていない被災地の方々はきっと互いに手を取り合い、復興していけると確信しました。今後とも復興支援に協力していきたいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　4年　永島 慎介

第1陣に続き、第3陣でもボランティアに行くことができ感謝している。第1陣から1週間が経ち現地に入ったが、いまだ大きな変化というものは感じられなかった。しかし、被災地の方々は皆、復興させることに必死になっているのがひしひしと伝わってきた。自分たちボランティアに混ざって、一緒に復興作業を行っている方もいた。とにかく現地にいるすべての人は頑張っていた。前回同様自分たちが元気を与えなければと思っていたのだが、今回もこちらの方が現地の方々に元気や勇気をもらってしまった。今後も自分にできることがあれば少しでも復興支援の手助けをしていきたい。最後に心から被災者の方々に言いたいことがある。自分はたくさんのことを今回の活動で学ばせてもらえた。すごく感謝している。あの温かい気持ち、笑顔などで、私たちを迎え入れてくださった。みなさんにありがとうと言いたい。

体育学部スポーツ医科学科　3年　有馬　弘泰

東日本大震災から1カ月。救急救命士を目指す者として、「現場で活動できれば」と思うようになり、ボランティアとして被災地入りした。仙台の光景を見て、開いた口が塞がらなかった。津波の力のすごさが一目でわかった。現地ではスナックの清掃作業を行った。泥は水分を多く含み、搬出はとても大変であった。スナックのオーナーがいらっしゃり、泣きながら「ありがとうございます。本当にありがとうございます」と言われ、何と声をかけていいのかわからなかった。何も言えなかった悔しさと申し訳なさから、店を綺麗にしていち早く再開できるようにしようと思い、必死に泥をかき出した。昨日までは泥と瓦礫で通れなかった道を開通させ、終了となった。達成感でいっぱいだったが、まだまだ手をつけられていないところもあるということなので、またボランティアに行かなければという気持ちでいっぱいだった。一刻も早く東北が復興できるように祈って、東北を後にした。

体育学部スポーツ医科学科　3年　今井　寛隆

はじめに、この災害で被害を受けられた方々に謹んでお見舞い申し上げます。また、亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げます。

今回の災害は史上初の未曽有の災害であり、現場で見た光景は戦場に来たかのような様子であった。私はこの災害に対し、南三陸町において医療スタッフとして活動した。医療統括本部での活動では、町内すべての医療をコーディネートするだけでなく、救急要請の受付など多種多様に及んだ。ここで災害時における医療で問題となることが経験できた。避難生活が長引くことにより、ノロウィルスやインフルエンザが蔓延する可能性が出る。それを根絶するために、マスクや指手消毒、うがいなどが徹底されていた。このような現場で活動し思ったことは、どんな災害にも対応できるように医療体制や処置要領も勉強し、努めていきたいということだ。一緒に活動したDMATやHuMAにも興味を持った。

体育学部スポーツ医科学科　3年　鈴木　雄也

私が志津川に着いたときは現地の衣、食、医療体制はだいぶ整っていましたが、被災者の方たちの顔色はあまりいいとは言えず、家族や友達の心配やこの先の不安で、とてもストレスを感じていると思いました。私たちのメインの仕事は医療資器材の管理です。1、2陣に引き続きまだまだ何がどこにあるか把握できなかったので、さらに細かく整理し医師や看護師が求める物資をすぐに取り出せるようにしました。何がどのくらいあって何が足りないのか把握することが、患者の命につながると思って仕事を行っていました。東京で普通に生活をしていると気付かないことが被災地ではたくさんありました。例えば子どもたちが外で元気よく遊んでいる姿、人の笑顔、家族や友達と話せる嬉しさなどです。これから時間が経つとこの震災のことを忘れていく人が出てくると思いますが、私は決して忘れません。

体育学部スポーツ医科学科　3年　富居 峻大

商店街にある居酒屋内のヘドロ除去と建物内に残った家具の運び出し作業を行った。スコップや水切り、ちりとり等を駆使して徹底的にきれいにした。ヘドロにまみれた食器戸棚の中にはまだまだ使えそうな食器類もあって、それらを外に出し洗う作業も行った。ここの家主であろう奥さんの切ない表情が忘れられない。みんなで一丸となって黙々とヘドロをトン袋に詰め、廃材などをパッカー車に入れ、道にこびりついたヘドロをスコップで削り落とす作業を進めた。それでもまだヘドロが溜まっているところはたくさんあり、これからも継続していかなければならないと感じた。帰りに立ち寄った南三陸町の悲惨な光景を目の当たりにして、自分たちのしてきた作業は毛細血管のようだなと感じた。自分たちにできることは、その小さな血管を修復してその先にある細胞を救ってあげることだと感じた。もっと力になりたいと思った。

体育学部スポーツ医科学科　3年　宮原 宏徳

商店街の瓦礫撤去を行ったりお店の中にたまったヘドロをかき出す作業を1日中行い、1件の居酒屋を綺麗にすることができ、とても満足できた作業でした。そのときのオーナーの方の笑顔がとても心に残っています。今回、ボランティア活動を通して多くのことを感じ、考えさせられました。私たちの行った作業はほんの一部にしかすぎませんが、私自身にとってとても貴重な体験でした。テレビを通してでしか知ることができなかったことを自分の身をもって体験できたからです。またボランティアを終え石巻を離れるときにとても心が痛かった。なぜなら私たちには帰る場所があるけど、震災で家が流された人たちには帰る場所がない。家だけでなく家族が亡くなった人たちは頼る人もいない。そんな人たちのことを考えるととても心が痛みました。だから今後被災地に行く機会があれば、今度はそういった方たちの心のケアをしたいと強く感じました。

体育学部スポーツ医科学科　3年　飛 伸幸

今回被災地のボランティアを通して、地震や津波の恐怖を学び、これから自分たちはどのような対策をしなければならないのか考えさせられました。また、スナック内のヘドロ除去、道路に出された家具や瓦礫をパッカー車に入れるなどといった活動を通して、仲間と協力して1つのことに向かいやり遂げる素晴らしさや大切さを感じました。どんなに大変な作業でも被災者の方に「ありがとう」と言われるだけで、もっと頑張ろうと思えるようになりました。今回のボランティアで学んだ支えあいの精神の大切さを胸に、今後も自分にできる最大限の協力を被災地に送りたいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　3年 塚本 拓巳

倉庫の整理や物資を運ぶ作業などを行いました。避難所から近くの介護施設に毛布を運んだとき被害のあった街を見ましたが、言葉が出ませんでした。印象に残っていることは、2日目にノロウィルスの隔離部屋として使われているプレハブの脇道を通行止めにするための看板を作っているとき、被災地の方が作業を手伝ってくださったことです。被災地の方々の優しさを実感しました。翌日再びその方に会い、お話を聞かせていただきました。お話の最後に、「ボランティアに来てくれて本当にありがとう」と言っていただき、私はこのボランティアに参加してよかったと思いました。ボランティア最終日に水道と電気が復旧し、人々に笑顔が見られました。

今回のボランティア参加は、私にとって心に刻まれるできごととなりました。このような機会を与えてくれた大学に感謝しています。

体育学部スポーツ医科学科　3年 小野 修平

道路には各家、建物から出たごみや廃材が積まれていた。ヘドロも散乱していて長靴が埋もれてしまった。財産や高価なものまで置いていかざるを得なかった状況を目の当たりにして生々しかった。道幅いっぱいのヘドロの中は新聞や食器類などが混ざっていてスコップで掘ることが難しかった。通りを車が通れるようにしたのは、ものすごい達成感だった。また、国際赤十字の方々と共に、避難所に給水所の設置を行った。夕食が芯の残ったご飯と焼鳥缶だった。キャンプの厳しさをそこで知った。被災地はすべての出来事や光景が非日常的だった。一日一日が驚きと困難の連続だった。電気、ガス、水道が使えること、プライバシーが守られていること、食べたいものが食べたいときに食べられるこの環境がこんなに幸せだということを心から感じた。今後、自分がどのように地震の影響を受けた地域に貢献できるか考えていきたい。

体育学部スポーツ医科学科　2年 都 城治

まず今回は、準備不足や忘れ物のために時間を無駄にしてしまう場面が目立った。しかし生活用水や食材はかなり多めに持っていったために、空腹感、枯渇感を感じることはなかった。現地では、石巻市街地で瓦礫、ヘドロの除去を行った。日陰やビル内部にたまっているヘドロは水分を含んでおり、重く強い臭いを発していた。乾いたヘドロに関しても風で舞い上がるため、ゴーグルがないとかなり不便だった。3、4日目、日赤の方と合流していくつかの避難所を回り、給水所の設置を行った。タンクの蛇口の高低差を水が出る簡単なもので、足場はビールケースとパレットを使って組んだ。かなり忙しく動き、7か所設置することができた。そのうち2か所ほどで取材を受けた。

第5陣にも参加予定なので、良い経験になった。

体育学部スポーツ医科学科　２年　隈元　絢子

南三陸町の志津川に行った。そこでは医療物品の管理を任された。南三陸町は水は給水車、電気は通っておらず発電機で対応、ガスはプロパンのみという状況で、決して良いと言えるほどの環境ではなく、ノロウィルスもはやっていた。またインフルエンザも発生していたということでマスクをし、手指消毒を頻繁に行い対応していた。町のほとんどが津波の被害にあい壊滅的な状態で、そこに町があったとは想像もつかなかった。復興には時間と労力がかかるとその光景を見て実感した。この４日間で感じたことは数え切れない。１つの大きな施設に1000人を超える方々が避難生活をしている状況で避難所として機能しているのは、医師や看護師スタッフ、自衛隊など多くの人が復興に向かって毎日戦っているからだと思った。そして被災者の方々もそれぞれ様々な思いを抱え生活していて、テレビなどでは報道されていないことの方が多いのだと改めて実感した。１日も早い復興を心から願う。

体育学部スポーツ医科学科　２年　宮園　宏行

東京では桜が満開という時期でしたが、宮城県ではまだまだ寒さが厳しく、被災者の方々はこの寒さに耐えながら辛い思いをされているということを痛感しました。町のいたるところが地震と津波によって破壊され、ヘドロや瓦礫が町を埋め尽くしていました。町のあちこちに津波で流された方を探しているという貼り紙がありました。山のように積まれた瓦礫からは、あの日、人々がどのように生活していて、地震の後誰もが生きたくて必死に津波から逃れようとした、そんな姿が想像できました。胸が締め付けられるような思いでした。確かにこの場所で多くの尊い命が奪われたのです。そのことを痛感しながら瓦礫とヘドロ除去を行いました。私はこの４日間で命の尊さを学びました。すべての方にそれぞれの生活があり、家族がいて、人生があった。そんな多くの尊い命が、一瞬にして奪われてしまったのです。私の目指している救急救命士という世界の重みを改めて知りました。

体育学部スポーツ医科学科　２年　渡辺　俊明

テントで寝泊まりした。夜はとても寒く、被災者の方は１カ月以上もこういう生活をしているのかと思うと、とても辛い気持ちになった。作業現場に向かう途中で、家がぐちゃぐちゃになってた。車が引っくり返っているのを実際に見ると、本当に津波の恐ろしさがわかる。初日はヘドロや瓦礫の除去をひたすら行った。ヘドロに足をとられ滑ったりしながらの作業は気が抜けず、ずっと集中していた。中には写真やアルバムなども流されていて、平和な日常や思い出の物なども津波で一瞬にして流されてしまうんだと痛感した。２日目からは赤十字の方々と簡易給水所の設置をした。主にトイレ脇に設置し、手を洗うのに使う。７か所設置した。いろいろな避難所を回ったが、避難所によって格差がすごくあるなと思った。今回のボランティアを通して、人とのつながりはとても大事だとわかった。復興には時間がかかるだろうが、これからも自分たちに何ができるか考えていきたい。

体育学部スポーツ医科学科　２年　金子　翔太郎

石巻の商店街で瓦礫の撤去やヘドロの除去作業をしたり、日本赤十字社の方々と避難所に仮設給水タンクを設置したりした。給水タンクはいずれも簡易的な作りで作業はスムーズに進んだが、移動に時間を要した。しかしまだまだ場所によって支援の行き届かない避難所も見ることができた。北上川町の被災地へ向かったときは市街地の光景とは異なり、津波の影響で建物が跡形もなく、川辺には牛の死骸まで横たわっていた。避難所の水も乏しく、生活するのがやっとの状況であった。お寺の床下のヘドロ除去では、奥に進入するにつれ大量のヘドロが残っており、暗く狭い床下での作業は困難が多くあった。墓地の瓦礫は墓石などの倒壊が多く、重い墓石の移動は大変だった。夜は４月にも関わらず雪が降り出し、地元の人も驚く 15cm ほどの積雪となった。今回被災地に足を踏み入れ目にしたことは、一生忘れてはいけないものばかりであり、大変貴重な体験をさせていただいた。

体育学部スポーツ医科学科　２年　堀　葵

今回ボランティアに行ったところは宮城県石巻市。初日は緊張のためなかなか寝付けなかった。翌日から作業を始めたが、まず、瓦礫とヘドロの多さに驚いた。家やお店の１階部分は被害が大きく、何もかもめちゃくちゃであった。１人１つスコップが渡され、瓦礫を道の端に寄せた。主に、ヘドロを土嚢に入れる作業を行った。土の上に覆いかぶさるように乗ったヘドロを手やスコップを使って剥ぎ取った。徐々に瓦礫やヘドロが撤去され、通行可能になりつつあった。家屋のドアや窓ガラスをむやみに外してしまうと全壊する恐れがあり、皆慎重に作業を行っていた。初日は手つかずの状態であった場所が、最終日には人も車も通行可能な状態になった。ものすごい達成感であった。

このような体験はそう簡単にできるものではないのでとても勉強になり、考えさせられるものであった。一生忘れることのできない経験になった。

第４陣

４月１５日～１８日

参加学生　３４名

田村　誠也
尾崎　智奈美
寺田　佳織
駒井　幸人
菊谷　裕也
原　愛実
三澤　翔一
島崎　友佳里
齋藤　雅弥
樋田　翔一
浅見　信吾
豊田　亮太
高橋　夏美
田中　美帆
富山　陽介
鈴木　舞子
吉村　海人
森田　光
山本　和樹
嶋田　美咲
金川　侑太
小林　美穂
渡辺　啓
廣江　翔平
近藤　優太
岡村　龍樹
宮園　宏行
塚本　一貴
斎藤　啓太
渡辺　真悟
田中　理沙
西川　博貴
塙　芙美佳
井上　栞

体育学部スポーツ医科学科　４年　田村 誠也

３月１１日に発生した東北地方太平洋沖地震は甚大な被害をもたらした。
大震災から１ヶ月以上たった現在、被災者の方々には「復興」に向けて努力している。しかし、被災者の方だけでは限界がある。そのためボランティアの需要は高まっているが、その質も考えなくてはならないと思う。国士舘大学の学生は、１人ひとりが個人の役割を自覚し一生懸命活動したいと心からいうことができる。しかし、中には「観光気分」で来ていると感じさせるくらいのボランティアの存在していたことも事実であった。これからは、復興に向けてそういったことも考えていくべきではないかと思う。
３泊４日という短い間のボランティアであったが、被災地でしか感じることのできない、多くのことを学べたと感じている。そして、その経験は消防官として活躍するための大きな糧となると思う。

体育学部スポーツ医科学科　４年　尾崎 智奈美

４月１５日から１８日まで３泊４日、宮城県南三陸町志津川にて、医療スタッフとして活動させていただきました。たくさん送られてくる医療物資の残庫処理と発注。場所はベイサイドアリーナという大きな総合体育館で、１５日現在で避難者は約３７０名。主な位置づけは、県立志津川病院の西澤先生を筆頭に、医療対策本部が設けられており、それを支えるものとしてサーベイランスと医療物資と事務の仕事がありました。
ベイサイドアリーナで感じたことですが、震災から１ヶ月が経っていたということもあり、物資は多く届いていたように思います。しかし、それを仕分け、うまく分配するのにボランティアなどが必要になっていきました。また避難している地域の方々は、本当に地域力が強く、この送られてくる物資の分配も住民自らが行っていました。その際に「この家庭は子供がいるから多くの食料を分けよう」など、家族構成などもすべてわかっていました。こういう力が非常に大変なときでも生きてくるのだと思いました。

体育学部スポーツ医科学科　４年　駒井 幸人

初日は石巻に到着し、ミーティングをして夕食を食べ明日に備えた。
２日目、商店街の土嚢を運ぶ作業、とても重く、腕の力だけでは持ち上げることは困難で、よごれを気にする暇がありませんでした。周辺は建物が崩壊していました。
３日目、また商店街に行き家電や家具を運びました。前日の頑張りから筋肉痛になりましたがほかのボランティアの方と協力してやりました。
４日目、商店街を一掃するということで４日間の集大成でした。
私はこの震災で自分に何かできないかと考えていました。積極的に募金活動をしてごまかす中、ボランティアに行く機会があったので参加しました。ボランティアの中でこの先一生経験できない事をたくさんして自分にもプラスになりました。復興にはまだ時間がかかると思いますが、できる事があれば協力したいです。

体育学部スポーツ医科学科　４年　菊谷 裕也

今回、私がこのボランティア活動に参加したのは自分なりに人の助けになればと言う感情はもちろんのこと、これほどの規模、これほどの被害をもたらした天災をテレビ等の報道ではなく、自分の目でこの災害の深刻さや現地にいないとわからない被災地の真実の姿を知りたかったという気持ちもあった。実際に現地に入ってみてテレビで見ている数字だけの被害報告から想像するものより遥かにすさまじいものであった。

そんな環境の中でも住民の方は少しずつでも片付けそして普通の生活を取り戻そうと必死に努力していた。今回のボランティア活動は３泊４日というとても短い期間であり現地にはまだまだやらなくてはいけないこと、メンタル面など少しずつでも改善していかなくてはならないことが山積みであり、長期的な支援が必要なのが明らかであると現地を見たからこそ確信を持って言える。

体育学部スポーツ医科学科　４年　原 愛実

石巻へ向かった。専修大学へ近づく度に被害状況が見えてきた。本来住宅地であるはずの場所が田畑のように開けていた。瓦礫が散らばり、車が家と家の間に挟まれていた。

ローラー作戦に参加することになり、一軒一軒声をかけて周ったが、瓦礫により道は無くなり、家屋の入り口は潰れていて、予想以上に時間を要した。

現場の生の声をたくさん聞くことができ、その多くは、「水は出るようになったが、下水はまだ整備されていないためにトイレが使えない」「瓦礫を持って行ってくれない。市は市民の声を聞いてくれない」「情報伝達ができていない。隣の町で自衛隊がお風呂を運営していることすら知らなかった」という内容だった。たった数日だったが被災地の生活を知るにつれて自分が普段いかに恵まれた生活をしていたか気づかされた。これから先、復興するまで私は必ずどんな小さな形でも被災地への思いやりを忘れてはならないと思った。

体育学部スポーツ医科学科　４年　三澤 翔一

１日目にベイサイドアリーナに到着後に電気が復旧した。業務の引き継ぎ等を行った。

２日目、医療スタッフのミーティングが行われるため、数名はそちらに参加し、残りは資材管理などの活動を行った。

３日目、資材倉庫班、一般ボランティア班、炊き出し手伝いや荷物運搬などのボランティア班の３つに分かれて活動。私は炊き出し班になり、午前の炊き出し、片付け終了後に避難所に移動してきた方の荷物運びや、幼い子と遊んだりして午後の炊き出しを開始。片付け終了後に今日の活動は終了した。

４日目は資材倉庫班、ボランティア班、医療テント内整理班に分かれ、私は医療用テント整理班になり、主に国士舘チームの荷物整理を行った。必要なものとそうでないものとに分け必要ないものは帰りのバスで持ち帰った。

体育学部スポーツ医科学科　４年　塙 芙美佳

本格的な作業は２日目から始めました。

２日目は、医師・看護師等が避難所以外の自宅に残っている人などの健康状態や介護の必要な方がいないかを確認するローラー作戦を行いました。早急に介護が必要な場合、報告書にチェックし、保健師さんにわかるようにする活動をしました。被災された方達は、無理をして笑い「辛いのはみんな一緒だから我慢しなくてはいけない」と口々に言っていた。

３日目はお寺で軒下のヘドロの撤去作業や仏像の洗浄作業をし、墓石の上に車が乗っかっていて早く撤去してほしいと強く思った。また、神仏の洗浄作業では歯ブラシで仏像の顔を洗うのはとても申し訳なく思った。

４日目は道端にある家具・瓦礫などをトラックに積む作業をしている時に現地の方に「ご苦労様。ありがとう」と声をかけて頂く度に心があたたかくなった。

体育学部スポーツ医科学科　３年　島崎 友佳里

今回ボランティアに参加させていただき大変貴重な体験をすることができました。ボランティアをやろうと思った理由はテレビで被災地の状況や被災者の方の声を聞き、津波による大規模な被害を受けたことを知り、募金だけでなく自分自身被災地に行き何かできればと思ったからです。

被災地に行ってみて瓦礫の山や土嚢袋の山、３階建ての建物の上に車があり、津波の恐ろしさを目のあたりにしました。３日間の活動をして思った事は、被災された方々みんなとても明るかったです。そして、みなさんとても前向きで１日でも早く復興しようと協力し合っていて、とても心身ともに強いなと感じました。この経験を無駄にせず、将来に役立てていきたいと思います。

このような体験をさせていただきありがとうございました。

体育学部スポーツ医科学科　３年　齋藤 雅弥

一日目は、バスに乗っていて普通の街並みが並んでいると思ったら、突然津波の被害にあっている場所が現れ、とても驚いた。

二日目は石巻商店街で道端に土嚢を積み、片付け、店や民家の片付けをおこなった。土嚢はかなりの重さで、積むごとどんどん握力が無くなりきつかった。被害のあった店や民家では、家の中の泥の片付けや物を捨てる作業は重労働だった。床をはずし、ヘドロ出しを行ったが、人手が足りなかった。

三日目も、商店街で家電・土嚢運び、民家の泥かき、畳運びを行った。今日も道端の片付けを行った。畳は水分を吸って１枚がかなりの重さになり、１人では運べなかった。

四日目も商店街でとん嚢にヘドロ入れを行った。最終日のため、いつもよりも気合いを入れて活動した。少人数であったがとん嚢を１０袋以上作ることができた。やはりまだまだボランティアの数が足りておらず手の届かない所も多いと思った。

体育学部スポーツ医科学科　３年　樋田 翔一

宮城に入り、田畑に木や車などが流れているのをみて衝撃を受けました。ヘドロが入っている土嚢をトラックに積み込む作業を行い、午後からはやきとり横丁という路地の民家の床板剥ぎを行い、その下に入り込んだヘドロを取り除く作業をしました。ピースボートといわれるボランティア団体の方たちと一緒にアパートの床板剥ぎとヘドロの除去を行いました。

最終日は午前中だけの作業でしたが、１日分の作業をしてしまおうと、みんなと話をしていたので、延々と、とん嚢にヘドロを入れる作業をハイスピードでしました。

体育学部スポーツ医科学科　３年　浅見 信吾

本格的な活動は２日目から始まりました。２日目は商店街のヘドロをスコップでかき出す作業と人の家に入ってガレキ除去をしました。３日目は電気製品・畳運び・土嚢運びをしました。４日目は、土嚢を大きな袋で詰め、ヘドロ除去をしました。

このようなボランティアに参加できる環境を与えてくれた先生方に感謝します。３泊４日で思ったことは東京にいて当たり前だと思っていた食べ物、飲み物はおろか、お風呂やテレビといった娯楽を楽しめないことはとてもストレスの溜まることだと思いました。

また、野外でのテント生活はとても寒く、夜はぐっすり眠れないこともありました。

私はボランティアで苦労や感じたことを今後の生活や勉学に生かしていきたいと思いました。

体育学部スポーツ医科学科　３年　豊田 亮太

４月１５日～１８日の間、宮城県石巻市へ被災者支援ボランティアに行ってきました。

石巻市へ向かう途中で津波の跡が見られました。車や瓦礫など広い畑にあちこち転がっていました。初めに土嚢をトラックに積む作業や道の脇に積んであったヘドロやガラス、瓦礫を片付ける作業を行いました。次に民家へ入り一階部分の物を全て出したり、畳を剥いだりしました。水を含んだ畳はとても多く運ぶのが大変でした。大人４人でやっと動かせるくらいの重いピアノを倒れていました。地震か津波かはわからないですが自然の力のすごさに驚いてばかりでした。帰る時には、笑顔でお礼を言ってもらえました。自分たちはこれくらいのことしか出来ないけれど作業をさせてもらえて良かったです。

今回このような機会を頂けて、被災地を実際に見て、ヘドロだらけになって活動して、色々な発見があったり改めて考えさせられることが多かったり、とても貴重な体験ができました。今後生かせていけたらいいなと思います。

体育学部スポーツ医科学科　３年　高橋 夏美

志津川班の一員として３泊４日のボランティアに行きました。行く前は家族に反対されましたが、今行くことの重要性を伝えると家族は理解してくれました。行くときには誇りを持ってしっかり仕事をしてきなさいと、前向きに送り出してくれました。テレビでは情報を見ていました。どんな場所かすごく不安でした。バスの中から見るとだんだんと屋根にビニールシートがかかっていることが多くなってこの先の不安が高まっていきました。自衛隊の車両やテントが並んでいるときの光景は戦争中のようでした。

志津川班での仕事は医療品の管理でした。

建物の中は被災者の方が多くいました。毛布の上に座っていましたがその生活は大変そうでした。区切りはダンボールでプライバシーはなにもないようでした。

はやく元の生活に戻ることができると良いと思いました。

体育学部スポーツ医科学科　３年　田中 美帆

私は南三陸町志津川でボランティア活動をした。

今回のボランティア活動でベイサイドアリーナの体育館には医療物資などの様々な物資が山のようにあり、被災者の人達は、体育館で過ごしているのではなく、狭い廊下などですきまもなく、プライバシーも何もなく過ごしているのを見て、物資がたくさんあるのはいいと思うが、生活する場所が廊下しかなく、しかし、孤立した所では物資が届いてなく、どうすれば１番いいかわからなくなった。４日間のボランティアで最終日に炊き出しを手伝いにいった。そこで地域の全員が協力し合って生活し合っていて全員がとても強いと思った。また、その地域に住んでいる人たち全員の家族構成なども全て把握しているというのを聞いて、繋がりを感じた。被災者の方とたくさん話せてよかった。来てくれてありがとうとおっしゃっていてとてもうれしかった。

体育学部スポーツ医科学科　３年　富山 陽介

今回、自分の足で被災地に行ったことでとても貴重な経験がつめました。

初日は翌日の準備や各自の荷物整理をしました。他のボランティア団体からの期待がすごかったです。２日目、石巻市の商店街の清掃を行いました。ヘドロの量はすごく、今まで嗅いだことのない臭いでした。３日目、この日は医師と共に地域を調査していく「ローラー作戦」に参加させて頂きました。直接被災者の方とお話ができたのでとても貴重なお話を聞けました。皆さん共通していることは自分の町を愛しているんだなと思いました。４日目、初日と同じで商店街を中心に清掃作業を行いました。自分達の１人１人の力は微力だけれども日本全国の方々の力を合わせれば復興も早急にできるのではないかと思いました。

そして、やはり日本人は温かい人ばかりでした。特に被災地の方々の温かさには感動しました。１日でも早い復興をお祈りします。

体育学部スポーツ医科学科　３年　鈴木 舞子

地震が来た時、私は部活で疲れて、お家で寝ていました。大きな揺れでとび起き、長い揺れでとても怖かったです。電気もガスもとまり、携帯も充電できなかったので東北がこんなことになっているなんて、次の日にお昼にやっと知りました。
家族や友達からたくさんのメールが届いていました。みんながとても心配してくれていて、人とのつながりを強く感じました。
この地震・津波は一生日本に語り継がれる大きなものとなりました。しかし、よくいえば日本が、絆が大きくなったものとも思います。これからどうなるのか不安であり楽しみです。
がんばれ！日本！

体育学部スポーツ医科学科　３年　森田 光

私は３泊４日で被災地である南三陸町の志津川のベイサイドアリーナに行きました。
私は、写真を泥の中から復活させる「思い出掘り出し隊」に配属されました。フジフィルムの方が泥のついた写真の洗浄の仕方を教えていただきました。友達・家族・恋人、様々な写真がありました。津波で大切な思い出が流されてしまって、その思い出はやはり一生の宝物であって、その人達の気持ちを考えると本当に真剣にしなければと思いました。一枚一枚丁寧に慎重に水に写真を入れて筆で泥をはらいました。少しでも余計な力を入れるとたちまち写真の色が取れてしまい一瞬も気が抜けませんでした。フジフィルムの方が「この写真を一人でも多くのひとのもとに帰ってくれたらな…」と真摯に言っていました。私はこの言葉を聞いて涙が出そうになりました。少しでも大切な思い出を救いたい、この一心で頑張りました。人のために何かをするということを再認識できました。

体育学部スポーツ医科学科　２年　嶋田 美咲

現地に着いて思った事は、別世界だと思いました。テレビだけでは伝わらない凄さを感じ、実際の現地の人達の心境は、本当に行ってみて実感してみないとわからないと思いました。
作業は、商店街とお寺で作業しました。商店街では、ヘドロ除去や家具家電の運びだしをやりました。また、家の中も作業をさせていただき、そこの家主さんの趣味の物や大切な思い出の物も津波によって流され、壊れていて心が痛みました。１日そこで作業しましたが、まだまだ手つかずの所もたくさんありましたが、帰る時に家主さんやご家族の方から感謝の言葉を言われた時はうれしさと複雑な気持ちになりました。
お寺の方は、家が流されていたり、お墓が倒れていたりガレキの山になっていて手つかずの所ばかりでしたが、作業が進みました。
災害支援ボランティアに国士舘大学として行かせていただいてとてもよかったです。

体育学部スポーツ医科学科　２年　金川 侑太

実際に被災地に行ってみて、感じたことはテレビや新聞で見るものより悲しい現実だった。今回は主に、商店街での活動だったが、道路がところどころ陥没していたり、道路の上に漁船があったり、家の中に自動車が入り込んだりと考えられない光景ばかり目のあたりにした。二日目に住民の方に庭のヘドロ除去を手伝ってほしいと頼まれ、その活動にあたった。

住民の方はとても明るく返す言葉も見つからず気持ちが落ち込んでいた私たちのほうが少し情けなかった。

今回のボランティアは、私たちにとって初めて体験だったので、今思い出すと、あの時こうすればよかったと思うことが多々あるが、多くのものも学べたのでこの経験を糧にこれから先も進んでいこうと思う。

体育学部スポーツ医科学科　２年　小林 美穂

初めて被害を目のあたりにして、言葉が出ませんでした。ニュースや新聞とはまた違うものが、そこにはありました。

写真や映像では絶対に感じることのできないにおい。生まれて初めて嗅ぐにおいでした。

道にある土嚢を袋にいれて片付ける作業、民家の片付けをお手伝いしました。その家の人は、私たちが帰るときに飴をくれました。「ありがとうございました。」と丁寧なお礼をしてくれました。私がした事はほんの少しの片付けなのに、その言葉を聞いて胸が熱くなりました。

みんなドロまみれになりながらひたすら作業しました。「ただ、なにか少しでも力になりたい」という気持ちが、全員にあったと思います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　渡辺 啓

１日目は、石巻専修大学に行き、２日目から活動を行った。

２日目は石巻駅周辺（商店街）にて、主に土嚢づくり、店内のヘドロ除去、家具だしを行った。

３日目は昨日と同様で土嚢をトラックでゴミ収集所へ運んだ。

４日目は昨日と同様で土嚢、家具、家電ゴミをゴミ収集所へ運んだ。

被災地はほこり、異臭、ヘドロがすごく、多くの方に「ありがとう。ごくろうさま。」と声をかけていただきうれしかったです。また、多くのボランティアの方がいて、交流もできたのでよかったです。少しでも被災地の力になれたのなら素晴らしい経験になったと思います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　廣江 翔平

４日間のボランティアは、主に商店街にヘドロ除去家具や家電を運ぶことをしました。ヘドロはすごく重たくとても臭いと感じました。活動２日目、午前中に民家へ行ってヘドロ、瓦礫の撤去をやる機会がありました。その時、民家の人と話をしたのですが、「何で津波は中途半端に残していくのかね、こんなんになるなら全部持っていかれた方がいいのに」と笑って話してくれました。自分はそれを聞いたとき、すごく胸が苦しくなりました。

今回のボランティアに参加させてもらえていい経験ができました。短い期間でヘドロ、瓦礫の撤去をして、短い期間の中でも欲が出て、あれが食べたい、お風呂に入りたいなど思いました。被災した人達は自分がボランティアに行く前も、行った後もその状態で闘っています。

４日間の短い期間だったけれど少しでも力になれたのでよかったと思います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　近藤 優太

１ヶ月経った今、まだ家の中はヘドロがあり、家具や家電がころがっている。家の人がいない所に関しては全く手を付けていない状態。実際被災したわけではないから被災者の気持ちになって考えるのは無理だが現地を見て、大変なのは十分伝わった。

３月１１日、私は仲間３人とディズニーランドに行っていた。地震があってから避難はさせられていたもののパーク内はそれ程目立つ損傷もなく、また情報も全くなかったので写真撮影をしたり歩き回ったりして楽しんでいた。しかし、外に出たら液状化の跡がすごく、地面が盛り上がり、唖然としてしまった。そして今回ボランティアに参加して、ディズニーで見たもの以上でまず驚き、志津川を帰りに通った時は言葉を失った。

被災地へ行き、色々なものを感じ、そして考えることができたのはこの先きっと役立つことだと思う。少なくとも、テレビで見ているよりもリアルに感じることができた。

体育学部スポーツ医科学科　２年　井上 栞

私は第４陣で宮城県石巻市にボランティア活動してきました。

３日目で瓦礫等の撤去作業のためお寺に行きました。お寺は広く、狭い所も多くてねこ車が使えないのでバケツリレーでヘドロを除去しました。住職やそのご兄弟の方、親戚に方々もいて、その時ほとんど楽しく片付けできました。ですが、お寺の周りはほとんど建物がなく、お墓もめちゃめちゃで１ヶ月経ってまだこの状態に復興まであとどれくらいかかるか…

現実は本当に悲惨でテレビだけじゃ伝わらないと思いました。父がボランティアとして宮城に行くことになったので今回の経験を父にも伝え、生かしてもらいたいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　岡村 龍樹

私は山口県出身で今まで大きな災害を経験したことがなかったのでボランティアに参加しました。

１日目は石巻市に到着し、バスから降りた時に悪臭がしてビックリした。

２日目は石巻専修大学から商店街に向かった。商店街はヘドロだらけで、臭いがすごく車などもあちこちに散乱して電柱も折れて倒れている、こんな現状に津波の怖さを痛感した。

１日お店や道路、家のヘドロ除去を行った。

３日目は昨日と同様のヘドロ除去で昨日終わってなかった所を行った。夕食にカレーが出て改めてカレーのおいしさを感じた。

４日間は家具やガラスなどをトラックに積みゴミ処理場に運ぶ作業を行った。ゴミ処理場には畳が２０００枚以上ありすごいゴミの山で臭いが本当にすごいものだった。

体育学部スポーツ医科学科　２年　宮園 宏行

１週間のボランティア活動を終えて、様々なことを感じました。これだけの大災害が起きたのですから、復興への道のりは険しく、遠いです。しかし、被災地の方々は前しか見ていません。少しずつ、本当に少しずつですが、確実に復興の道のりを歩んでいると感じました。被災地の方々は私たちボランティアスタッフに、心からの感謝の言葉を言ってくださります。しかし私は、複雑な思いでした。被災地の方々は、あまりにも多くの物を失いました。あの日、被災地から離れた場所にいた私たちは、ほとんど何も失っていません。この状況で、私たちが被災地の方々を支援させていただくのは、ある意味当然のことだと思います。そういった意味で私は複雑な思いでしたが、困っている人の力になりたい。この単純な思いがもつ力の強大さを知ることができました。逆にこの思いがなければどんな行動も支援の力にならないことも知りました。

体育学部スポーツ医科学科　２年　塚本 一貴

僕は被災地の一つである石巻に行ってきました。

１番印象に残ったのは瓦礫の山でした。海からほど遠い所にも津波の形跡があり、津波の激しさを身にしみて実感し、家が傾いていたり、家の中にヘドロが入り込んだりしていて、普通の生活さえもままならない状態で、住んでいた人たちはとても苦しい生活を強いられていると思いました。風呂には入れないし、十分な食料も確保できないし娯楽的なものもほとんどない中での生活は自分では耐えられないと思いました。

石巻でさえ大変だったのに志津川は、比にならないくらいひどいと感じました。家は跡形もなく、車はつぶされて瓦礫だらけでとても住める状況ではないという印象が強く残っています。

３泊４日の作業で自分達ができたことは、ちっぽけなことかもしれないけど、ボランティアとして少しでも役に立てたらいいなと思います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　斉藤 啓太

作業は２日目からでガレキ、ヘドロ除去をした。ヘドロは臭く重かった。包丁や釘など危険な物が出てきたので気を引き締めなければならないと思った。

３日目は家具、家電をトラックに積んだ。民家は海水が浸水した跡が残っていた。すれ違う人達から感謝の言葉をいただきもっと頑張らなければと思った。

４日目は土嚢袋を運ぶ仕事だった。周りを見渡すと、建物の上に車や漁船が横転して乗っている。まるで映画をみているようだった。

こんかいのボランティアでは本当に貴重な体験をできたと思う。自分自身、被災地である岩手出身なので、避難所にいる人が身近に感じた。

このような機会を作ってくれた大学に感謝します。

第５陣

４月１８日～２１日

参加学生　４３名

塚本　麻衣
吉岡　晃平
関根　偉智
小野　優太
川上　愛
佐藤　達也
糟谷　崇喜
下島　正誉
西　智之
村松　遼
太田　浩史
菊池　剛将
星野　彩佳
齋藤　華
佐藤　由佳
小牧　正宜
田辺　祐二
山本　和樹
松原　悠馬
荒牧　武志
佐藤　英樹
都　城治
井上　隼人
田之畑　李菜
森永　雅由
高橋　美穂
中村　俊貴
神林　那見
金子　翔太郎
高原　海
寺山　明穂
矢作　萌里
中山　開
小崎　萌
石切山　純一
飯田　俊祐
西川　博貴
松澤　勇気
藤田　香奈子
武田　彩
加藤　美圭子
中村　朱里
下田　優

体育学部体育学科　３年　糟谷 崇喜

僕は４月１８日～２１日まで宮城県石巻の被災地にボランティア活動をしに行きました。
１９日の午前中は、僕は石巻のお寺内で床下のヘドロを掻き出しをやり、午後からは墓地の整備を行いました。津波でかなり重い墓石がバタバタとなぎ倒されていて津波の威力をテレビではなく、生で実感しました。津波によりゴミも流されてきていて、その中にどこかの御家族の娘さんを撮った写真などもあり複雑な気持ちになりましたが同時に頑張ろうとも思えました。
２０日の午前中、僕は眼科の先生の自宅の清掃を行いました。作業は午前中で終了し、午後は昼食後、自衛隊のお風呂にも入ることが出来ました。
この３泊４日のボランティア活動で復興しつつあるし最知に少しでも貢献できていたなら嬉しいです。このような機会を設けて頂いたことに感謝します。

体育学部体育学科　２年　松原 悠馬

今回のボランティア活動に参加させてもらい、現地の状況を実際に肌で感じることができました。東北地方のこの時期の寒さは避難生活をやむなく送っている被災者にとっても、とても厳しいだということも感じました。
しかし、今回出会った被災者の方々は皆、前を向いて復興に向けて頑張っていました。自分は被災者の方に「頑張ってください」というのは絶対言わないようにしようと思いました。必死に頑張っている人に「頑張れ」っていう言葉はつらい言葉ではないかと思います。実際まだまだ復興に向け、手つかずの場所もあり、手が足りないと思うので今後もこのような活動がしたいと思いました。

体育学部体育学科　２年　荒牧 武志

ボランティアに行ってきて感じたことがいくつかある。行くまではテレビでしか見たことがなく、そこまでひどいものだとは思ってなかった。しかし、私が活動した所は海の近くではなかったのに自分の身長よりはるか上に波の跡があり、私はとても怖く感じた。また、今回のボランティアへ参加して私は被災者の方々の近くで過ごすことができ、自分自身がとても成長出来た。この体験を通じて自分自身にもっと厳しく生きていこうと思った。そして、少しでも被災者の方々の力になっていけるように自分のできる事を少しずつ実行していこうと思う。このように思えたのも３泊４日のテント生活で、電気が使えないでとても不便だったり、トイレが仮設トイレだったり、水が出ないなどといったことがたくさんあったからだ。少しでも節電や節水をしていこうと思う。被災地の復興が進み１日でも早く元の生活に戻れることを、私は願っています。

体育学部スポーツ医科学科　４年　塚本 麻衣

今回、志津川でボランティア活動を行った。被災者の為に少しでもできる事があれば、精一杯やろうという意気込みでボランティアに参加した。平磯地区ではまだ水道も電気も通っていないので、水汲みを何回も行った。蛇口をひねればいつでも水が出るという日常が当たり前に思い、改めて水道の大切さを知った。

初めてボランティアに参加し、経験したことで自分の無力さに情けなくなった。たった３～４日ではできる事も限られてくる。そしてほんの一部にすぎないことに今後どのような行動をすればいいのかということが課題として残った。また、被災者の方は、家や物も全部無くなっているけどそういうものだけではなく、計り知れないくらいに心に負担がかかっているのではないかと感じた。これから復興に向けて、海や山などの自然災害の避けられない現実を前にどんなことが出来るか考えていきたいと思う。

体育学部スポーツ医科学科　４年　関根 偉智

ボランティアを経験して、私達が行ったボランティアはごく一部分にしかありません。しかし、一人ひとりがこのように微力なことを短時間ではなく長期間にしていくことが重要だと感じました。

「一瞬」の頑張りは大切、「一生」の頑張りはもっと大切です。今後このような機会があれば、私は生まれ育った福島で少しでも力のなるようなことがしたいと思いました。今回のボランティアを通じて、救急救命士として働くにあたって一番気をつけなければいけないのは「言葉」であると改めて感じました。つらい、苦しい人たちに簡単に「頑張れ」とは言えません。すでに「頑張る」という域は超えています。傷病者を励ますにあっても、言葉を選んで行動していくことを心掛けたいと思います。このボランティアを通じて改めて様々なことを知ることができ、参加して意味がありました。

体育学部スポーツ医科学科　４年　川上 愛

一般ボランティアで行った平磯地区からの帰り道で土地が高い所の建物は普通なのに、低くなっている所はぐしゃぐしゃになっていました。ほんの少し高い所にいるだけでこんなにも運命が変わってしまうのだと思いました。本当に怖いことだと思いました。志津川の避難所では主に医療チームが多かったように感じます。仮設診療所もでき、その医療チームの人達の為にも、物資管理をするのも大切であり、役に立ててるといいです。４日間で帰ってしまうと思うとあっという間で足りないと思ったりもしますが、これからは現地でなくてもできる事やっていけたらいいと思います。

今回、災害支援ボランティアに参加して、実際の現場を目にし、悲しくなりました。しかし、現地のボランティアの人の前向きなところに勇気と元気をもらい、いろいろな体験をさせて頂き、とてもいい経験ができたと思います。ありがとうございました。

体育学部スポーツ医科学科　３年　村松 遼

今回の震災での死者は宮城県では９５％が津波による溺死というデータが物語っているように海沿いでの被害が甚大であった。活動拠点の石巻市では市街地は被害を探すのが難しいくらいで海側に向かうと被害の様子が伺えた。また、一部学生が活動していた南三陸町では比べ物にならないくらいで山を抜け、海沿いに出ると瓦礫しかない状況で本当に同じ日本なのか疑うような被害状況であった。

今回の被災者支援ボランティアに参加して４日間でできたことはとても少ない。目のあたりにした瓦礫の山を片付け、また新しく街を復興させるのは長い年月がかかるのは間違いないだろう。もう下をむいて歩く時期は終わった。ゆっくりでも一歩一歩前へ進んでいかなければ始まらない。そして私達は被害にあわれた方々と復興に向け共に闘い進んでいかなくてはならない。

体育学部スポーツ医科学科　３年　武田 彩

私はまず、２日目の午前の初めにはお寺内の道具等の汚れ落としをし、ある程度進んだところで床下のヘドロ除去作業を行った。その後にお墓の清掃に取り組んだ。午後は、お墓の清掃を中心にまずは通路を確保するための作業を優先して行われた。津波の影響で、海底のヘドロが通路や墓石に積もっていた。また、墓石が倒されて積み重なっていたので、ヘドロを除去するグループと、墓石を起こすグループに分かれて作業を行った。いくつかの場所を見ることが出来たが、その多くは元の姿かたちは見られず、被害の大きさを感じた。まったく異なった国を見ていたようにさえ感じた。この規模の地震が首都圏を襲ったとなると、倒壊する建物が多く、海岸線の工場も多い。この場合今回以上の被害が出るのではないか。この活動を通して、得られたものはとても大きかった。多くの人が現実味を持って、今回の東北太平洋沖地震に向き合っていかなければならないと、私は感じた。

体育学部スポーツ医科学科　３年　菊池 剛将

南三陸町志津川で活動をしました。今回自分は主に事務等の仕事しかできませんでしたが、少しでも被災地の方々の役立つことができ、本当によかったと思いました。実際に被害に遭われた方と話したわけでも、直接手を差し伸べてあげられたわけでもありませんが、あの場所に一緒にいて生活を共にしたことが重要ではないかと思いました。今回参加して、今の日本の被害の状況や現場で行われていること、被害にあった方々の今を見ることで、震災に対しての見方・考え方が大きく変わり、少しでも何か自分にできることは無いかとさらに考えるようになりました。正直、行く前までは状況を甘く捉えていました。しかし、実際に現地に入ることで生活を被災にあわれた方々と共にすることで辛さを体で感じ、さらには家や大事な物を失った日地たちはこれ以上の苦しみを味わっているのかと思うととても胸が痛くなります。少しでも何か自分にできる事を探すように日々精進することを誓いました。

体育学部スポーツ医科学科　３年　星野 彩佳

たった４日間しか現地にいることが出来なかったが、辛いことがいくつもあった。周りを見渡せば荒れた風景が限りなくあること。家がなくなり、職も失い、家族の安否が分からないなんて、私たちが被災者の方々の思いなどわかるわけないと思った。「分かってあげたい。話しを聞いてあげたい」と思う人も多いと思うが、被災者の方からしたら、「気安く言わないで」と思うことの方が多いのだろうと思った。

このボランティアで後悔したことがある。それは少しでも辛い顔をしてしまったことである。被災者の方々の前で辛い顔をするなど大変失礼であったと後悔した。自分のことしか考えていなかったと思う。次に機会があった時には被災者の方々を安心させてあげられるような笑顔でいたい。ボランティアを立ち上げてくださった先生方、大学院生の方、在校生の方、本当にありがとうございます。本当に被災地に行くことができて良かったです。

体育学部スポーツ医科学科　３年　齋藤 華

今回私がボランティアに参加した理由は、被災地の方々の役に少しでも立ちたいと思ったからです。また、救急救命士を目指す私にとって貴重な経験ができると思いました。当日は天候がすぐれず雪に変わり、テントの中で毛布にくるまり寝袋に入っても体の震え、温まらず眠りたくても眠れませんでした。地震や津波が来て家が流され、電気も使えない状況を想像すると本当に恐ろしいと思いました。志津川に向かう途中のバスの中から見た外は想像以上にひどいもので団地の屋上に車が乗っかっていた。あたり一面瓦礫しかありませんでした。あまりにもすさまじい画に言葉を失い、ボランティアの人たちの手がまだまだ必要だと強く感じました。日本中の人々が一つになって協力して日本を取り戻さなければいけないと思います。自分だけがボランティアに参加したからといって何も変わらないという考えは捨てて積極的に力を注ぐことがとても大切だと感じました。

体育学部スポーツ医科学科　３年　佐藤 由佳

１日目は７：００に永山駅を出発し、１４：３０に石巻専修大学に到着しました。２０：３０にミーティングを行いました。ミーティング内容はボランティアをするうえで大切な事、ブリーフィング（心構え）これから発生する事態について事前に意識合わせを行う事。デュフュージング（振り返り）トラウマなどとなりうる出来事を経験した人同士が互いを理解し合い、心にたまったストレスを処理すること。この内容を話し合った。

２日目はお寺で作業し、午前は床下のヘドロ掻き、仏像などの備品の拭き上げを行い、午後は引き続き備品の拭き上げと、墓地の整理を行った。

３日目は石巻から１時間半程、車で行った所の鮎川という所で作業しました。午前は消防団の署内の瓦礫の整理、資器材の仕分け、清掃を行いました。午後は体育館内の瓦礫、土などの除去を行いました。

体育学部スポーツ医科学科　３年　小牧 正宜

実際に被災地を目の前にしてただただ「茫然」としてしまいました。阪神淡路大震災や新潟中越地震などの大地震はテレビなどで目にしていましたが、今回このように被災地に足を踏み入れ実際に肌で触れてみて、地震、津波の怖さを実感しました。石巻にも私達以外に、多くのボランティアの方々がいて、復興に向けて着々と進められているようですが、それでも人手が足りない状況でした。

このボランティアを通して、絆の大切さを感じました。一人ひとりの力は小さいけれど、皆で力を合わせることで大きな力になるし、その力が周りの人々に勇気・元気といった形で分け与えることができる事を身を持って知りました。

この体験を無駄にしないように、そして少しでも早く被災地が復興できることを祈って、今後の生活を有意義に過ごしていきたいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　３年　藤田 香奈子

初日のミーティングでは、個人行動をとらない事、最低２人以上で行動すること。時間厳守など説明があり、翌日の活動場所は堂心寺というお寺に決定した。３日目に私達は眼科のおじいさんのお家にお邪魔しました。ドアが外れていたり、あちこちに泥まみれの瓦礫が散らばっていたり、壁には津波の跡が残っていて、悲惨な状況でしたが、みんなで力を合わせて作業したのであっという間に畳を撤去して部屋の掃除に専念できました。おじいさんやお手伝いさんの感謝の声をかけて頂き、とても嬉しく同時に複雑な気持ちになった。もっと頑張らなきゃいけないと思った。３泊４日のボランティア活動を通じてたくさん学ぶことがあった。水や食料の大切さ、電気がつかないとこんなに暗いんだなど。自分たちは３泊４日で東京に帰ってきたが東北地方では復興に向けてまだまだやることがたくさんある。そのことを忘れずに東京からできる事を見つけて実行していきたい。

体育学部スポーツ医科学科　２年　佐藤 英樹

私は今回４月１８日～２１日の間、東日本大震災で被災され被害の大きかった宮城県石巻市にボランティアに行きました。被災地に着くと、テレビ等報道で見ていた風景を生で見ると言葉を失いました。正直な話、大震災から１ヶ月経っていたのでほとんどの瓦礫は撤去されていると思っていてのですが、瓦礫の山となっている街をみて驚きました。泥の撤去作業では、お寺の床下に入り狭い所の作業で、２０人くらいで行いました。ほとんどの作業がチームワークという形であり、みんなと力を合わせて行った。全身ヘドロになり、最初は苦痛であった。被災者の方々を思うと弱音は吐けないと思い、自分たちが少しでも、役に立てるならと活動を続けた。海岸から１Km 離れている所でも被害が大きく、自分の方ぐらいまで水が来ている跡があった。

東北が１日でも早く復興できたらと思います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　都 城治

１９日夜から朝にかけての雪、寒さがひどく耐え難かった。作業はお寺がメインで午前は床下にもぐりヘドロの掻き出し、午後は墓地の清掃だった。床下はヘドロが水を含んでいた為、臭いが強く重いので運ぶのも一苦労。墓地は数百キロの墓石の撤去に苦労した。しかし、ヘドロは数日の晴天で岩のように固く圧縮されていたので運びやすかった。あたり一面、頭のないお地蔵さんや割れた墓石等の異様な光景に足がすくみ、墓地に入るのに躊躇した。高齢の被災者に話しかけられ体験談を聞くことが出来た。自宅の２階の天井の３０ｃｍの所まで水が押し寄せたという。それも引き波の方が強かったそう。最終的に泣きそうになりながらボランティアの方に感謝していると伝えてくださった。津波の恐怖を感じた。いまテレビ、世間では地震津波は終息ムードが流れ始めているが、現地の人々にとっては、今も津波は続いていて、これからも心から消えることは無いのだなと感じた。

体育学部スポーツ医科学科　２年　井上 隼人

１日目は移動だけで終わりました。仙台に近づくにつれて景色が変わってきて、畑とかが瓦礫ですごいことになっていました。石巻についてまず、驚いたのが臭いがすごかったです。夜はすごく寒くて驚きました。２日目はお寺の掃除に行きました。自分たちのグループは床下に入ってヘドロの掻き出しでした。床に入ってみるとヘドロだらけで柱にもこびりついていてそれを一生懸命とりました。３日目は鮎川という所に行きました。石巻よりも津波の被害がすごくてびっくりしました。体育館の瓦礫の撤去もしたのですが、瓦礫がありすぎて大変でした。また、魚の死骸が一緒に流れてきて臭いがきつかったですが、少しは瓦礫除去ができて良かったです。最終日は、志津川に寄り、すごい状況でビックリしました。最後にこのボランティアに参加できてよかったです。実際に行くことで本当に津波の怖さを知れたし、自分がしないといけない事もわかってよかったです。

体育学部スポーツ医科学科　２年　田之畑 李奈

宮城県に入ってすぐ名取市に広がる残骸が広がっていた。

２日目、海から１００ｍ程離れたお寺での清掃作業。津波の跡が壁に２，３ｍ残っていた。前にあった「牛角」は手を付けられない程。お寺にて、１階は浸水し、２階への階段も半分浸水。壁板のはがれ具合やお墓の倒壊の様子から想像以上の津波の凄まじさだと思う。

３日目、２班に分かれて作業。お茶の先生をなさっているお宅の畳や冷蔵庫運び。海から離れた道の中で船を発見。つぶされた車からも津波の凄まじさがみられる。

４日目、南三陸町にて、山の中に海の物、三階建てのマンションの屋上に車。何もない町、煙が立ち、川も本来の姿はなく、空も暗かった。この町は何十年経てば人が住めるのか？信じられない広範囲に広がる瓦礫と人気の感じない町。言葉が出なかった。

体育学部スポーツ医科学科　２年　森永 雅由

今回のボランティア活動に参加してみて、僕が思ったことは、本当に自然の力は恐ろしいものだと思いました。今回初めて目のあたりにした津波の被害を受けた地域は波によって建物が跡形もなく流されていた。また、形はあってもほとんどが崩れていました。家だけではなく車や船が形を失って道に打ち上げられていました。僕は被災地に行ってみて感じたことは、瓦礫を除去するにはまだまだ時間がかかるし、復興するには相当の時間、人の手、お金がかかると思いました。だからこそ日本中が一つになって被災地に対して何らかの協力が必要だろうと心の底から思いました。僕は３歳の時に阪神淡路大震災を経験しましたがあまり覚えていません。ですがきっと支えてくれた人たちがいたはずです。だから僕も、まだ僕ができることで何か被災地に協力できる事があるのなら協力していきたいと思いました。

体育学部スポーツ医科学科　２年　高橋 美穂

東北に行くのは初めてだったので、７時間かかるとは思いませんでした。１４：３０頃に専修大学に着きました。来る途中、宮城県の道路は割れて、凸凹している所が多々ありました。田んぼなどにも、木の破片や車があり、１ヶ月以上経つのに、全然進展していない様子に驚きがありました。

町を見て、言葉を失いました。家も土台しかなくて、人もいなくて、ただ瓦礫が続くのみでした。１ヶ月経ってもこのような状態で、どこからもとに戻していくのだろうと、気が遠くなりました。

もし、これが自分の住んでいる所だったら、私は普通の精神状態ではいられないと思います。どのような街か想像がつきませんでした。私もこれからはできる事を精一杯して、東北の力になりたいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　中村 俊貴

4/１８より学生支援ボランティアが始まった。この日はほとんどが移動になり、作業は行われなかった。夜のミーティングにおいて先生より災害における活動において必要なものを教わった。まずどのような作業にあたるか話し合うブリーフィング、その日の活動内容をみんなで話し合うデュフュージング、全ての作業を終えてから話し合うデブリーフィングの３つであった。津波の被害をみて、感想は想像以上だった。この日は４月にも関わらずに雪がふり、とても寒かった。

今回の被災地に行ってみて、この震災の被害が震災前と同じになるには何年も何十年もかかると思った。そして、瓦礫の山を見た際に、最初は言葉が出てこなかった。それほどまでに今回のしんさいの影響は計り知れないものだった。被災地には継続的な支援、早期に瓦礫を撤去することが出来れば復興は早くなると思った。

体育学部スポーツ医科学科　２年　神林 那見

１９日の活動内容はお寺で外に出されていた備品などを一つ一つ洗う作業を行った。住職さんと会話をしていく中で一週間前に買ったばかりの高額のオーディオが流されてしまい、自分の大切な物全てが台無しになったというお話を聞いて、わずかに残された住職さんの大切な物をまた使えるように一つ一つきれいに洗っていきました。ミーティングが終わると天候が悪化し雪が降ってきました。就寝の時間になっても、テントが潰れそうで心配でした。テントの中にも水が入ってきてしまい結局この日は眠れなかった。

今回のボランティアに参加してみて、想像以上に現地の状況はひどいものでした。震災から１ヶ月がたっているのにかかわらず変わらない街並み、家に帰りたくても帰れない人、一人一人いろいろな思いを抱えている人達がたくさんいる中私達が行ったことは小さいことだと思いますが、今回このような体験をさせて頂いた大学の先生方には感謝しています。

体育学部スポーツ医科学科　２年　高原 海

海に近づくにつれて被害はひどく、臭いもひどかった。

夜になると大雪になり、気温もかなり低くなった。

１９日はお寺のヘドロ除去が仕事でしたが現場に着いたときヘドロの臭いがすごくマスクをしていないと辛かった。

２０日は石巻の眼科の瓦礫除去と鮎川に分かれて作業を行った。瓦礫以外でも家電や魚の死骸があり、他とは少し臭いも違っていた。

２１日は、墓地の清掃。ほとんどが倒れていて、どの石がもともとどこの墓にあったかわからない状態でした。

２日目の夜に一日降っていた雨が雪に変わり、大雪になりました。テントが潰れるというアクシデントもありましたが何とか夜を乗り切ることが出来ました。

体育学部こどもスポーツ教育学科　２年　寺山 明穂

３日間作業してわかったこと、それは「人の手が足りない」ということ。いま必要なのは支援物資でもお金でもない。「膨大な数の人の手」である。約３０人で１日１軒の半分しか綺麗にすることが出来ない。作業中にも声をかけられたが決められた場所しか作業できない。悔しかった…。助けてあげたくても作業時間、滞在日数は決まっている。帰るのが申し訳ない気持ちになった。

被災地ボランティアに参加してよかったと思う。被災地に立ち自分の目で見て、肌で感じて、テレビでは違う小さなことを見つめることが出来る。テレビでは流さない小さな言葉１つ１つを聞くことが出来る。体全体で体験したたくさんの事や感じたこと。その思いをこれから少しでも多くの人に伝えていくことが私のこれからできる事であると思う。

がんばろう日本。はやく被災地が復興することを日々願う。

体育学部こどもスポーツ教育学科　２年　矢作 萌里

１９日は一心堂（お寺）の掃除。お骨入れを雑巾で拭いたり、お風呂、廊下の泥だしをした。拭いても拭いても砂がたくさん出てきた。外で働いているおじさん達から「本当によく働いてくれるね！感心した！本当にありがとう！」と声をかけてもらえてとても嬉しかった。お寺の住職さんも笑顔で話しかけてきてくださって、災害にあってとても大変なのにすごく前向きな方だと思った。私も被災地の方々に元気を与えられるようにもっともっと頑張ろうと思う。２１日に志津川に行き、どこから手を付けたらいいかわからない。ひどい。そんな言葉しか出てこなかった。テレビを通してみるのと、実際に見るのとでは本当に全然違った。あまりのひどさに目をそらしたくなったが、ボランティアの私達が暗くなってはいけない。被災地の方々を勇気づけなくてはいけない！そう感じた。今回だけでなく、引き続き宮城、福島のために積極的に活動していきたいと思う。

体育学部こどもスポーツ教育学科　２年　中山 開

今回被災地ボランティアで私は災害に対する考えが大きく変わった。今まで様々な天災が日本を襲いそのたびに報道された情報を見たりして、報道によって被災地の現状を経験したような気持ちになっていた。今回の東日本大震災も毎日のようにテレビで報道され、酷い状況だということは分かったが、本当の大変さや辛さを理解することはできていなかったのだ。しかし、そのような悲惨な状況の中でも人々は時に笑顔を見せ復興に向けて精一杯努力していた。街中を歩いていると元の暮らしに戻りつつあるということが分かった。今回のボランティアで私は、想像を超える被災地の被害の大きさや現状を少しだけ知ることが出来、自分の小さな力でも被災された方の力になれるということを実感することが出来た。今後このような災害が起きた時には今回の経験を生かして、復興支援に参加しようと考えているとともに、東日本大震災も今後長期的に支援が必要なので、できる事をやっていく所存である。

体育学部こどもスポーツ教育学科　２年　加藤 美圭子

この４日間、天気は悪く夜は雨や雪が降り、とても寒くテントが潰れそうで、正直つらかったです。しかし、被災者の方達はもっとつらい思いをずっとしていると考えると、４日間という短い時間しかお手伝いすることが出来ない私は、とてもちっぽけだなと思い、胸が痛みました。テレビを通じて見る事のできなかった世界を、自分の目で見ることができて、改めて自分の住んでいる世界、いつもと変わらないも日常がどれだけ幸せな事か感じました。帰り際に通った志津川の町は、言葉がでないくらいひどい光景でここで何人の人が命を失い、海に放り出されたのかと考えると涙が出そうになりました。良い経験でしたと言ったら被災地の方に失礼かもしれないけど本当に色々考えさせられるいい機会でした。早く皆さんに普段通りの生活や幸せが戻ることを心から願います。そして、この経験をたくさんの人に伝えていきたいと思いました。

体育学部こどもスポーツ教育学科　２年　下田 優

今回、４月１８日～４月２１日まで宮城県石巻市に赴いた。それは東日本大震災によって被災した地のボランティアをするためだ。被災地に行くことに家族もみな賛成してくれた。このような経験ができるのは今だけだとも思った。事前準備にてこずった。すべてが初めてだからだ。

このボランティアを通して一番感じたのは途方に暮れる作業でも現地の方々の前向きな考え方を見ていると、不可能はないんだなと感じて頑張りきることが出来ました。ただ、このたった４日間の作業で何を語ることもできない。現地がもう何日もあの状態であるのに何をしに行っていたのかと自分を責める気持ちも出てきました。だけど、僕たちが病んでる場合じゃないとも思いました。だからこの経験を生かして生きていかなければ必ず後悔すると思いました。このことを心に刻んでこの先、生きていきたいと思います。

体育学部こどもスポーツ教育学科　２年　小崎 萌

現地に行って思った事は今本当に求められているものは、この瓦礫や家、車をどかすための、そして一刻も早く行方不明者を見つけるための人であることを強く感じた。石巻専修大学にも全国各地からボランティアが来ていた。それでも全然足りていない。ボランティアの数と被害を受けている地域や人の数が合っていないのだ。3 泊 4 日という時間の中で私は少しでも役に立てたのだろうか？これで満足してはいけない。小さな支援だったかもしれないが、これを途絶えることなく続けることで少しでも光を見出すことが出来たらと思う。このボランティアで感じるものは本当に大きかった。特に強く感じたものは、現地の人の心の強さ。誰よりも強く強く生きていて温かかった。それでも助けを求めていた。口には出さないが心で訴えていた。明るく接してくれ、「ありがとう」と声をかけてくれる現地の方々がいた。その人達のために、私達はもっともっと手を差し伸べなければならない。

体育学部こどもスポーツ教育学科　２年　石切山 純一

石巻で現場に向かう途中、津波の被害にあった所に入ると風景が一変した。あちらこちらに瓦礫の山があり、多くの建物は原形をとどめておらず、港にはとても大きな船が陸に打ち上げられていて驚くことがたくさんあった。最終日は半日しか作業ができなかった。まだまだやることが残っているようで帰るのが申し訳なく感じた。帰りに志津川へ行ったが石巻より被害の大きさが目に見えるほどで、建物もほとんどなく遠くまで見渡さるほどだった。今回参加して思った事は、ボランティアの人手が全然足りないという事、食糧もいいものは食べることはできなく、１ヶ月経っただけではまだまだで作業もおおくが途方に暮れるような作業ばかりであった。でも、被災地の人は復興しようとずっとこの作業で続けてきたと思うと安全だった自分達がもっと協力して頑張らなければと感じた。

第６陣

４月２１日～２４日

参加学生　４２名

田口　興輔
齋藤　愛美
藤井　円
吉岡　晃平
岡田　和貴
堀　文哉
小野　修平
八巻　征爾
高橋　瞭歩
岩崎　明子
飯岡　実帆
関　恭祐
冨岡　祐介
近藤　みずほ
鈴木　太智
宮崎　茜
宮園　宏行
平林　悠
岩崎　有秀
山崎　将太郎
平沼　真衣
宮下　勇歩
上田　月花
杉本　勝太
加藤　陽
奥村　穂乃美
和田　瑞穂
松下　弘樹
戸澤　晴香
中里　力
石川　剛
佐藤　達也
越野　大輝
岡村　龍樹
斎藤　啓太
渡辺　真悟
野口　良
田中　佑弥
渡辺　実
金城　万里菜
飛谷　佑太朗
岩崎　全孝

体育学部スポーツ医科学科　４年　渡辺 実

震災から１ヶ月以上経ち確かに少しずつではありますが、復興に向かっているのを感じました。しかし、その復興には１年、２年の話ではなく、何十年もかかる話なんだと、まだ震災後のままの状態の建物を見て痛感しました。４日間被災地で生活しただけでも正直、辛いと思うこともありました。地域の住民の方々がお礼を言ってくださったり一緒に活動をして下さったりしているのを見ると私たちがやっているボランティアは小さな事かもしれないけど参加して本当に良かったと思いました。また、このボランティア活動で１番感じたことは今、被災地の生活レベルと私達の生活レベルがあまりにも違います。私達は震災が起こってもいつもと変わらない生活を送っています。本当に被災者の方々には申し訳ないと思います。だからこそ毎日普通の生活ができる事に感謝して自分たちの今できることをできる時にやればいいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　４年　岩崎 全孝

４月２１日～２４日まで宮城県南三陸町志津川へボランティアとしていきました。
被災地が近づくにつれ道中は悲惨な事になっていました。志津川では電気や水道、風呂などのライフラインはある程度整っていました。２２日僕は一般ボランティアに参加しました。僕は被災者の方達の写真やアルバムなどの洗浄、乾燥等を手伝わせてもらいました。泥がすごく付いていたりインクがはがれたりしたので大変でしたが丁寧にやればこんなにきれいになるのだとすごく驚きました。２３日も一般ボランティアに行きました。避難所へ行き、段ボールから棚を作る作業をしました。１日で５箱完成し、うち２箱は僕たちが作りました。そして箱の裏に何か書いてほしいと言われたのでメッセージと名前を入れて渡しました。あっという間の４日間でしたが、テレビや新聞などではわからない事を今回のボランティアでたくさん学べました。

体育学部スポーツ医科学科　４年　金城 万里奈

今回は一般で色んな方と話す機会があり、多くのことを考えさせられた。炊き出し班は一般ボランティアではなく、被災者の方自身で行っており、皆それぞれ苦労しているようだ。その中でも班長さんが「皆辛いけど、食事の時くらいは暗い顔したくない。だからここにいる炊き出しメンバーは楽しくやりたいと思っている。」とおっしゃっており、外部からくる私達はもっと明るく頑張らなきゃいけないと思った。棚作りは、試行錯誤しながらの作業で出来上がった時の感動はとても大きなもので、物資管理をしている被災者のリーダーの方にとても喜んでいただけた。「記念にサインでも書いていってください」といわれ、一緒に作ったメンバーと共に、メッセージ等を棚の裏面に書かせて頂いた。「夏になったらぜひまた歌津へ足を運んで今の避難所がどうなっているかを見てみてください。」と言われ、今よりきっといい状態になっているはずという期待とまだまだ復興には時間がかかるといわれていることの不安、両方が入り混じった。

体育学部スポーツ医科学科　４年　飛谷 佑太朗

４月２１日、自分達を出迎えた光景はテレビや新聞で見たものより想像を遥か超えたものだった。無残な瓦礫の山と大破した車や港から流されてきた漁船、鉄骨のみとなった建物が自分たちを迎えてくれました。活動場所に着くとそこには、各県の災害支援の車や自衛隊の重機等があり、支援の規模の大きさに驚きました。４月２３日、この日は学生３人で一般ボランティアに登録して、そこで段ボールから棚を作る作業をしました。志津川に戻った時、たまたま近くにいた人の話し声が聞こえ、「被災者はだんだん助けられていることに慣れてきている。自分では何もせず、出された食事を食べてやることがないから寝るだけ、全てボランティアや自衛隊、消防に任せてばかり、これではまるでイヌじゃないか」たくさんの人が被災し、たくさんの人が支援する。被災者はこの悲しみを忘れてはならず、支援された感謝を忘れてはいけないとこの人は言いたかったのだと思います。

体育学部スポーツ医科学科　３年　堀 文哉

１日目、１４：００頃に石巻専修大学に到着する。２日目の活動は「渡波」という場所で、作業内容は瓦礫や腐った魚やイカの撤去との説明を受ける。

２日目、水が深い所があるようなので、作業着の上からレインコートを着る。安全長靴も着用した。瓦礫を撤去し、下から出てきた腐敗したイカなどを土嚢袋に入れ、トラックに積み込む。腐敗したイカは港に持っていき、処分してもらう。３日目は市役所班と渡波班に分かれて活動。

３日目、焼き鳥通りに着き、そこから徒歩でお寺の周りに向かう。細かいゴミや木材を大きい土嚢に入れ、トラックで運び出す。

４日目、荷物などをまとめる。テントをたたみ、テントなどの資材をトラックに積み込む。バスにて志津川に向かう。永山駅に到着し、解散。

体育学部スポーツ医科学科　３年　中里 力

渡波というとこの住宅地の瓦礫除去。道だとは思えないくらいの瓦礫がありその中にはイカの死骸が混ざっていて異臭がすごかった。作業している途中、近所のおじさんが支給されたラーメンやパンを私たちにくれた。自分たちが大変な状況なのにボランティアにも気を使ってくれる心の温かさに感動した。

この大災害が起こり自分には何ができるか考えた時、義援金や節電といったことしか出来ない人がほとんどだと思います。そんな中このようなボランティアの機会が与えられて、私は行くしかない、被災地の人のために何かしたいと思い参加しました。テレビとは違い、実際に現状を目のあたりにすると様々な思いがこみ上げ元通りになってほしいです。そしたらまた石巻に行ってみたいと思います。

このような貴重な機会を設けてもらい、ありがとうございました。

体育学部スポーツ医科学科　３年　石川 剛

石巻に行く途中、宮城県の色々な土地を見ながら高速道路を走っていたが、トンネルを抜け、山の向こう側の海沿いに行くと、こんなにも違うのかということに本当に驚いた。ある所では普段と変わらないような風景、ある所では見渡す限り広がる瓦礫の山。同じ県でもここまで違うのかと心が痛んだ。しかし、そんな中でも笑顔で会話をしていたり、力を合わせて瓦礫の撤去作業を行っていたり、誰も下を向いている人などいないと感じた。
テレビでは見られない現地の隅々まで見ることができ、実際、元の生活に戻れるまで、何年あるいは何十年かかりそうな程ひどい状態だった。しかし、日本全体で力を合わせボランティア活動を行っている。現地にもいろいろな県から来ているボランティアの方がたくさんいた。自分たちは短い期間だったが少しでも力になれていればいいなと思う。

体育学部スポーツ医科学科　３年　佐藤 達也

私がボランティアに行ったのは、宮城県石巻市です。渡波という町に行かせてもらいました。テレビでは味わえない深刻さを味わうことができた。今回の活動は２日間だったが、その中で私が一番心打たれたのは被災地の人の心の温かさだ。初日の渡波でゴミ置き場として家の庭を提供してくれたおじさんが特に感動させられた。私達が作業していたら「そんなに慌ててもしょうがないよ、ゆっくりでいいよ」と言ってコーヒーを入れてくれた。お昼の時間には「食べていってね」と言って１０人分位あるラーメンを作ってくれたのだ。ボランティア説明会とかでは、真逆の事を聞いていたので本当に感動した。こういう事もあって本当に頑張れた。ボランティアに行った４日間でテレビや新聞では感じ取れないものもたくさん感じ取れたので、ボランティアに行って良かったです。
今後この体験を少しでも生かしていきたいと思います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　飯岡 実帆

今回私は第６陣で被災地ボランティアに行きました。ボランティアをしたいと思ってもできなく現地での活動を断念している人が多い中、このような機会を与えてもらい本当にうれしく思います。３日目に行った中央はたくさんの人達の力が繋がり、町への復興へ近づくんだということを思いました。たくさんの人達と関わることができ、色々なことを知ることができました。正直抱えているものが重すぎて、何と声をかけたらいいのか分かりませんでした。ありがとうね！と言われた時は何とも言えない感情が生まれ、泣きそうになりました。これは映像で見ることもできないし、伝わるものでもない、現地に行ったからこそ伝わったのであると思いました。被災者の方々は笑顔を見せてくれる。けどその裏には私達が想像するそれ以上の辛いものを抱えているのを忘れてはいけない。もし、私が被災者側だったらどうなっていただろうか。この３泊４日を忘れてはいけない。

体育学部スポーツ医科学科　２年　関 恭祐

１日目、１３：３０頃に石巻専修大学に到着。この日は活動を行わなかった。

２日目、この日は石巻市渡波の住宅地にある道を開通させるという作業であった。走路は浸水していたため足元が見えず非常に危険な状態であった。開通させる道は、津波で流されたものや瓦礫が山積み状態で本当にここは道なのかと思ってしまうほどだった。３０m程ある道の半分ほどしか片付けることができなかった。

私が被災地に行ったときは、地震と津波から１ヶ月以上が経過していたが、全然片付いていないという印象を受けた。環境や公害の問題があるのかもしれないがゴミを分別していたら復興する以前に片づけが終わらないし、そうしている間にもまた地震が起こる可能性もある。さらに１ヶ月以上たってもほとんど手を付けていない場所があって、全体的にマンパワーが不足している。誰も悪くはないがこのままでは絶対にいけない。完全に復興するまで確実に長くなるけど、被災地の方には希望を持って頑張ってほしい。

体育学部スポーツ医科学科　２年　冨岡 祐介

復興作業が行われていない住宅地の瓦礫撤去を中心に行った。あたり一面瓦礫の山で言葉も出なく、最初はただ立ち尽くすしかなかった。

トラックや車、家のブロック塀がいとも簡単に飛ばされていて、津波のすさまじさを改めて感じた。

現地の人と会話やふれあいはできなかったけど、人の優しさやぬくもりを感じることができた。生活物資や食べるものも温かい物も少ない状態で生活をされているが、今回のボランティアはテントで寒い思いをしながらの生活だったが、こういった生活を今もしている人がいると肌で感じた。

今回のボランティアで二度とできないかもしれない体験をたくさんさせて頂き、とても感謝しています。

体育学部スポーツ医科学科　２年　近藤 みずほ

２１日、石巻キャンプ地に到着。ボランティアが大勢いた。来る途中で見た、流され粉々のなってしまった建物とは違う大学校舎にまだ実感がなかった。

２２日、この日の作業は民家の間の細道を開ける事。家から出された家具や衣類、食品と流れてきた大量のイカと泥の撤去をした。４０日以上放置されたイカは原形をとどめておらず、ぐちゃぐちゃしていた。帰りの車の中ではあの環境で暮らす人、今回の津波のひどさを考えることしかできなかった。

２３日、前回やっていた寺を引き継ぎ作業。家電の回収、ヘドロの撤去を行う。作業中によく人に会い、挨拶をすれば、大半は「ご苦労様です」と頭を下げられた。外国人ボランティアも行動し、日本がいかに世界から助けられているか実感した。私は、ボランティアでつながりの大切さを改めて認識することができた。

体育学部スポーツ医科学科　２年　鈴木 太智

いまだかつてない大災害で被害にあわれた方々のほんの少しでも力になれればと思い、参加を決意しました。現地では２日目と３日目に本格的に作業を行いました。他のボランティアには若い人、お年寄りの方、外国人の方など様々な人が参加していました。

この活動を通して私は、「人の優しさ、強さ」を強く感じた。そして人を思いやる気持ちを石巻の方から学ばせて頂きました。私は将来地元である岩手の消防局に就職したいと考えています。その時までに一生懸命勉強をし、人を思いやる事のできる立派な人間、救急救命士になって東北の方に恩返しをしたいと思います。

被災地の方の事を思うと今も胸が締め付けられるような思いになります。東北の早期復興を願い、また協力できればと思います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　宮崎 茜

仙台市に入ってからバスの中から見た光景はとても衝撃的でした。田んぼや畑には瓦礫が散乱していて、道も通れなくなっている所が多く見受けられ、このような所で作業することに恐怖を覚えました。石巻市渡波でのメイン道路の泥かき、瓦礫の撤去が主な仕事でした。物が散乱していて、大きな木材などが多くてなかなか進まなくて大変でした。作業する途中に被災者の方に「この先に自宅があるからなんとか道を通してほしい」と言われ私たちの小さな力でも頼りにされているんだなと実感しました。被災者の方にたくさん声をかけてもらいました。その中でも印象的だったのは、小学生ぐらいの子が配られたお弁当やペットボトルをいくつも運んでいるのを自分の弟と同じくらいの子だったので、とても感じるものがありました。地元の方達は本当に元気だったし、とても明るく接してくれて何度も「ありがとう」と言ってくれました。でも、逆に私たちの方が勇気や元気をたくさんもらって「本当にありがとう」と心から伝えたいと思いました。

体育学部スポーツ医科学科　２年　越野 大輝

私たちが作業していた場所は水産所に保管されていた大量のイカが一か月以上経ち全て腐り、そのイカが散乱していた物の下敷きとなっていた。物をどける度に強烈な臭いが襲ってきた。２日間かけて撤去作業を行い、重機が入れるほど片付けることができた。私達の力で少なくともその道路に面している家の方の役に立つことができた。

３泊４日でボランティアに励んだが衛生面は最悪だった。被災者の方々はこの何倍も厳しく辛い生活をすでに１ヶ月以上過ごしていると考えると今の暮らしのありがたさや便利さをこの身をもって感じることができた。私たちが生きていく中で最も大切な命について広くそして、深く知ることができた。

今回のボランティアは命を考えるうえで必ずこれから人生の糧となるだろう。

体育学部スポーツ医科学科　２年　宮園 宏行

私はボランティアに国士舘大学の学生として参加しました。１日目は作業せず、翌日からの作業に備えました。

２日目はまだ道が瓦礫や泥で塞がっている所に行きました。近くにイカの加工場のようなところがあったらしく、１ヵ月間放置された生のイカが悪臭を放っていました。

３日目、前日とはまた違うところで活動をしました。ここの状況は道が塞がっているということはありませんでしたが、山のように積まれた瓦礫がまだ大量にある状況でした。その瓦礫の撤去を行いましたが、とても１日で終わる量ではありませんでした。

４日目、今回で石巻専修大学にベースキャンプを置いた活動は終了するということで、この日はテント等の片づけを行いました。

体育学部スポーツ医科学科　２年　平林 悠

宮城県石巻市に行き、ボランティア活動をしてきた。活動内容は、地震の影響で道が瓦礫で塞がってしまっているので、それを除去する作業だった。そこの場所だけでも瓦礫の山でたくさんの量だった。その中には１人では運べない大きい物やコンクリートまでも瓦礫の中に含まれていた。そのため、トラックまで運ぶのはなかなか大変だった。近くに市場があったらしく、津波や地震で道路にまでイカが流れてきて、そのイカ処理をする時の臭いが今までにないくらいの臭さでした。自分達は、普段と変わらない生活をおくることが出来ているが、被災者の方達は、まともな生活が送れていない事を考えると、心苦しく思った。さらに、志津川に向かう途中にほとんどの家が壊れていて残っている家がほとんどないという状態だった。４日間という短い期間だったが、被災地の現状を知ることができてよかったし、ますます被災者の方達のために支援していきたいと思った。

体育学部スポーツ医科学科　２年　岩崎 有秀

４月２１日、宮城県石巻市にある専修大学に到着。

４月２２日、活動場所は家と家の間の路地に山積みになった瓦礫を除去するのが今回の活動内容だった。正直どこから手を付けたらいいかわからないくらいの瓦礫の量であり、何より「臭い」が活動の妨げとなった。木材や瓦礫を除去していくうちに腐ったイカが何千何万とあちこちに散らばり大量の蛆虫もわいている状態だった。通路の面影すらなかったが、約９時間の作業で地面が見えるようになった。

４月２３日、瓦礫撤去班として活動し、前日と比較するとほぼ通路としての姿を取り戻したため、泥や小さな瓦礫を土嚢に入れる作業を行った。作業開始直後より、別のボランティア団体の重機に協力して頂き、一段と作業効率が上がった。重機搬入により人間の作業に限りが生じたため、早めに終了した。翌日に永山で解散した。

体育学部スポーツ医科学科　２年　山崎 将太郎

活動内容は主に住宅地の瓦礫除去。
現地の状況は市街地は壊滅状態。特に沿岸部は家がほとんど流され、被害は甚大だった。
ボランティアの感想は、実際に現場に行って被災地を見てみると、津波による被害の大きさが分かった。海によって流された家や車、泥は大量にあり、車でも前に進めない状態だった。やはり、最初は人の手で少しずつ作業していくしかなく、非常に時間のかかることだと感じた。
いま、一番現地にいる被災者が求めているものは、人の力だと思いました。
現地で作業してくれる人が、いま、一番必要なものだと思います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　野口 良

私は茨城県に住んでいるのですが、こんなに近い場所で津波や原発の被害があることを改めて感じました。私の住んでいる地域は、それほどの被害を受けていません。今も何事もなかったように暮らしている人もいるでしょう。すぐ近くの人々が苦しんでいることに少しギャップを感じました。宮城県でも場所によって被災状況が異なり、悲しさが増しました。今回私たちが活動したのはたった２日間程でしたが、私は大変疲労を感じました。被災者の人々はもう１ヶ月以上この状態で生活しているのに本当に必死でした。
復興するのにいつまでかかるかわかりませんが、日本全体で東北地方を支援して、少しでも早く復興することを願います。

体育学部スポーツ医科学科　２年　平沼 真衣

第６陣で宮城県石巻市に行ってきました。今回のボランティアで、今までテレビで見ていた世界を生で見るという経験は私にとって大きな財産となりました。テレビでは瓦礫除去の光景が多く放映されていますが、実際はもっと酷い現実が広がっていることを実感しました。１１日に地震が起きてから、とても心が痛く、何か自分でできる事がないかと毎日悩みながら、家に引きこもり夜も眠れない生活をしていました。しかし、今回のボランティアに参加したことで、自分がやったことは本当にごくわずかな力にしかなれていないと思いますが、実際に現地に行けたこと、少しでも力になれたことはこれからの自分の人生に大きな影響をもたらすと思います。また、被災地に行くことを快く了承してくれた家族にとても感謝したいです。風評被害、原発問題もあったりして復興にはかなりの時間がかかると思いますが、日本全体で乗り越えられたらいいです。

体育学部スポーツ医科学科　２年　上田 月花

今回のボランティア活動に参加させていただいて、津波の恐ろしさを知った。たくさんの人や動物が飲み込まれ、命を落とし、誰かが亡くなった場所を歩くのはとても悲しく辛かった。瓦礫の撤去作業をして、自分が思っていた以上にたくさんのことを考えさせられた。被災地の方ほどではないが、心に突き刺さる事がいくつもあった。ボランティアは生半可な気持ちでやってはいけないと思う。そしてボランティアに行って終わりではなく、ボランティアに行った人は被災地のありのままの姿を周りの人に伝えるべきだと思う。震災から１ヶ月以上経った今でさえ、被災地の状況は改善されていない。このことを多くの人に伝え、支援の輪をさらに広めるべきだと私は思う。最初は不安だったが、勇気を出して応募してよかった。これからはこの経験を自分の勉強に活かして頑張りたいと思う。そして、これからも何らかの形で被災地の支援を続けたい。

体育学部こどもスポーツ教育学科　２年　杉本 勝太

今回、私は初めてボランティアとして宮城県石巻市にいって、とても貴重な体験をすることができました。石巻市に入っていくと、テレビで見るより明らかに悲惨な状況になってしまっている景色が広がっていました。車がボロボロになってひっくり返っていたり、船が転がっていたりして、津波の恐ろしさというのを感じました。これからボランティアの活動が始まると思うとやる気もあった反面、ご遺体を見るかもしれないという等の恐怖心もありました。

私はこの３泊４日で普段の生活がどれだけ満ち足りていて素晴らしいものなんだろうと感じることができました。しかし、今日も家がなく疲れきっている人々がいるので節電などしていかなければならないと思いました。また、このような事をやる機会があったら、積極的に参加していきたいと思います。

体育学部こどもスポーツ教育学科　２年　加藤 陽

私は第６陣にて４月２１日～２４日の期間で宮城県石巻市に行き作業を行いました。

２３日の夜中に強風と豪雨に見舞われ、テントが雨漏りをおこし、大変な目にあいました。

私は、今回初めて被災地ボランティアに参加してとてもたくさんのことを感じ、学ぶことができました。復興の手伝いをすることで、自分自身の考え方が変わったこと。自分の目で見たこと感じたこと、被災者の声を周りに伝えたいと思うようになりました。

また、被災地でたくさんのボランティアの車を見ました。大阪や愛媛や山梨など全国各地からの被災地のために集まっていて本当に日本は１つのチームなのだと私は感じました。

こんなこと感じたので私はボランティアに行けて本当に良かったと思いました。また、募集があれば私は絶対参加したいと思います。

体育学部こどもスポーツ教育学科　２年　和田 瑞穂

私は６陣でボランティアに参加しました。２日間とも雨が降っていたため臭いが増したり、衣類がさらに重くなったりと晴れている日よりも体力と気力が重要でただひたすら黙々とやることで精一杯になり、たまに訪れてきてくれる町内の人や作業場所の近くの住んでいる人に挨拶はしたものの「声をかける」ということができませんでした。

ライフラインが全てきちんと整っていること、安心して眠れる場所があること、笑いあえる、心配してくれる家族が欠ける事なくいる事、この当たり前のことがどんなに幸せか被災地に行ってものすごくよく分かりました。震災からもうすぐ２ヶ月経とうとしていますが、いまだに行方不明者がいて、道端で偶然知り合いに会うことができて「生きててよかった」と抱き合って泣いている人たちがいます。普段の生活を送れることがどんなに幸せなことか、この自分にとって当たり前のことが奇跡という人がまだ何万人いる、ということを忘れずに生きていきたいです。

編集後記

地震大国「日本」
実に世界で起きている地震の1割は日本の周辺で発生していると言われています。

1923 年の関東大震災、1995 年の阪神淡路大震災、2004 年の新潟県中越地震など、過去幾重にも日本は大地震に見舞われ、甚大な被害を受けながらも、日本人はその度に復興し続けてきました。

2011年 3 月11日の地震の翌日、国士舘大学緊急医療支援チームは石巻へ向かいました。そして雄勝半島に医療支援隊として初めて足を踏み入れました。そのときに見た津波の被害は今でも鮮明に脳裏に刻まれています。そして、いつまでも忘れることはないでしょう。しかし、もっと忘れられないことがあります。それは避難所で身を寄せ合い、国難とも言われるほどのこの大災害に立ち向かっている被災者の方々の結束力でした。

多くの防災のマニュアルには当たり前のように書いてある「共助」という言葉。言葉で書くことは簡単ですが、普段からの近所付き合いが、いざというときに大きな力を発揮するということを改めて実感したとともに、都会で失われかけている「共助」が雄勝半島には当然のようにありました。

今回の震災では多くのものを日本は失いました。しかし、今後やるべき方向性が明確になったのも事実です。
今回の東日本大震災を経験した日本国民一人一人が後世に語り継がなければなりません。

今後、起こる可能性が高いといわれている「首都直下型地震」

この大地震に立ち向かうために、国士舘大学は教員・職員・学生すべてが一丸となり、防災・減災体制の強化、教育に取り組み、学生が社会に出たときには、防災・減災の知識を持った人材として活躍できる教育を一層強く取り組んで参ります。

最後に、今回の東日本大震災で亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を捧げ、被災された方々にお見舞い申し上げると共に、国士舘大学は防災に強い大学を目指すことをここに誓い、本報告書を閉じさせて頂きます。

石巻市での国士舘大学生ボランティア

国士舘大学　東日本大震災活動報告書　編集担当　田中秀治、喜熨斗　智也

東日本大震災支援活動報告書「絆」

平成24(2012)年3月11日　発行

発　行　者　国士舘大学体育学部
国士舘大学ウエルネス・リサーチセンター
国士舘大学防災・救急救助総合研究所
〒206-8515　東京都多摩市永山7-3-1
電話　042(339)7202

印　刷　所　株式会社リョーワ印刷
〒151-0073　東京都渋谷区笹塚3-55-8
電話　03(3378)4180 代表

Kokushikan

発行：2012年３月11日